

兵庫県文化財調査報告第41冊

庄境1号墳

—近畿自動車道舞鶴線関保埋蔵文化財調査報告V—

1987. 2

兵庫県教育委員会

庄境1号墳 正誤表

頁	該当箇所	誤	正
図版目次	図版10上	10号墓検出状況	9号墓検出状況
図版目次	図版10下	10号墓完掘状況	9号墓完掘状況
図版目次	図版11上	9号墓検出状況	10号墓検出状況
図版目次	図版11下	9号墓完掘状況	10号墓完掘状況
図版目次	図版24	中近世墓出土土器	中近世墓出土土器・古銭
4	第1表No20	中 居 城	中 尾 城
6	15行目	事 務 職 員	技 術 職 員
35	5行目	し使用された	て使用された
65	15行目	全長6.5cm	全長13.0cm
65	15行目	鐵身長3.7cm	鐵身長7.4cm
65	15行目	筥被長1.5cm	筥被長3.0cm
65	15行目	墓長2.3cm	墓長4.6cm
65	22行目	6は長さ約5cm	6は長さ約10cm
65	22行目	幅0.5cm	幅1.0cm
図版33	写真(上)No	2	3
図版33	写真(上)No	: 3	2

庄境1号墳

—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告V—



1987. 2

兵庫県教育委員会



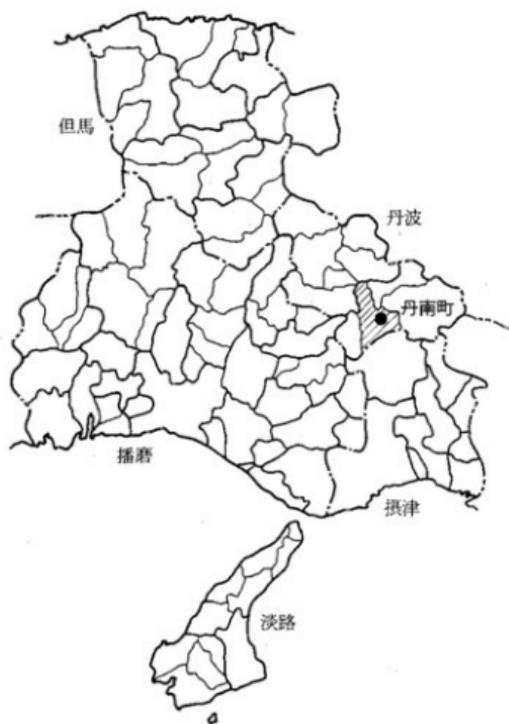
庄境 1 号墳周辺空中写真



耳環・銀象嵌鈔

例言

1. 本書は、兵庫県多紀郡丹南町大沢新字小畑山27、8-1に所在する庄 境^{しょうがい}1号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理調査は、日本道路公団の委託を受けて兵庫県教育委員会が実施した。調査は、昭和60年1月16日から3月1日までの計28日間を費した。
3. 発掘調査および整理調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財課技術職員岡田章一・渡辺 昇・別府洋二が担当した。
4. 本書で示す標高値は日本道路公団設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。
5. 遺構写真は調査員が撮影した。ただし、空中写真についてはアジア航空測量株式会社に依頼したものである。
6. 巻頭図版1の空中写真は、神戸新聞出版センター刊行の『兵庫を飛ぶ』中の「丹南町弁天周辺」を使用させて戴いた。
7. 整理作業は、一部近畿自動車道舞鶴線三田現場事務所で実施したが、大半は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。
8. 遺物写真については、森 昭氏に依頼し撮影して戴いた。
9. 執筆は本文目次に示した通りである。
10. 本報告にかかるスライドなどの資料は兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）に保管している。また、出土遺物は兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630-1）に保管している。



丹南町の位置

本文目次

例言

I	はじめに	渡辺	1
	1, 調査に至る経緯		
	2, 調査の組織		
	3, 調査日誌		
II	位置と環境	渡辺	11
III	中近世の遺構と遺物		
	1, 遺構と遺物の概要	岡田・長谷川	17
	2, 遺構と遺物の検討		
	a. 遺物の検討	長谷川	35
	b. 遺構の検討	岡田	38
	3, 小結	岡田・長谷川	40
IV	庄境1号墳の調査	渡辺	43
	1, 古墳の位置		
	2, 外形(外部施設)		
	3, 墳丘築成		
	4, 主体部		
	5, 遺物の出土状態		
	6, 小結		
V	庄境1号墳の遺物	別府	59
	1, 須恵器		
	2, 土師器		
	3, 鉄器		
	4, 耳環		
	5, 小結		
	出土馬具について(県下馬具集成表)	別府・岡村	75
VI	庄境1号墳出土遺物の保存処理と化学分析	加古	81
VII	弥生時代の遺構と遺物		
	1, 遺構(住居址)	別府	83
	2, 遺物	渡辺・大下	83

表 目 次

第1表	近畿自動車道舞鶴線関係遺跡一覧表……………	4
第2表	出土銭貨一覧表……………	30
第3表	丹有地区馬具出土古墳地名表……………	75
第4表	兵庫県下馬具出土古墳地名表(丹有地区以外)……………	77

図 版 目 次

巻頭図版1	庄境1号墳周辺空中写真(神戸新聞出版センター提供)
2	耳環・銀象嵌鈿
図版1	古墳群周辺空中写真
図版2	上 庄境古墳群遠景(北西から)
	下 庄境古墳群遠景(南から)
図版3	上 古墳群全景(調査前・1982年撮影)
	下 古墳群全景(2号墳調査後・1982年撮影)
図版4	上 石室内牛骨検出状況
	下 石室内牛骨検出状況
図版5	上 1・2号墓検出状況
	下 1・2号墓完掘状況
図版6	上 4号墓検出状況
	下 4号墓完掘状況
図版7	上 5号墓検出状況
	下 6号墓検出状況
図版8	上 7号墓検出状況
	下 7号墓完掘状況
図版9	上 8号墓検出状況
	下 8号墓断面
図版10	上 10号墓検出状況
	下 10号墓完掘状況
図版11	上 9号墓検出状況

- 下 9号墓完掘状況
- 図版12 上 墳丘断面（東側）
下 外護列石
- 図版13 上 石室堆積状況
下 古墳全景（南から）
- 図版14 上 古墳全景（西から）
下 古墳全景（東から）
- 図版15 上 奥壁
下 北側壁
- 図版16 上 石室全景
下 石室基底石
- 図版17 上 墓壇の裏込状況
下 第2次床面遺物出土状態
- 図版18 上 第2次床面全景
下 第2次床面遺物出土状態
- 図版19 上 第1次床面全景
下 第1次床面全景
- 図版20 上 第1次床面遺物出土状態
下 第1次床面遺物出土状態
- 図版21 上 第1次床面遺物出土状態
下 第1次床面遺物出土状態
- 図版22 上 弥生時代 住居跡
下 住居跡床面土器出土状態
- 図版23 中近世墓出土土器
- 図版24 中近世墓出土土器
- 図版25 中近世墓出土土器
- 図版26 古墳出土土器（須恵器）
- 図版27 古墳出土土器（須恵器）
- 図版28 古墳出土土器（須恵器）
- 図版29 古墳出土土器（須恵器）
- 図版30 古墳出土土器（須恵器）
- 図版31 古墳出土土器（須恵器）
- 図版32 上 古墳出土土器（ヘラ記号・製作技法）

	中	古墳出土土器（土師器）
	下	古墳出土耳環（保存処理前）
図版33		古墳出土鉄器（鉄鎌）
図版34		古墳出土鉄器（刀・刀子）
図版35		古墳出土鉄器（馬具）
図版36		古墳出土鉄器（馬具・釘）
図版37		弥生時代出土土器

挿 図 目 次

第1図	古墳群周辺空中写真	3
第2図	調査前の状況	8
第3図	調査風景	9
第4図	調査風景	9
第5図	調査風景	10
第6図	よせわ1号墳出土鏡	11
第7図	雲部車塚古墳	12
第8図	庄境古墳群の位置と周辺の遺跡	13
第9図	いしくど古墳	14
第10図	地蔵山古墳	15
第11図	浅香山古墳	15
第12図	諏訪山古墳	16
第13図	1・2号墓実測図	18
第14図	中・近世墓遺構配置図	19・20
第15図	3号墓出土遺物実測図	21
第16図	4号墓実測図	21
第17図	2号墓出土遺物実測図	22
第18図	4号墓出土遺物実測図	22
第19図	5号墓出土遺物実測図	23
第20図	6号墓出土遺物実測図	23
第21図	6号墓実測図	24
第22図	6号墓出土遺物実測図	24
第23図	5号墓実測図	25

第24図	5号墓出土遺物実測図	25
第25図	8号墓実測図	26
第26図	8号墓出土遺物実測図	26
第27図	7号墓実測図	27
第28図	7号墓出土遺物実測図	27
第29図	9号墓実測図	28
第30図	7号墓出土銭貨拓影図(1)	29
第31図	7号墓出土銭貨拓影図(2)	30
第32図	10号墓実測図	31
第33図	11号墓実測図	32
第34図	集石1 出土遺物実測図	33
第35図	集石2 出土遺物実測図	33
第36図	遊離遺物実測図	34
第37図	採集遺物実測図	34
第38図	古墳の位置	44
第39図	地形測量図	45
第40図	墳丘測量図	45
第41図	墳丘土層断面図(東側)	46
第42図	外護列石平面図	47・48
第43図	墳丘土層断面図(南北)	49
第44図	外護列石北側実測図	50
第45図	石室内土層堆積状況	51
第46図	第1次床面遺物出土状態	52
第47図	横穴式石室実測図	53・54
第48図	第2次床面遺物出土状態	55
第49図	須恵器実測図(1)	60
第50図	杯蓋法量図	60
第51図	須恵器実測図(2)	61
第52図	杯身法量図	61
第53図	須恵器実測図(3)	63
第54図	土師器実測図	64
第55図	鉄製品実測図(1)	66
第56図	鉄製品実測図(2)	68

第57図	鉄製品実測図(3).....	69
第58図	鉄製品実測図(4).....	70
第59図	鉄製品実測図(5).....	71
第60図	鉄製品実測図(6).....	72
第61図	耳環実測図.....	73
第62図	丹有地区馬具出土古墳分布地図.....	74
第63図	銀象嵌X線回折図.....	81
第64図	耳環X線回折図.....	82
第65図	住居址実測図.....	84
第66図	弥生土器実測図.....	85
第67図	弥生土器文様拓影.....	86
第68図	石炭実測図.....	86

I. はじめに

1. 調査に至る経過

近畿自動車道舞鶴線は、南北の横断高速自動車道として計画されたもので、県下では名神自動車道・中国縦貫自動車道・山陽自動車道に次ぐ高速道である。今までは東西を主とした道路であったが、ほぼ同時に計画・施工されている本州四国連絡道（淡路縦貫道）とともに南北の新しい交通体系で、丹波地域に新しい息吹を吹き込み、地域の活性化が期待される事業である。近畿自動車道舞鶴線は、美濃郡吉川町金会で中国縦貫自動車道と分かれる吉川ジャンクションを起点とし、三田市・多紀郡内を北進し、多紀連山トンネルを抜けて氷上郡に入り、春日・市島町を通り京都府に入り、福知山・綾部市を経て舞鶴市に至る総延長76kmの高速道路である。約45.5kmが兵庫県内を通り1市5町を通過している。昭和48年の整備計画後、県教育委員会と協議を重ねられ、昭和52年の路線発表ののち具体的な協議を行い、昭和53年度に日出坂峠以北の丹波地域の、昭和54年度に以下の摂津地域の全線分布調査を実施した。用地買収の遅れ等から分布調査に入れなかった西紀町の一部（上板井周辺）は路線発表の遅れた吉川町と三田市の一部とともに昭和55年度に分布調査を行い一応の分布調査は終了した。その後、発掘調査実施の際や、立木伐採後など随時再分布調査を必要に応じて行っている。分布調査の結果、河津館跡・野村石刻出土地・箱塚古墳群などの周知の遺跡を含めて53地点を確認した。庄境古墳群も周知の遺跡の1つに数えられている。53地点の内分けは別表の通りであるが、昭和53年度の丹波地域の分布調査では周知の遺跡7ヶ所と新たに確認された遺跡16ヶ所をはじめ立会調査・再確認調査が必要な地点、6ヶ所が認められた。（氷上郡内は全て遺跡として、調査が実施され、さらに多利・松の本古墳群のように遺跡は増加している。）昭和54年度は三田市域の分布調査で16ヶ所の地点が確認された。須恵器窯跡が主で、周知の遺跡は含んでいない。昭和55年度は吉川町域と一部の補足調査（末買収による分布調査未実施のため）を実施した。吉川町域では5地点を確認したが、全て近世以降のものであった。仮称三田インター予定地内では、遺跡は確認されなかったが、西紀町下板井周辺では和寿園用地内に中世山城が、下の水田で灰釉陶器が採集され遺跡は増加した。

分布調査終了とともに発掘調査の依頼が、日本道路公団から県教育委員会へあり、協議の上昭和56年度の仮称丹南インター予定地内の杉・西吹両遺跡の確認調査から手掛けられ、引き続き庄境2号墳の全面調査が実施された。昭和57年度以降調査は本格化し、昭和59年度は県教育委員会の担当調査員の半数以上が従事し、多い時は3分の2以上の職員が近畿自動車道舞鶴線関係の調査を担当していた。昭和60年度も半数の職員が調査を継続し、丹波では初田館跡（酒井館跡）を除く調査を終了し、三田市域の調査を残すだけとなり、昭和61年度で調査を終了する予定である。

庄境古墳群は2基から成る古墳群で大沢新集落の墓地となっており、墳丘にも近現代の墓が築かれていた。地元ではツカ（古墳）としての認識も一部ではあったものの意識としては墓地の一部と考えられていたようである。墳丘にも数多くの墳墓が営まれており、自動車道建設に伴って墓地移転が迫られていた。路線外の東方の山腹に小畑山墓地として移すこととなったが、一時に全てを移すことは種々の事情から不可能であった。そのため、昭和56年度に2基の古墳の調査を実施する予定であったが庄境2号墳だけを行い、その後の墓地移転を待って1号墳の調査を実施することになった。庄境2号墳は、昭和56年度に調査され翌年度に調査報告書が刊行されているので、詳細は報告書に譲ることとする。

昭和59年度になって、小畑山墓地も一部完成し、1号墳及び周辺の墓地移転も行われ始めた。1号墳の現状は、天井石の一部は落ちているものの天井石を除いて保存状態の良い横穴式石室を主体部とする古墳で、墳丘もほぼ完存の円墳であったが、墓地移転工事によって半壊された。墳丘内に多くの墓が綿々と営まれ、新しいものは昭和50年代の卒塔婆が立てられた状況で、明らかに生きた「ハカ」であり、完全に墳丘を保存することは出来なかったであろうが、損壊を受けたことは残念であった。間接的な作業で関係者が多く、連絡が複雑になっていたことが惜まれるとともに、今後このようなことがないことを望み教育委員会としても細かな対応が必要なのかもしれない。

墓地移転に伴い近現代の墓標を移す作業中に墳丘の東半分が削平を受けたもので、昭和59年5月庄境1号墳破壊の事実を確認し、現地にて日本道路公団三田工事事務所と兵庫県教育委員会社会教育・文化財課担当職員で現地立会を行い、古墳の損壊状態を確認するとともに現状での保存を図り、今後の対応策を協議することとなった。直接損壊にあたった工事は近畿自動車道建設に伴う墓地移転で丹南町産業課を主体として実施されていた。そのため、県教育委員会、西紀・丹南町教育委員会、日本道路公団、丹南町産業課の四者による協議が行われた。県教育委員会は、古墳破壊ということに対する措置を講ずる必要もあるが、年度当初の時期で年度計画を策定した後であり、調査員は近畿自動車道を中心に山陽自動車道・本州四国連絡道などに伴う調査のため県下各現場で調査に従事しており、早急な対応は不可能であった。近畿自動車道関係の調査員を回すことも考えられたが、春日インターチェンジ予定地内の春日七日市遺跡のように、無理な状況で調査終了時期を限られている調査のため中断することは不可能で、庄境1号墳の調査対応は出来なかった。西紀・丹南町教育委員会に調査を実施して戴くなどの対応方法を検討したが実現しなかった。その中で地元からの墓地移転早期完成の声は終始聞かれたが、春の彼岸までにはという最終期日を迫られたため、日本道路公団の委託を受けて調査を実施していた山陽自動車道に伴う調査を中断し、庄境1号墳の発掘調査を行うこととなり昭和60年1月16日から作業を実施した。

調査に入る前は1基の古墳と庄境2号墳の調査結果から数基の中近世墓の調査を予想してい

たが、中近世墓は、11基以上あり、石敷の遺構もあり、近現代墓も存在した。さらに古墳以前の弥生中期の集落も確認した。そのため調査期間が若干延びることになったが、それなりの成果は上ったものと思われる。調査対象地が限られ最少範囲になっていたことが惜まれる。弥生時代の遺構は中期の住居址1軒しか検出していないが、南方にも包含層が崖面に見られ遺構の広がりも確実である。水田面までは広がるかどうかは疑問であるが、小規模な集落が営まれていたものと思われる。

調査終了間近から近畿自動車道舞鶴線三田現場事務所で整理作業に入り、出土鏝に象嵌があることが2月28日判明した。昭和60年度下半期から兵庫県埋蔵文化財調査事務所で本格的に整理作業に入り、昭和61年度に継続して作業を実施した。

調査に入った段階で既に丹南トンネルは開通し、工事用道路を頻繁に工事用車両が通行して本線工事が行われており、庄境2号墳は消滅していた。また小畑山墓地も一部分は完成しており石垣の裾は墳丘近くに築かれているという条件的には恵まれない調査で、半壊状態の古墳が残されただけの状況で、古墳の立地などは無視された状態であった。

調査に際して、損壊を受けた石材除去などの重機使用は本線丹南工区を受注していた日東建設株式会社の協力を得、必要に応じて随時使用させて戴いた。地元大沢新の方々には墓地の土地の一部をお借りし器材置き場のテントを建て水道を借用させて戴き感謝の意にたえない。調査によって検出された中近世・近代墓の人骨を無縁仏として埋葬して戴き、地元との窓口となり調査にも参加して戴いた区長小林麻二氏をはじめ大沢新の方々の多大な協力を得た。丹南町企画課にも作業員参集の協力を得たが、冬季という時期の悪さもあって人員がそろわなかったところ、岡本喜一郎氏にお願いし、6年前の篠山町寺内庵寺などの発掘調査の旧知の縁で篠山町の方々にも遠路参加戴いた。急迫を余儀なくされた調査ではあったが、地元の方々をはじめとする協力により無事終了することが出来た。



第1図 古墳群周辺空中写真

第1表 近畿自動車道舞鶴線関係遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種類	確認	全面	報告書
1		美濃郡吉川町福吉	炭 窯	59		
2		"	"	59		
3		"	"		59	
4		"	"	59		
5		"	近 世 墓	60		
6	高川古墳群	三 田 市 藍 本	古 墳		60	
7		" "	窯 跡 ?	59		
8	古城窯跡	" 西相野	窯 跡		61	
9		" "				
10		" "				
11	向上古城窯跡	" "	窯 跡		61	
12		" 上相野				
13		" "				
14	中池ノ内窯跡	" "	窯 跡		61	
15	西谷池窯跡群	" "	窯 跡		60	
15-2	寄合谷窯跡	" "	窯 跡		61	
16		" "			61	
17		" "				
18	萩ノ尾1号窯跡	" "	窯 跡	59	59	
19	木戸窯跡	" 下相野	窯 跡		60	
20	中居城跡	" "	城 跡		61	
21		" 内 神	散 布 地	59		
22		" "				
23	篠山城採石場	丹南町当野・栗積野	採 石 場	59	60	
24	栗積野古墳	" 栗積野	古墳状起伏	59		
25	真南条下遺跡	丹南町真南条下	散 布 地	58		
26	初田遺跡	" 初田	"	58		
27	初田館跡(酒井館跡)	" "	館 跡	59	61	
28	庄境古墳群	" 大沢新	古 墳		56-58	I・V

No	遺 跡 名	所 在 地	遺 跡 の 種 類	確認	全面	報告書
29	杉 遺 跡	〃 杉	散 布 地	56		I
30	西吹 遺 跡	〃 西吹	〃	56		I
31	西木之部遺跡	西紀町東木ノ部	〃	57		
32	西木之部遺跡	〃 〃	集 落 址	57	57-59	
33	〃	〃 〃	古墳状起伏	57		
34-1	内場山城	〃 下板井	城跡・集落址	60	60	
34-2	多々奴比古墳	〃 〃	古墳状起伏			
35	板井・寺ヶ谷遺跡	〃 上板井	集落址	57	58-59	
36	上板井古墳群	〃 〃	古墳・経塚	57	58	III
37-1	箱塚古墳群	〃 小坂	古 墳		60	
37-2	沢ノ浦坪古墳群	〃 上板井	〃		58	VI
38	小坂遺跡	〃 小坂	散 布 地	57		
39	小坂古墳群	〃 〃	古墳状起伏	57		
40	河津館跡	春日町東中	館 跡	58	59	VI
41	国領遺跡	〃 国領	集 落 址	58	59-60	
42	棚原散布地	〃	散 布 地			
43-1	野村遺跡	〃 野村	集 落 址	57	58	
43-2	山垣遺跡	〃 〃	〃	57	58	
44	春日七日市遺跡	〃 七日市	〃	57-58	59-60	
45	多利七日市遺跡	〃 多利	散 布 地	57		
46	多利向山古墳群	〃 〃	古 墳	58	57-59	IV
47-1	多利遺跡	〃 〃	集 落 址	57	58	VII
47-2	松ノ本古墳群	〃 〃	古 墳		58	I
48	南 遺 跡	市島町南	散 布 地	57		
49-1	南 1 号窯	〃 〃	窯 跡	57	57	
49-2	元嚴明寺跡	〃 〃	寺 跡	57		
50	南古窯跡	〃 〃	窯 跡	58		
51	喜多中世墓群	〃 喜多	中 世 墓	57	58	
52	上牧古窯跡群	〃 上牧	窯 跡		57	
53	〃	〃 〃	〃		57	

2. 調査の組織

発掘調査・整理調査ともに日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となった。

(1) 昭和59年度発掘調査の体制

調査事務 社会教育・文化財課

課長	西沢良之
文化財担当参事	大西章夫
副課長	森崎理一
課長補佐	和田富夫
管理係長	小西清
主査	八家均
〃	坂本豊明

埋蔵文化財

調査係長	榎本誠一
事務職員	大平茂

調査担当 社会教育・文化財課

技術職員	岡田章一
〃	渡辺昇
〃	別府洋二

調査参加者

岡本喜一郎・倉垣義雄・中井努・北場忠雄・岡本昭範・金井良雄・酒井章・金井正雄・小林麻二・前川定男・藤田雪乃・三角春江・北村富貴子・北村美よの・北村幸子・倉垣郁子・西本千代乃・泉本さとみ・東前祐子・加藤真理

(2) 昭和60年度整理調査の体制

調査事務 社会教育・文化財課

課長	北村幸久
文化財担当参事	森崎理一
副課長	黒田賢一郎
課長補佐	和田富夫
管理係長	小西清
主査	八家均
〃	坂本豊明
事務職員	松本豊彦

埋蔵文化財

調査係長 榎本誠一
技術職員 加古千恵子
" 森内秀造

調査担当 社会教育・文化財課

技術職員 岡田章一
" 渡辺 昇
" 別府洋二

調査補助員

森岡みゆき・西上知子子・岡村真理子・吉村幸子・伴 悦子・池田早恵・池田紀子

(3)昭和61年度整理調査の体制

調査事務 社会教育・文化財課

課 長 北村幸久
文化財担当参事 森崎理一
副 課 長 黒田賢一郎
課長補佐 福田至宏
管理課長 小西 清
課長補佐兼埋蔵
文化財調査係長 大村敬通
主 査 小川良太
主 任 加古千恵子
事務職員 松本豊彦
" 足立彰久
技術職員 渡辺 昇

調査担当 社会教育・文化財課

主 任 岡田章一
技術職員 渡辺 昇
" 別府洋二

調査補助員

森岡みゆき・伴 悦子・岡村真理子・小川真理子・池田早恵・八木和子

3. 調査日誌

昭和60年1月8日 (火) 晴れ

調査打合せ。丹南町企画課に作業員の依頼をする。発掘調査届用現況写真撮影。

1月16日 (水) 晴時々曇り一時にわか雪
現況写真撮影後伐採。墳丘上に二次堆積土が乗っており、旧地表を出す作業始める。

1月17日 (木) 曇り時々わか雪
重機使用し、二次堆積土除去。明らかに移動している石材も除去する。地形測量実施。石室検出作業始める。須恵器・獣骨出土。

1月18日 (金) 晴れ
削平を受けた断面を清掃。墳丘築成状況観察出来る。石室墓壙と外護列石確認する。墳丘畦畔残して表土除去開始。石室内奥壁に沿って石室幅いっぱいに牛骨検出する。1体分ほぼ完存。

1月21日 (月) 晴れ
表土除去後、2層目も掘り下げ始める。新たに近世墓2基検出。外護列石は斜度が大きくなる。弥生期石鏃出土。

1月22日 (火) 晴れ
墳丘断面清掃し写真撮影。石室内牛(馬)骨写真撮影後取り上げる。奥壁側に腹を、北側に頭を置き脚は曲げて埋葬されている。墳裾北側に石敷がある。近世墓順次清掃し写真撮影。

1月23日 (水) 晴れ
石室横断の畦畔残して掘り下げる。須恵器出土するが攪乱されており、北宋銭も出土。墳丘断面実測。近世墓丹波焼埋甕実測。外護列石清掃しつつ検出作業行方。

1月24日 (木) 晴れ時々わか雪
石室床面検出。奥壁沿い・石室中央・袖部?で遺物集中している。横断畦畔写真撮影。丹波焼埋甕基エレベーション入れ取り上げる。甕内に蓋石落石。墳丘から新たに近世墓2基確認。1基は埋甕。墳丘北側石敷清掃。多紀文化顕彰会の方々見学。

1月25日 (金) 曇り時々わか雪
石室内畦畔実測後除去。石室内清掃作業。明らかに浮いている遺物実測後取り上げ。墳丘上実測のため割り付ける。埋甕2実測。墳裾外はベース検出終了。

1月28日 (月) 晴れ
石室全体清掃後写真撮影。外護列石清掃。近世埋甕2、エレベーション記入しつつ甕内掘り下げる。人骨と土師器小皿2枚出土。図記入後取り上げ。

1月29日 (火) 晴れ



第2図 調査前の状況



第3図 調査風景

石室内遺物出土状態実測後取り上げる。さらに下げるが10cm程度で下層床面がありそうで、須恵器・鉄鏝など出土。近世墓写真撮影。

1月30日 (水) 雪

積雪のため作業中止。

1月31日 (木) 晴れ時々曇り

石室下層床面清掃し出土状態図作成。近世墓実測継続。墳丘北側へ石敷広がるので拡張。近世墓拡張部分で確認する。丹波焼埋甕である。

2月1日 (金) 晴れ

石室下層床面写真撮影後、エレベーション入れ遺物取り上げる。袖部かと思われた石の下からも遺物出土し、落石と判明。昨日確認した埋甕は伏せた(倒置)状態であったが木の根で擾乱されている。近世墓実測継続。

2月4日 (月) 晴れ

石室掘り下げ。奥半分はベース検出し墓壇明瞭に判る。石室開口部付近で一群の土器出土し、写真撮影・実測・取り上げ。近世墓エレベーション記入し、石材除去。墓壇検出作業。2基から人骨出土。

2月5日 (火) 曇りのち雨

石室開口部付近落石チェーンブロックで除去。落石下から墳など見られ損壊時の落石と考えられ、下層も二次堆積土で床面残存せず。近世墓の1基から六文銭出土。

2月6日 (水) 晴れ

石室全体清掃し写真撮影。全景写真も各方向から撮影。終日撮影に費す。

2月7日 (木) 晴れ

全景写真撮影後、全体割り付け。中近世石敷や外護列石実測開始。

2月8日 (金) 晴れのち曇り

実測継続。

2月12日 (火) 晴れ時々曇り

実測継続。外護列石は終了。墳丘平板測量行方。2号墳の墳裾かろうじて残存していたので位置関係を図に入れる。

2月13日 (水) 曇りのちみぞれ

石敷実測継続。外護列石立面図作成。

2月14日 (木) 雪降ったりやんだり

石室開口部を除く3方向に断割トレンチ設定



第4図 調査風景



第5図 調査風景

し掘り下げる。南北側トレンチ実測。埋篋3取り上げ。副葬品として土鈴あり。石室割り付け。

2月15日 (金) 晴れ

石室平面図作成。石敷実測終了。東側断割トレンチ土層断面図作成。3本のトレンチ写真撮影。テント・発掘器材など片付け。次の調査地である三田市上相野の萩ノ尾1号窯(No18地点)へ搬出。

2月18日 (月) 晴れ

石室奥壁実測。

2月20日 (水) 曇り時々小雨

石室実測継続。

2月21日 (木) 曇りのち雪

石室実測終了。石敷エレベーション入れる。バックホーを使って石室基底石を残して除去。天候不順のため航空写真セスナ飛行せず。

2月22日 (金) 晴れ

朝アジア航測によりセスナで空中写真撮影。石室内の1体分の骨をはじめ出土した獣骨を篠山保健所所長補佐橋氏に鑑定して戴く。石室内の骨は牛で、他に犬・牛・馬・豚・山羊の骨が含まれる。

2月25日 (月) 晴れ

石室基底石だけの平面プランが把握出来る状態で清掃し写真撮影。バックホーにより墳丘掘り下げ地山を出す。石室開口部北西部で弥生住居址確認。

2月26日 (火) 晴れ時々曇り

住居址検出作業。周辺で他の遺構は認められない。

2月28日 (木) 雨

作業中止。室内での鉄器鋳取り作業で1月25日に上層床面から出土した罫に象嵌があることを確認。表裏とも施文。

3月1日 (金) 曇り

住居址ビット掘り下げ、全景写真撮影。実測・エレベーション記入し、庄境1号墳の調査終了する。

3月8日 (金) 雨

出土人骨無縁仏として納骨して戴く。

Ⅱ. 位置と環境

庄境古墳群は、兵庫県多紀郡丹南町大沢新字小畑山に所在する古墳群で、眼下に流れる田松川は近代になって整備された運河であるが、現在川の中の分水嶺と標示されているように当地周辺が南北に水を分けていたことは事実で低湿地化していたものと思われる。篠山盆地自身が「昔は湖であった」と伝えられているように湖水説は古くから説えられていた。しかし、遺跡の分布状況を詳細に検討すると山裾に限らず盆地中央部でも有舌尖頭器が確認されており、少なくとも考古学的分野で扱った時代に限れば湖は存在しない。それは昭和59年度調査された板井・寺ヶ谷遺跡での成果からも首肯出来る。ただ、地元で湖水説が一般的なのは篠山川の匂配が緩く氾濫を繰り返していたことに起因するかもしれない。緩やかに流れる篠山川は、文化を南北に分けることなく幅4km前後、長さ15kmの篠山盆地の中心の役割を果たしている。基盤層は篠山層群と呼ばれる古生層から成っている。周辺は全て山塊であるが、比較的起伏の少ない高原状の丹波山地に囲まれており、北方のみ多紀アルプスと呼ばれる御嶽(793m)を最高峰とし西ヶ嶽(727m)、小金ヶ岳(726m)などの急峻な連山が屹立している。四周の山間部からの水は西紀町友河川や庄境古墳群の眼下の田松川や真南条谷を流れる真南条川を除いて篠山川に合流している。狭義の篠山盆地を中心に多くの谷が四方に延び、広義の篠山盆地を形成している。

多紀郡は「車塚一帯」で代表されるように古くから文化財に対する理解が高く、各種の雑誌も刊行され、遺跡の確認なども行われているが、あくまで分布調査が主であった。昭和47年に行われた藤岡山遺跡の調査は最初の調査でその後圃場整備に伴う調査が続けられている。また、昭和56年度からは近畿自動車道舞鶴線に伴う調査が大規模に実施され多くの成果を得ている。

最近まで篠山盆地の人類の始まりは尖頭器の文化からではと思われていたが、西紀町上板井の板井・寺ヶ谷遺跡の調査により大きく変化した。縄層となる始良丹沢火山灰の存在で約2万年前を前後する2時期の面を確認しており、礫群などの遺構も検出されており近畿でも最古の遺跡として注目されている。近くの西木之部遺跡でもプライマリーな層が確認されナイフ形石器が出土しており、篠山盆地でも今後旧石器の遺跡は増加するものと思われる。旧石器終末～縄文時代草創期といわれる尖頭器は郡内の5ヶ所で出土している。藤岡山遺跡の木葉形を除くと有舌尖頭器で、出土地は盆地北側に限られている。

縄文時代になると遺跡は増えるものの大半は石器採集にとどまっている。藤岡山遺跡で後期



第6図 よせわ1号墳出土鏡

の深鉢などの土器群がある程度で、他に二之坪・下浅見（篠山町）谷山（丹南町）でも後期の土器が出土している。藤岡山遺跡は晩期まで継続しており、丹南町味間南の住吉川右岸遺跡でも突帯文土器が出土している。縄文遺跡も盆地北側に片寄っているが、谷山遺跡の確認で南側にも遺跡の存在が明らかとなった。今田町黒石でも石鏃が出土しており、そのタイプから縄文期のものと思われる。

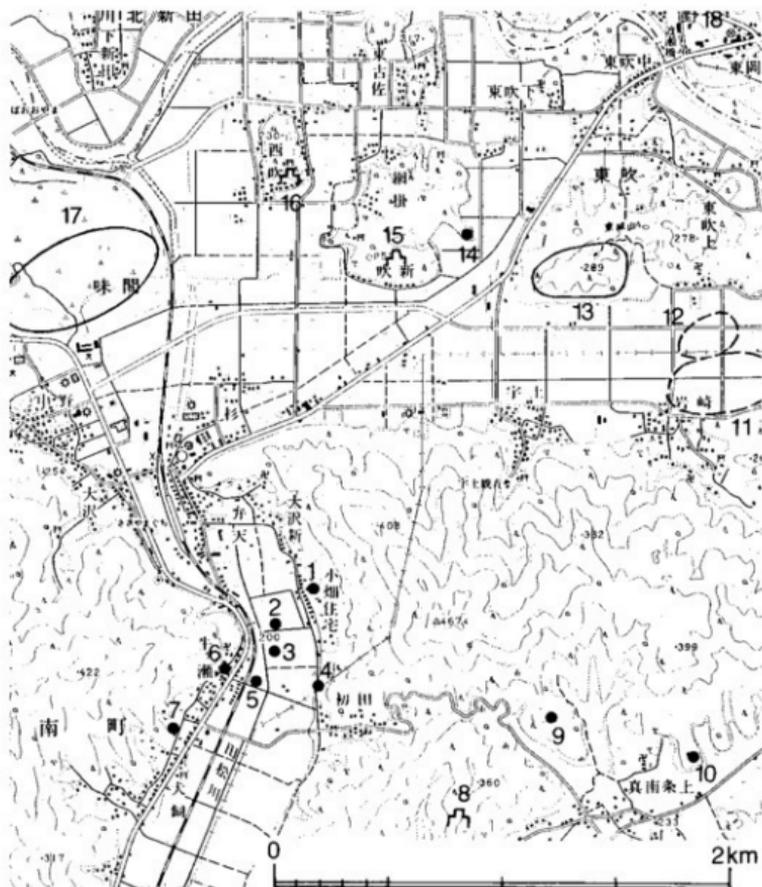


第7図 雲部車塚古墳

弥生時代になると遺跡はさらに増加し、盆地及びその周辺も含めて土器が採集されている。ここ数年の調査で、板井・寺ヶ谷、内場山、西木之部の各遺跡で各種遺構が確認されており、整理が進むと篠山盆地の標式となるであろう。調査が行われた遺跡で今まで公開されている遺構は、藤岡山遺跡の方形周溝墓と雲部車塚周堤帯の調査で検出された土壇墓群だけである。ともに中期の遺構である。表面採集の資料も含めると、篠山盆地内や大山川流域はもちろんのこと遺跡分布の範囲は広がっていく。宮田川沿いの西紀町南西部の地区は近畿自動車舞鶴線建設の路線にあたっていたため、多くの成果を上げた遺跡が確認されている。盆地内でも、篠山城域下は湖沼と考えられていたが、西町で弥生土器が採集され、盆地縁辺部以外にも弥生時代の分布範囲が広がっていたことが明らかになっている。庄境古墳群の近辺でも南方の水田中に又ヶ田坪・稲隅・堀ノ内の各遺跡が立地している。稲隅遺跡からは石剣が出土したと伝えられているが、明らかではない。庄境1号墳墳丘下層からも中期後半の住居址を検出しており、小面積ながら土器の散布地域が南側の谷部までの範囲が広がっている。山麓部の立地の良いところは、他地域と同じく遺跡の存在する可能性が求められる。篠山盆地一帯でも同様のことが考えられ、圃場整備事業などに伴う調査で弥生土器が出土している遺跡が多数ある。前期（新段階から後期末までの資料は断片的にあるが、良好な資料は少ない。

弥生時代後期末から古墳時代にかけての集落の調査例は近時になって増加し、近畿自動車道に伴う調査で、西木之部・内場山・板井寺ヶ谷で堅穴住居址・土壇群・墳丘墓・土器棺などが検出されている。また、圃場整備事業による調査でも籠原・雄花・竜門寺（以上丹南町）などの遺跡で多数の遺構が調査されている。住居址に限って見ても、庄内併行期は西木之部・内場山で布留併行期も前記2遺跡に加えて竜門寺、寺内（篠山町）の4遺跡で、須恵器を出土する6世紀代の住居址は内場山・竜門寺・籠原・雄花などで確認されており、年々資料は増加している。なかには掘立柱建物址と共存する例もある。

多紀郡の古墳は、大半は後期古墳で、中期に属する古墳が十数例、前期古墳は2基を確認しているにすぎない。前期の所産である古墳は、内場山S X 03と前山古墳（篠山町新荘）の2例



- | | | | |
|-----------|----------|---------|------------|
| 1 庄境古墳群 | 2 又ヶ田坪遺跡 | 3 初田館跡 | 4 稲隅遺跡 |
| 5 堀ノ内遺跡 | 6 大將軍古墳 | 7 平尾山古墳 | 8 中山城跡 |
| 9 打掛山古墳 | 10 岡崎山古墳 | 11 岩崎遺跡 | 12 岩崎四の坪遺跡 |
| 13 西城山古墳群 | 14 薬師山古墳 | 15 網掛城跡 | 16 西吹城跡 |
| 17 西山古墳群 | 18 権現山遺跡 | | |

第8図 庄境古墳群の位置と周辺の遺跡

である。内場山例は墳丘墓と称されているもので、素環頭大刀などが出土している。前山古墳は堅穴式石室を内部主体とする円墳で、内場山S X03が弥生から古墳時代にかけての墓で、弥生時代の葬制を強く残していることから、唯一の前期古墳と言えるかもしれない。しかし、前山古墳は支尾根突端に築かれた小規模の古墳で調査されるまで未確認であったことを考慮するならば、未確認の前期古墳が残されている可能性も残されている。堅穴式石室の木口側に接して布留併行期の土器棺も検出されており、純然たる畿内型の古墳とは言えない。庄境古墳群の南東の真南条谷の打掛山から鏡が出土している。尾根上で単独出土と伝えられるが、木棺直葬の古墳の可能性が高い。内行花文鏡で前期末から中期にかけてのものと思われる。



第9図 いしくど古墳

中期になると、雲部車塚古墳が篠山盆地の北東隅である初井川と篠山川の合流点近くに築かれている。県下第2位の規模である全長140mの前方後円墳で、四道將軍の1人である丹波道主命の墓と伝えられ陵墓参考地となっている。内部主体は、長持形石棺を保有する石室で甲冑類・刀などが出土しており、埴輪列も囲繞している。雲部車塚古墳の存在は、篠山城とともに多紀郡の郷土史研究を進める上での核になっていると言っても過言ではない。雲部車塚古墳を挟むように2基の方墳が存在する。東に1辺35mの北条古墳(篠山町細工所)が、西に1辺30mの姫塚古墳(篠山町東本荘)が位置している。ともに円筒埴輪を出土し、埴形が同じことなど共通点が多いが、雲部車塚古墳との直接的な関係と考えるのは妥当ではない。6基以上の陪塚の存在は確実であるが、2基の方墳は時期的に下るもので、系譜的に結びつけられるのが限度であろう。両方墳と同時期の古墳は盆地内に散在しており、篠山川を隔てての差は分布上からは認められない。北条古墳と同じく、家形埴輪を出土している青山台古墳(篠山町野間)が北岸に位置している。盆地西側には郡家古墳群がある。県下第2位の円墳である径60mの新宮古墳を中心として碁石塚・茶ノ木塚・玉子塚などで形成された古墳群である。盟主墳の新宮古墳は幅10mを越える周溝を有しているが、その他の古墳も調査された碁石塚は周溝を持っていた。出土遺物は皆無であるが、墳丘規模などから盛期の古墳群と思われる。郡家古墳群西方の丘陵尾根上に位置する八幡山古墳(篠山町西浜谷)は前方後円墳で同時期の可能性が考えられる。南側には小形の前方後円墳である鞍塚古墳(篠山町野々垣)と宝地山1号墳(篠山町曾地口)があり、中期でも新しい段階の古墳と思われる。西紀町上板井の上板井古墳群も4世紀末～5世紀前半の古墳群である。尾根上の古墳で2基から成り、外部に列石を有する13mと14mの円墳である。1号墳は4基の主体部を持ち剣・斧などの鉄器類が2基の主体部に副葬されていた。2号墳は、

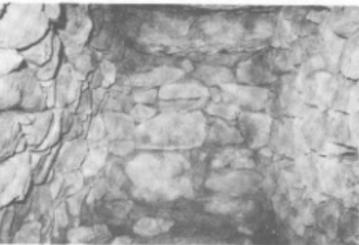


第10回 地蔵山古墳

単独埋葬で墳丘中央に木棺を築いている。棺内から内行花文鏡と玉類が棺外から刀子が出土している。尾根上の占地から1号墳の方が先行して構築されたと思われるが、4基の主体部の埋葬時間差と2号墳の構築の時期関係は不明である。2基間に複数埋葬と単独埋葬の差が認められ、一つの画期とも考えられる。後期になると、古墳の数は増大する。後期のなかでも先んじて築かれた古墳は、大山地に数多く見られる。西山北古墳(丹南町西古佐)、大滝2号墳(丹南町大山下)、今寺1号墳・金倉山古墳(丹南町北野)であり、大滝2号墳は小形の前方後円墳で、全長20mと規模が極めて小さく特徴的な古墳である。円筒埴輪列を巡らし、主体部から重圓文鏡や鉄鏃などが出土している。同じく大山谷の北野の宿山1号墳も重圓文鏡を出土しており、前後する時期の古墳と思われる。大山川沿いの丘陵に後期始めの古墳は集中しており、それ以後も古墳は築造され続け、微高地には雄花・籠原などの集落遺跡が営まれている。古墳群は、群集するものは少なく、廊下古墳群の9基などが多い例で、ほとんどは2~4基で構成されている。その中で長安寺の峠尻4号墳、北野の半鐘塚は前方後円墳である。山田2号墳からは双龍環頭大刀が出土している。

大山谷の西山北古墳などにやや遅れて、四神四獣鏡・環鈴などを出土したよせわ1号墳が築かれたものと思われる。鏡から見ると、遡るように思われるが環鈴から見ると6世紀初頭の時期が与えられると思われる。よせわ2号墳も近接した時期の古墳であろう。篠山町東岡屋の権現山古墳なども出土遺物はないものの比較的近い時期の古墳と考えられる。権現山の山裾からは古式の須石器が出土しており、注目される。

横穴式石室を主体部とした後期の古墳は、盆地内の独立丘陵をはじめ周辺の山麓に数多く築造されている。多数の古墳が群集する古墳群は少なく、岩井山古墳群(篠山町村雲)の13基を最高に、ほとんどは数基で構成されている。庄境古墳群のように2基から成るものや単独で存在する例も多く、古墳の集中度は高いとは言えない。古墳の分布は篠山盆地周辺の丘陵部と篠山川、武庫川やその支流周辺に限られる、初井川などは合流点に近い水田面積の広い部分に限られるが、黒岡川・藤岡川・小枕川などは比較的谷奥部まで古墳が立地している。基数だけから言えば大山地が卓越して古墳の数は多い。古



第11回 浅香山古墳

墳について見て見ると、盆地東端部の初井川と篠山川の合流点付近に興味深い古墳が存在する。小田中の稲荷山山頂にある稲荷山古墳は、平面T字形の特異な横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳である。篠山川を隔てた村雲の岩井山古墳群中の3号墳は、石棚を有する石室で、その南の丘陵にある地藏山古墳は、庄境1号墳と同じく無袖の大形の横穴式石室である。初井川との合流点東側の井串には胴張りの顕著なスズ岡山古墳が存在する。



第12図 諏訪山古墳

出土遺物から見てみると、装飾大刀を出土した古墳が散見される。丹南町大山下の山田2号墳からは単鳳式の環頭が出土しており、現在大山小学校に保管されている。西紀町上板井の沢ノ浦坪2号墳からは、銀象嵌の施された鍔・柄縁金具・鞘尻金具などが出土している。無袖の横穴式石室である。篠山盆地南側の奥谷川によって開折された小さな谷の奥部に立地する奥谷無丸古墳（篠山町殿町）からは単龍式の環頭が出土している。上宿の宝地山2号墳からは、七鈴鏡が出土し、雲部車塚古墳北方の県守口古墳からはカラス貝が杯のセットのなかに入って出土したことなども特記されよう。現在のところ、断片的ながら遺構、遺物ともに興味ある事実が判明しているが、小地域ごとに特徴が認められる。全体的な特徴は、横穴式石室を主体部とする古墳が多数を占め、なかでも無袖の石室が多いことであり、単独か3～6基程度が大形で群集しないことである。大形の横穴式石室は、洞中1・2号墳（篠山町曾地中）、山ノ谷古墳（篠山町県守口）、いしくど古墳（篠山町熊谷）などが列挙出来る。洞中1号墳の石室が最大で、全長15m最大幅2.4mを測る巨石墳である。大形の石室の中にもいしくど古墳や岩倉谷古墳（篠山町小田中）、地藏山古墳のように無袖の石室が見られる。庄境1号墳も開口部は損壊を受けて不明であるが、同じような石室であったろうと思われる。

律令期になると、官道が整理され、篠山盆地も山陰道が通っていたはずで、山陰道が主なルートとなり他の道は間道となっていく。奈良時代の寺院は、川の北側で寺内遺跡が南側には竜門寺遺跡が建立されたようである。ともに明瞭な伽藍配置や規模はわからないが近接したところに瓦窯を持っており、寺院と考えて問題ないと思われる。川の南北いずれも山陰道が通っていたかは判然としない。ただ、寺内遺跡の西方の東浜谷遺跡から「郡」の刻印のある須恵器が確認されてから、東浜谷遺跡周辺を郡衙に、そして北側の道が山陰道と推定する意見が強くなってきた。

周辺一帯は、東寺領大山荘で代表されるように多くの荘園が設けられたところで、庄境古墳群周辺は奈良・平安時代は仏性院領大沢荘であった。ただ遺跡名が示す庄境は明確ではないが、大沢荘と酒井荘の境界と考えるべきであろうか。

Ⅲ. 中・近世の遺構と遺物

1. 遺構と遺物の概要

庄境古墳群は1号墳、2号墳とも最近まで周辺が墓地として利用されていた。今回の調査では現存の墓石を移設した後、墳丘及び墳裾の表土を除去した結果、墳丘から墳裾にかけて11基の土壌が検出された。これらの土壌は、それが墳丘及び墳裾に位置していること、墳内に骨片を含むものがあること、副葬品と考えられる土師器皿、銭貨、鉄製品などを出土するものがあること、上面に集石あるいは墓標が見られることなどの理由から墓壇群であると判断される。さらに出土した遺物から見ると、中世の土器を含むものが2基、近世の土器を含むものが5基、遺物を伴わず時期の決定が出来ないものが4基の3種に区分出来る。また、墳丘の北側裾部及び東側裾部では集石(集石1、2)が見られ、集石の間に中世の須恵器片の出土が見られた。このため、集石を除去した後、下面で墓壇の検出を試みたが、墓壇などの遺構は検出されなかった。また石室内では近代以降のものと思われる牛骨の埋葬が検出された。以下これらの遺構、遺物についてその概要を述べることにする。

石室内埋葬

石室内で、流土を排除中に検出された牛の埋葬である。牛骨は一頭分がほぼ完存しており、奥壁の南東側で頭部を北西に向けた形で検出された。埋葬時期は確定出来ないが、流土中に酸化コバルトで施文した染付磁器を含んでいることから、少なくとも埋葬の上限は明治以降にもとめられる。

1号墓

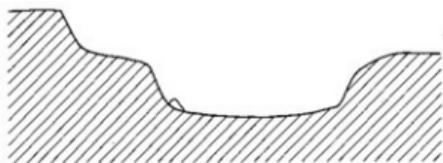
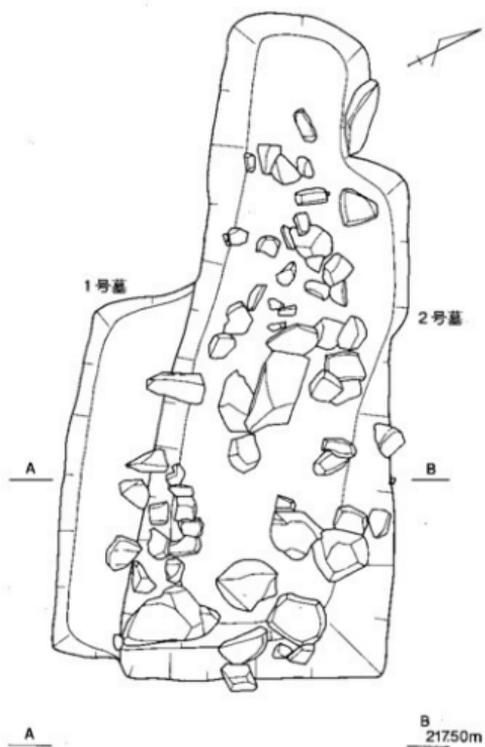
遺構(第13図)

1号墓は墳丘上の北側部分に位置する。2号墓によって墓壇の南西部分が切られているため墓壇の規模、平面形状は明らかではないが、南西辺の長さは120cm、確認面からの深さは約20cmを測る。墳内からは遺物の出土は見られないが、遺物の出土が見られ、ある程度時期がおさえられる2号墓によって切られているため、2号墓よりは時期の先行するものである。

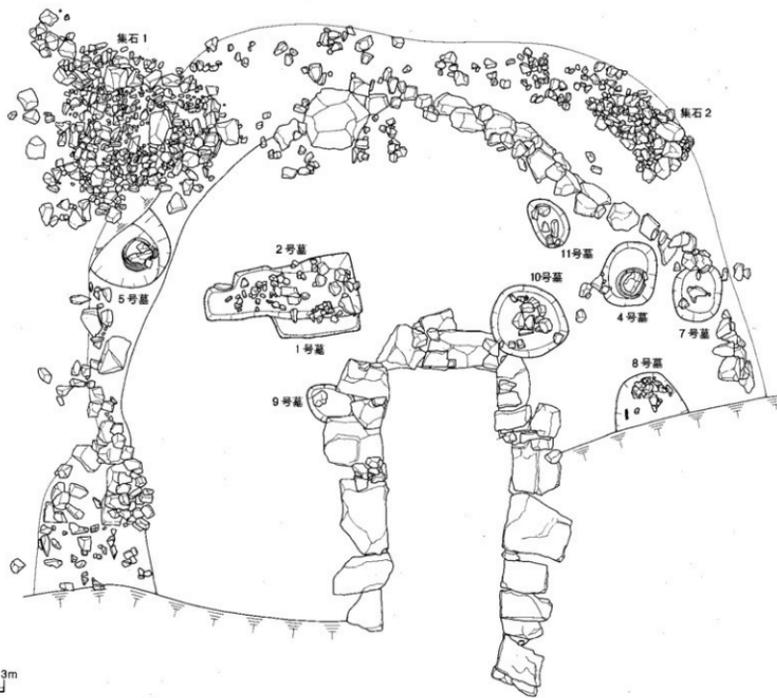
2号墓

遺構(第13図)

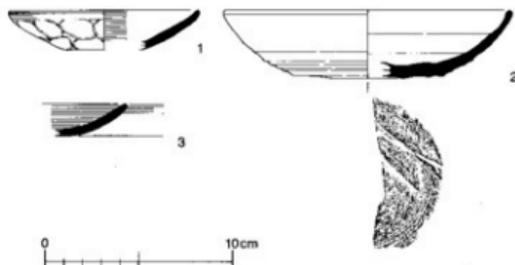
短辺90cm、長辺175cm、確認面からの深さ約40cmを測るほぼ長方形の平面形状を呈する墓壇であり1号墓とは重複関係にある。平面形状から見ると墓壇の北隅が若干変形している。2基以上の墓壇が重複することが考えられたため、集石を除去した後、下面の精査を行なったが、重複関係は認められなかった。墓壇上面には長さ35~10cmの自然石を集石状に配している。墳内からは須恵器の碗が1点出土している。



第13图 1·2号墓实测图



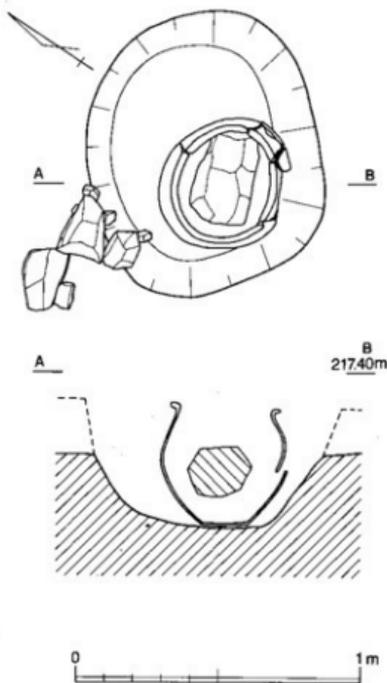
第14图 中·近世墓道配置图



第15図 3号墓出土遺物実測図

遺物 (第17図)

17図(1)は焼成の非常にあまい須恵器碗である。口縁端部は丸く収まり、ロクロナデ調整が施されている。特に体部の下半は調整が強くなされている。底部の切り離し技法は不明である。口径15.0cm、底径7.1cm、器高3.7cm。



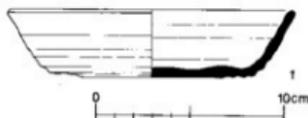
第16図 4号墓実測図

3号墓
遺構

1号墳の墳丘南東部は後世の削平によって消滅し、石室の一部が露呈している。3号墓は削平によって生じた崖面を観察した結果、断面でわずかに確認しえたもので平面的には全く確認出来なかった。墳内からは須恵器の碗が1点、土師器の皿が2点出土している。

遺物 (第15図)

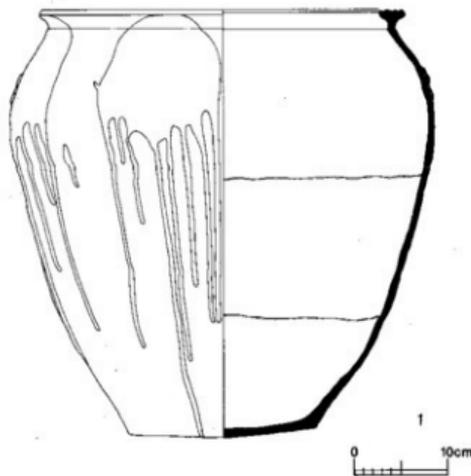
15図(1)(3)は土師器皿、(2)は須恵器碗である。(1)(3)は、共に底部から直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部は丸く収まる。調整技法は、内面および外面の口縁部にヨコナデ調整が認められるのみであり、外面の体部から底部にかけては成形時のオサエが確認出来るだけで、未調整である。(2)は、焼成が非常にあまい。体部は底部から内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。ロクロナデ調整が施されており、特に体部下半は強く調整が加えられている。底部の切り離し技



第17図 2号墓出土遺物実測図

法は糸切りである。(1)は、口径5.0cm、底径2.0cm、器高2.1cm。(3)は、器高1.75cm、(2)は、口径15.2cm、底径7.9cm、器高3.7cm。

4号墓
遺構 (第16図)



第18図 4号墓出土遺物実測図

墳丘の東部で検出されたもので、長軸95cm、短軸80cm、確認面からの深さ約25cmを測る墓壇を掘り込む。壇内には、丹波焼の甕を埋置した後、炭化物を含む黒褐色土を充填する。墓壇上面には40cm×70cmの長方形の石を墓標として配していたと思われるが、調査時点では甕の中に落下した状態で検出された。墓壇の西側にも墓壇上面に自然石を3石配する。

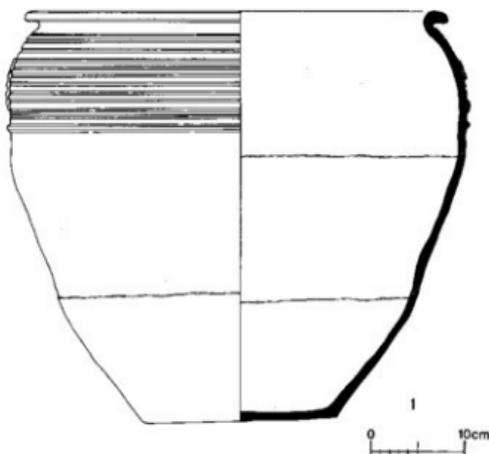
遺物 (第18図)

18図(1)は丹波焼の甕である。口縁端部は水平に内外

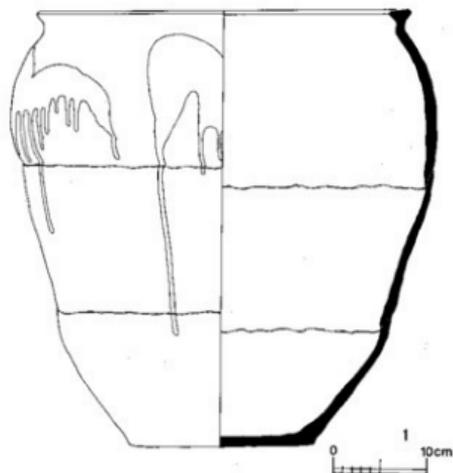
面に拡張し、3本の沈線をもつ。体部は3段に粘土を積み上げて成形されており、粘土の積み上げの後、体部内面にはケズリが加えられ、最終調整として内外面にロクロナデ調整が施される。調整終了後、肩部に1対の耳が貼付され、外面に化粧土が塗られる。その後、灰釉を外面に施釉する。口径38.4cm、底径20.1cm、器高45.7cm、最大径45.2cm。

5号墓
遺構 (第23図)

墳丘の北西部で検出された遺構である。墓壇の北側部分は墳丘の削平によって消滅し、現状の平面形状は半楕円形を呈する。確認面からの深さは約45cmを測る。壇内には丹波焼の甕を正位で埋置し、炭化物を混じえる黒灰色土を充填する。墓壇上面には、1辺22.5cmの方形の自然石と長さ45cm、幅15cmの不整形の自然石を墓標として配していたと思われるが、調査時点では



第19図 5号墓出土遺物実測図



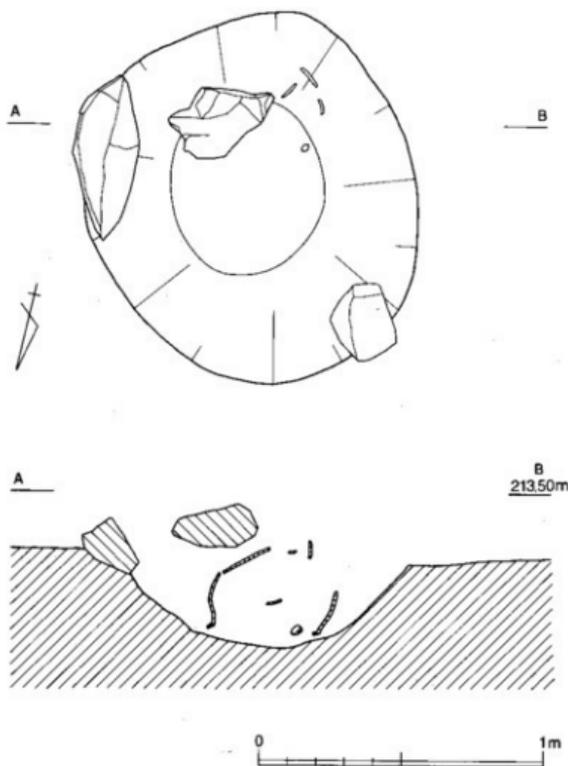
第20図 6号墓出土遺物実測図

2石とも甕の中に落下した状態で検出された。出土遺物には甕の他、土師器皿が2点出土している。

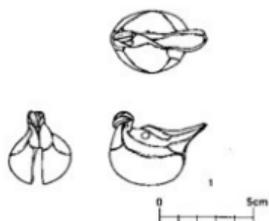
遺物(第19・24図)

24図(1)(2)は土師器皿、19図(1)は丹波焼甕である。(1)(2)は体部が底部からやや内彎気味に直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に丸く収まる。底部内面と体部の接点に軽い凹線をもつ。調整技法は、内面および外

面の口縁部にヨコナデ調整が認められるのみで、外面の体部から底部にかけては成形時のオサエが確認出来るだけで、未調整である。19図(1)は口縁部が外反し、体部は3段に粘土を積みあげて成形されている。粘土の積み上げの後、体部内面はケズリが加えられ、中位をのぞく上下はナデ調整によってケズリを消している。口縁部内面及び外面は、その後、ロクロナデ調整が施される。さらに、体部外面の上位に、ロクロの回転を利用した11本の沈線と1本の凸帯がつくり出され、1対の耳が貼付される。その後、外面のみ化粧土が塗られ



第21図 6号墓実測図

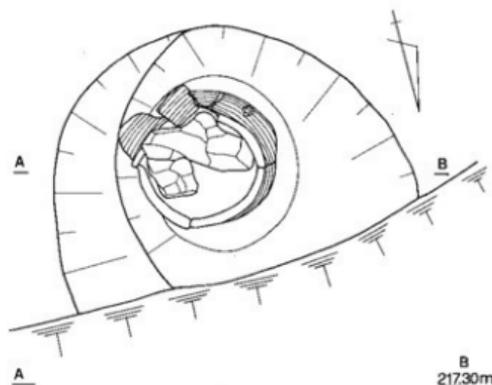


第22図 6号墓出土遺物実測図

る。口径45.0cm、底径20.5cm、器高43.9cm、最大径49.3cm。

6号墓
遺構 (第21図)

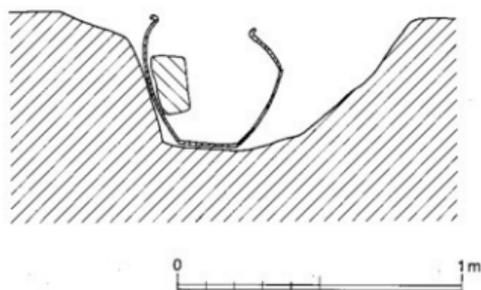
他の近世墓が、墳丘上に構築されているのに対し、これは墳丘から北西へ6mの墳裾部で検出されている。墓壇は、長軸125cm、短軸115cmの楕円形の平面形状を呈し、確認面からの深さは約40cmを測る。4・5号墓と



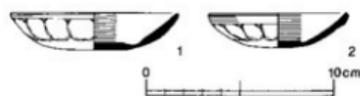
同様、丹波焼の甕を埋置するが、前2者とは違い口縁部を下に、底部を上にする逆位の埋納形態をとっている。埋土を充填した後、墓壇上には長さ30~60cm、幅15~20cmの自然石を墓標状に3石配している。壇内からは甕の他に鳩形の土鈴が出土している。

遺物 (第20・22図)

20図(1)は丹波焼甕、22図(1)は土鈴である。20図(1)は、口縁端部が水平に内外面に拡張し、体部は3段に粘土を積み上げて成形されている。粘土の積み上げの後、体部内面にはケズリが加えられ、最終調整として内外面にロクロナデ調整が施される。調整終了後、外面のみに化粧土が塗られ、その後外面に灰釉を施釉する。口径40.0cm、底径19.7cm、器高47.0cm、最大径45.5cm。



第23図 5号墓実測図



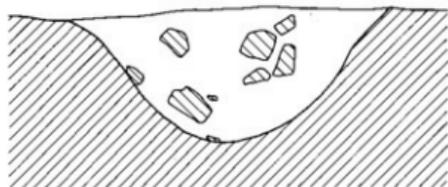
第24図 5号墓出土遺物実測図

22図(1)は手づくねの鳩を模した鈴である。鳩の胸部は中空になっており、中に土玉が入っている。

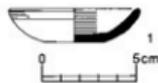
7号墓

遺構 (第27図)

4号墓の南側で、隣接する形で検出されたものである。長軸85cm、短軸75cmの楕円形の平面形状を呈し、確認面からの深さは約30cmを測る。埋土を充填した後、墓壇上面上には長さ20~30cm、幅7~20cmの自然石を墓標状に配して



第25図 8号墓実測図

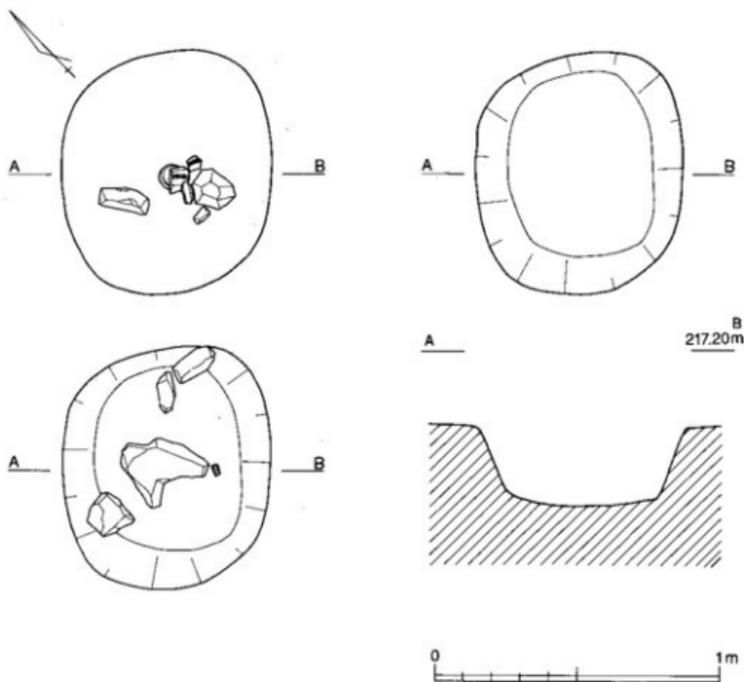


第26図 8号墓出土遺物
実測図

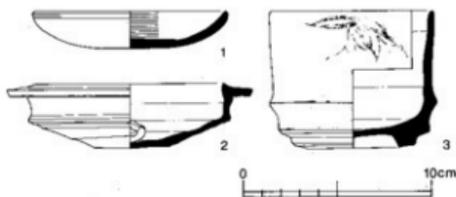
いる。配石の一部は墓境内に落下した形で検出されている。出土遺物には土師器皿、施釉陶器蓋・碗、銅銭がある。これらの遺物は、銅銭以外は、墓境内ではなく、墓壇上面の配石間で検出されており、副葬品というよりは墓上での供養の際に供献されたものと考えられる。また境内からは、少量の骨片が検出されている。

遺物 (第28図)

28図(1)は土師器皿、(2)(3)は施釉陶器である。(1)は底部から内彎気味に立ち上がる体部をもち、口縁端部は丸く収まる。内面の底部と体部の接点に軽い凹線をもつ。調整技法は口縁部内外面にヨコナデ調整が認められるのみで、外面の体部から底部にかけては成形時のオサエが確認できるだけであり、未調整である。口径10.2cm、底径3.6cm、器高2.0cm。(2)は京焼系施釉陶器蓋



第27図 7号墓突測図

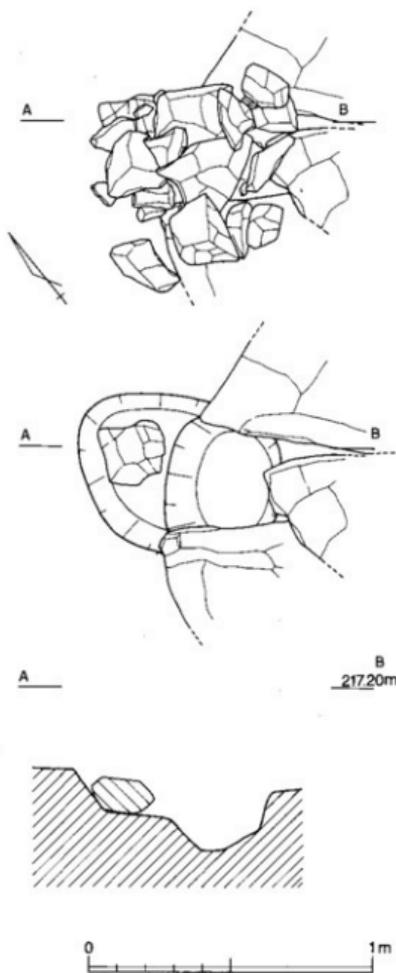


第28図 7号墓出土遺物実測図

である。口縁部は折り返されており、つまみがつく。調整技法は、内外面のロクロナデ調整の後、外面下半部にロクロケズリが加えられる。内面及び外面口縁部下端まで白濁釉が施釉されている。口径11.1cm、底径4.0cm、器高3.4cm。(3)は丹波系施釉陶器の筒形碗で、白濁釉と灰釉の2釉

かき分けである。調整技法は、ロクロナデ調整の後、ロクロケズリが加えられる。

内面及び外面の高台脇まで施釉されており、体部外面には灰釉で笹文が施文されている。口



第29図 9号墓実測図

側側壁に接する形で検出された。長軸70cm、短軸55cm、確認面からの深さは北西側で約15cm、南東側で約30cmを測り、片側のみ2段掘りとなっている。南東部分は石室の側壁を利用し、石

径8.5cm、底径4.9cm、器高7.4cm。銅銭は寛永通寶が13枚束ねられた形で出土している。詳細は別表(第30・31図、第2表)の通りである。

8号墓

遺構(第25図)

3号墓の南東側で検出されたものである。3号墓同様、墳丘の削平によって墓壇の南半部分は消失し、現状の平面形状は半楕円形状を呈する。確認面からの深さは約45cmを測る。壇内に埋土を充填した後、墓壇上に長さ10~15cm、幅5~10cmの自然石を、墓壇の北側部分に集石というよりはむしろ墓標状に配している。配石の一部は調査時点では壇内に落下した形で検出された。壇内からは土師器皿及び用途不明の鉄製品が出土している。

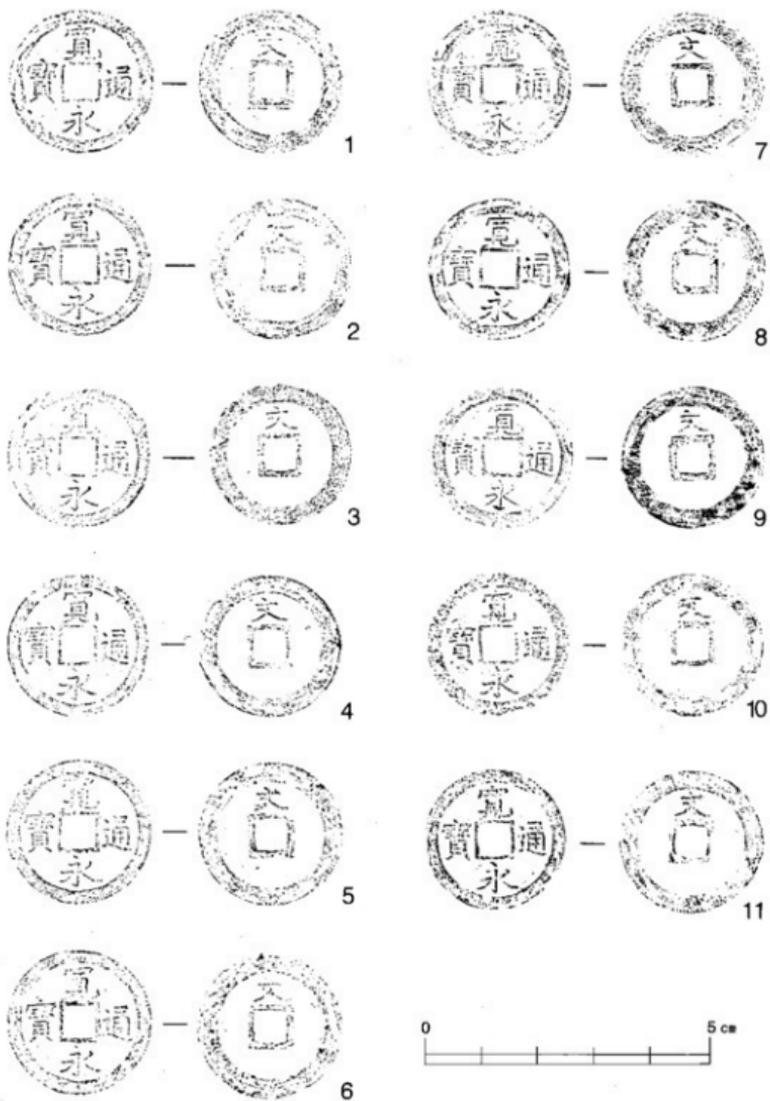
遺物(第26図)

26図(1)は土師器皿である。底部から内彎気味に立ち上がる体部をもち、口縁端部は丸く収まる。内面の底部と体部の接点に軽い凹線をもつ。調整技法は、口縁部内外面にヨコナデ調整が認められるのみで、外面の体部から底部にかけては成形時のオサエが確認できるだけで未調整である。口径6.8cm、底径3.2cm、器高1.8cm。

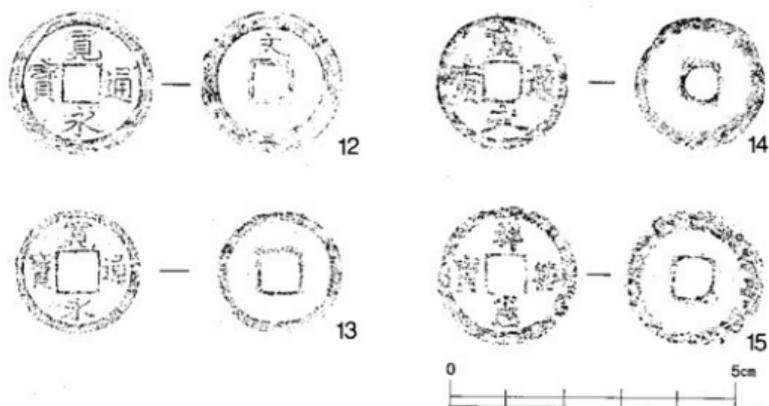
9号墓

遺構(第29図)

石室の北西部墳丘上に位置し、北西



第30圖 7号墓出土錢貨拓影圖(1)



第31図 7号墓出土銭貨拓影(2)

番号	種類	出土位置	直径(cm)	厚み(mm)	重量(g)	初鋳年代	備考
1	寛永通宝	7号墓	2.55	1.2	3.2	1636年(寛永13年)	裏面「文」字
2	〃	〃	2.5	1.3	3.18	〃	〃
3	〃	〃	2.55	1.3	3.45	〃	〃
4	〃	〃	2.5	1.3	3.32	〃	〃
5	〃	〃	2.55	1.25	3.45	〃	〃
6	〃	〃	2.55	1.05	2.8	〃	〃
7	〃	〃	2.55	1.4	3.5	〃	〃
8	〃	〃	2.5	1.25	3.4	〃	〃
9	〃	〃	2.5	1.25	3.5	〃	〃
10	〃	〃	2.5	1.1	2.55	〃	〃
11	〃	〃	2.55	1.25	3.4	〃	〃
12	〃	〃	2.55	1.2	3.2	〃	〃
13	〃	南側墳裾	2.2	0.9	1.53	〃	〃
14	〃	石室埋土	2.4	1.15	2.8	〃	〃
15	祥符通宝	石室内	2.5	1.15	2.9	1008年(祥符元年)	〃

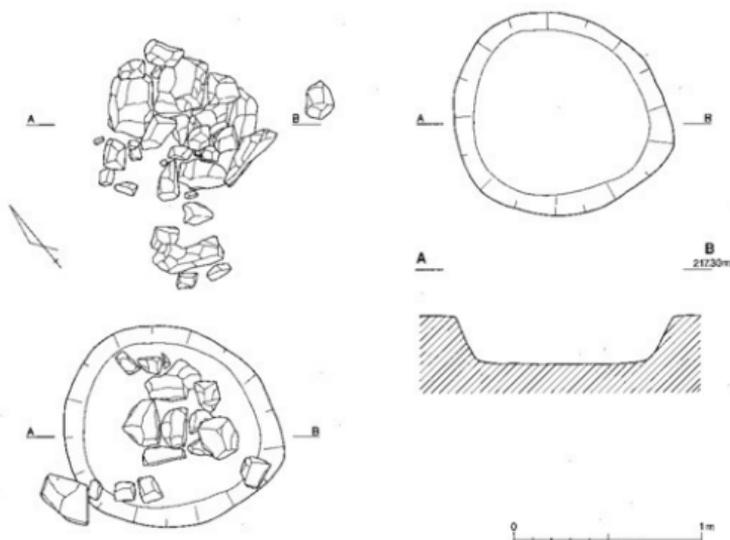
第2表 出土銭貨一覧表

組の施設を構築している。埋土を充填した後、墓壇上面には長さ30~10cm、幅25~10cmの自然石を墓域を画する形で集石状に配している。壇内からはわずかではあるが骨片が検出されている。

10号墓

遺構(第32図)

石室の東隅に接する形で検出されたもので、墓壇の平面形状は長軸120cm、短軸110cmを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは約30cmを測る、壇内に埋土を充填した後、長さ35~15cm、



第32図 10号墓実測図

幅25～5cmの自然石を墓域を画する形で集石状に配置している。墓域内には自然石を配し、石組の施設を構築しており、その中央部で骨片が検出されている。

11号墓

遺構 (第33図)

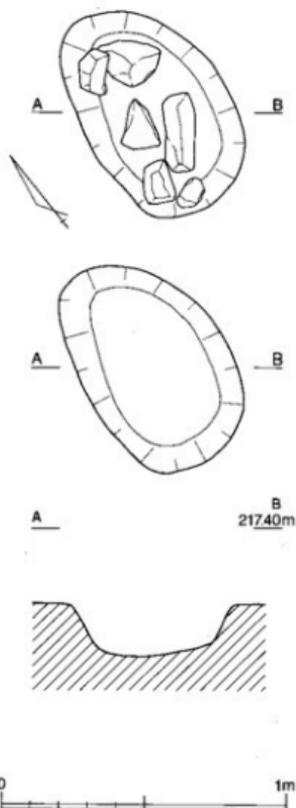
10号墓の東側で検出されたもので、長軸80cm、短軸50cmを測る楕円形の平面形状を呈する。確認面からの深さは約20cmを測る。域内に埋土を充填した後、墓域上面に長さ30～10cm、幅15～8cmの自然石を墓標状に配している。なお配石の一部は、調査時点では域内に落下した形で検出されている。

集石1

遺構

当古墳の北側墳裾で検出されたもので、北東方向に3m、南東方向に3mの範囲で集石が見られ、石と石との間で、須恵器の碗、皿などの遺物が検出された。その結果、集石の下面に墓域の存在が予想されたため、集石を除去した後、遺構の検出を試みたが、墓域などの遺構は検出されなかった。ここでは一応、集石遺構として報告する。

遺物 (第34図)



第33図 11号墓実測図

34図(1)~(6)は須恵器碗、(7)は須恵器皿である。(1)は平底高台で、底部の切り離し技法はへら切りである。調整技法はロクロナデ調整で、高台部外面のみ再調整が加えられている。底径7.1cm、(2)は平底高台で、底部の切り離し技法は糸切りである。調整技法はロクロナデ調整で、高台部外面の再調整は認められない。底径6.4cm。(3)~(6)は体部が内鬲気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。調整技法はロクロナデ調整である。(3)は口径6.4cm、(5)は口径14.8cm。(7)は体部が底部から外反気味に立ち上がり、口縁端部が丸く収まる。調整技法はロクロナデ調整で、底部の切り離し技法はへら切りである。口径7.4cm、底径5.8cm、器高1.2cm。

集石 2

遺構

古墳の東側墳裾で検出されたもので、南北3m、東西0.9mの範囲内に集石が見られ、石と石との間で土師器杯の出土が見られた。集石の下面で、遺構の検出を試みたが墓壇などは検出されなかった。ここでは1と同じく集石遺構として報告する。

遺物 (第35区)

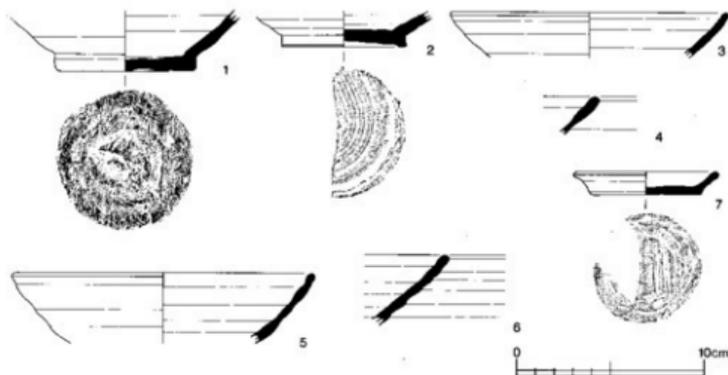
35図(1)は土師器杯である。体部中ほどで大きく屈曲し、口縁端部はやや尖り気味に丸く収まる。調整技法はロクロナデ調整で、底部の切り離し技法は糸切りである。口径15.9cm、底径7.9cm、器高3.0cm。

この他、当古墳では、墳丘上、攪乱域、羨道、石室内などから、遺構とは遊離した形で、土師器皿、施釉陶器、銅銭などの遺物が検出されている。また、当古

墳の周辺で、丹波焼の鉢を採集しているので併せて報告しておく。

遊離遺物 (第36区)

36図(1)~(4)は土師器皿、(5)(6)は施釉陶器である。(1)(2)(3)は墳丘上、(4)は攪乱域、(5)は羨道内埋土中、(6)は石室内埋土中からそれぞれ出土した。(1)は杯で、体部中ほどで大きく屈曲し、口縁端部は丸く収まる。調整技法はロクロナデ調整である。口径15.6cm。(2)は皿で、底部から直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部はやや尖り気味に丸く収まる。調整技法は、口縁部内



第34図 集石 1 出土遺物実測図

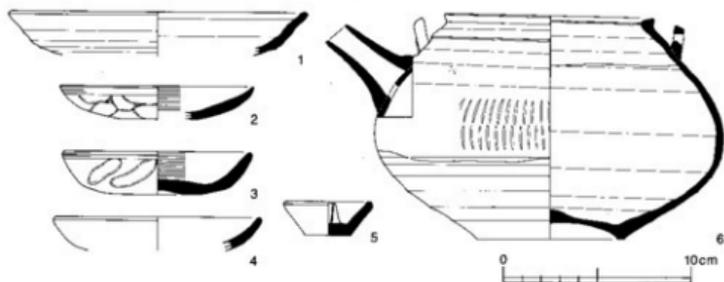


第35図 集石 2 出土遺物実測図

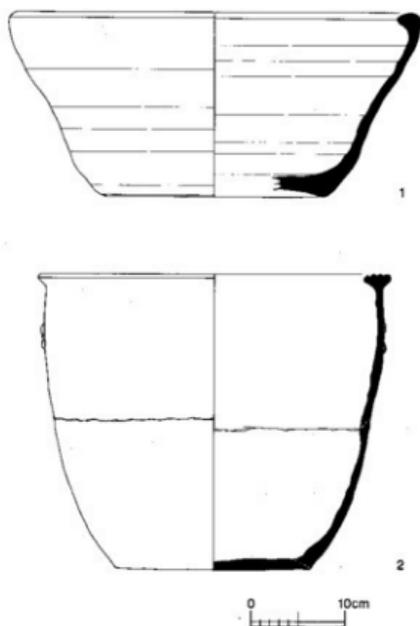
外面にヨコナデ調整が認められる以外は外面の体部から底部にかけて成形時のオサエが確認出来るだけで、未調整である。口径10.2cm、底径4.0cm、器高1.8cm。(3)は皿で、あげ底風の底部をもち、口縁端部は尖る。調整技法は、口縁部内外面にヨコナデ調整が認められる他は、外面の体部から底部にかけて成形時のオサエが確認出来るだけで、未調整である。口径9.9cm、底径4.6cm、器高2.3cm。(4)は皿で、

体部は内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。調整技法等は器壁が磨滅しているため不明である。口径10.3cm。(5)はひょうそくて、体部は底部から外反気味に立ち上がり、やや尖り気味の口縁端部をもつ。調整技法は内外面ともナデ調整で、底部をのぞく全面に施軸されている。口径4.6cm、底径2.5cm、器高1.8cm。(6)は京焼系施軸陶器の土甎で、碁笥底風の底部をもち、調整技法は、内外面共ヨコナデ調整の後、外面の中段にトビガンナによる施文を行い、外面の下半から底部にかけてロクロケズリ調整を行う。その後、把手・注口を貼付し、白濁釉を施軸する。施軸する範囲は、内面の上位と外面の上半で、口縁端部は露胎である。口径11.1cm、底径7.8cm、器高12cm、最大径18.3cm。

採集遺物 (第37図)



第36図 遊離遺物実測図



第37図 採集遺物実測図

37図(1)は丹波焼の鉢である。玉縁状の口縁をもち、底部はあげ底風になる。調整技法は内外面ともロクロナデ調成である。口径21.0cm、底径11.5cm、器高9.9cm。(2)は丹波焼の甕である。体部はほぼ垂直に立ち上がり、頸部でくびれることなく口縁端部は水平に内外面に拡張する。口縁部上面に3本の沈線をもつ。体部は2段に粘土を巻き上げて成形されており、粘土の積み上げの後、体部内面はケズリが加えられ、最終調整として内外面にロクロナデ調整が施される。口径36.9cm、底径20.7cm、器高31.8cm。

2. 遺構と遺物の検討

a. 遺物

本調査で出土した遺物には、土師器・須恵器・陶器の他、土製品・銭貨・鉄製品などがあるが、その出土量は極めて少量である。しかしながら、大半の遺物は、甕棺ないしは蔵骨器として使用されたと考えられる土器・土製品や銭貨などを含む副葬品・供養用土器と考えられる出土状況を示している。また、墓塚という遺構の性格を考慮すると一括遺物と認定できる出土状況を示すものも多く、出土遺物の年代観をもって、出土遺構の年代の決定できる資料といえる。

従来、中・近世墓の時期決定にあたっては、単独である程度時期決定のできる資料——中国製陶磁器・備前焼など——の年代観から遺構の年代決定を行う方法が主流を占めてきた。しかし、資料の増加に伴って単独では時期決定の困難な資料——土師器・須恵器など——を埋納するものが多数存在する実体が明らかになりつつある。また、重層する遺構面を持つ消費地の調査が進展するに伴い、日常雑器——土師器・須恵器——をタイムスケールとして使用する研究方法が一般化しつつある。しかしながら、本遺跡では遺構が層位的に把握されることはなく、また、遺物についても丹波地域における当該時期の編年が確立していない現状においては詳細は不詳といわざるをえない。ここでは、出土遺物の大半が墓塚等からの一括遺物である点を考慮して、あえて土師器・須恵器・丹波焼についての型式分類を試み、本遺跡における時期設定を行ってみたい。なお、年代観の決定にあたっては、種々の問題があるものの、他地域との比較検討により行うことにする。

土師器

今回出土した11点の土師器は、形態・成形技法から以下のように分類できる。まず、成形技法の差異から、ロクロ使用のもの（HA類）とロクロ未使用のもの（HB類）とに大別できる。HB類は、底部の形態上の差異から、あげ底風のもの（HBⅠ類）と平底のもの（HBⅡ類）に分類できる。さらに、HBⅡ類は、体部の形態上の差異から、体部が直線的に立ちあがるもの（HBⅡa類）、やや内彎気味に直線的に立ちあがるもの（HBⅡb類）、内彎気味に立ちあがるもの（HBⅡc類）に細分できる。

ここで、細分された各類の特徴を述べる。HA類（35図1、36図1）は、ロクロ使用土師器で、体部中程で大きく曲折し、口縁端部は丸く収まる。底部の切り離しは糸切りである。HB類は、形態上に若干の差異が認められるものの、同一の調整技法を持つ。内面および口縁部外面はヨコナゲ調整されているが、外面の体部から底部にかけては未調整で成形時のオサエ痕をそのまま残す。HBⅠ類（36図3）は、底部が若干あげ底風になり、口縁端部が尖り気味に収まる。HBⅡa類（15図1・2、36図2）は、平底の底部から体部が直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収まる。HBⅡb類（24図1・2）は、平底の底部から体部がやや内彎気味に直線的に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に収まる。内面の底部との接点に軽い凹線を持つ。

HBⅡc類(28図1、26図1、36図3)は、平底の底部から体部が内彎気味に立ちあがり、口縁端部は丸く収まる。内面の底部との接点に凹線の痕跡を残す。

以上、細分された各類の前後関係を考えてみる。HBⅡ類は、体部および口縁部の形態上の差異から、HBⅡa類→HBⅡb類→HBⅡc類もしくはHBⅡc類→HBⅡb類→HBⅡa類となる。ここで、内面の底部と体部との接点の凹線のあり方をみると、HBⅡb類とHBⅡc類との関係はHBⅡa類とHBⅡb類との関係よりより近い関係といえ、なおかつ、HBⅡa類→HBⅡb類→HBⅡc類の変遷が妥当といえる。なお、HA類とHB類との関係、HBⅠ類とHBⅡ類との関係は不明である。

須恵器

今回出土した9点の須恵器のうち、杯もしくは碗と考えられる8点は、その形態・成形技法から以下のように分類できる。まず、底部の形態上の差異から、平底高台のもの(SA類)と平底のもの(SB類)とに大別できる。SA類は、底部の切り離し技法の差異から、ヘラ切りのもの(SAⅠ類)と糸切りのもの(SAⅡ類)とに分類できる。なお、SB類は、底部の切り離し技法のわかるものは1点しかなく、糸切りである。

ここで、分類された各類の特徴を述べる。SAⅠ類(34図1)は、平底高台を持ち、底部内面は凹む。内外面共ロクロナデ調整されており、高台部外面のみ再調整されている。底部の切り離しはヘラ切りである。SAⅡ類(34図2)は、平底高台を持ち、底部内面は若干凹む。内外面共ロクロナデ調整されており、高台部の再調整は認められない。底部の切り離しは糸切りである。SB類(15図2)は、平底の底部から体部は内彎気味に立ちあがり、口縁端部は丸く収まる。内外面共ロクロナデ調整されており、底部の切り離しは糸切りである。なお、17図1および34図(3)~(6)は本類に属する。

以上、分類された各類の前後関係を考えてみる。底部の形態上の差異からSA類→SB類もしくはSB類→SA類となり、底部の切り離し技法の差異からSAⅠ類→SAⅡ類・SB類もしくはSAⅡ類・SB類→SAⅠ類となる。以上から、SAⅠ類→SAⅡ類→SB類もしくはSB類→SAⅡ類→SAⅠ類となる。ここで、SA類の高台部の再調整のあり方をみると、SAⅠ類→SAⅡ類が妥当と考えられ、SAⅠ類→SAⅡ類→SB類の変遷となろう。

丹波焼

今回出土した4点の丹波焼のうち3点の甕は、形態・調整技法から以下のように分類できる。まず、口縁部の形態上の差異から、口縁部が外反するもの(TA類)と口縁端部が内外に拡張するもの(TB類)とに大別できる。TB類は、口縁端部の調整技法の差異から、端部上面に沈線を持つもの(TBⅠ類)と持たないもの(TBⅡ類)とに分類できる。

ここで、分類された各類の特徴を述べる。TA類(19図1)は、口縁部が外反し、体部外面上位にロクロ回転を利用した沈線を持つ。体部内面の成形・調整技法は、ケズリの後、中位を

残してナデ調整される。外面には化粧土が塗られる。2類に分類されるTB類は、共に水平に内外に拡張する口縁部を持ち、体部内面の成形・調整技法はケズリの後ロクロナデ調整が加えられる。外面には、化粧土が塗られ、その後灰釉が施される。TB I類(20図1)とTB II類(18図1)との差異は、TB II類が口縁端部上面に沈線を持ち、TB I類が沈線を持たない点に求められる。

以上、分類された各類の前後関係を考えてみる。口縁部の形態上の差異からTA類→TB類もしくはTB類→TA類となり、口縁端部の沈線の有無からTA類・TB I類→TB II類もしくはTB II類→TA類・TB I類となる。以上から、TA類→TB I類→TB II類もしくはTB II類→TB I類→TA類となる。ここで、消費地の層位関係から考えると、TA類→TB I類→TB II類の変遷が妥当といえよう。

分類された各類の遺構の共存関係を考慮すると、SA類→SB類・HB Ia類→HB Ib類・TA類→HB Ic類となる。また、HB Ic類は、京焼系の施釉陶器と共存する。ここで、消費地等の出土例から、上述の各類の時期比定を行うと、SA類は10世紀から11世紀に、SB類は12世紀後半(山本・秋枝 1984)にその所属年代が求められる。また、HB Ic類はその共存遺物の年代観(岡田・長谷川 1985)から18世紀末から19世紀初頭に比定できる。なお、上述の変遷に含まれないHA類・HB I類・TB I類・TB II類のうち、HB I類は15世紀後半から16世紀前半(松藤 1978)に、TB I類は18世紀中頃に、TB II類は18世紀末から19世紀初頭に各々比定できる。

以上を総合すると、SA類(I期)→SB類・HB Ia類(II期)→HB I類(III期)→HB Ib類・TA類(IV期)→TB I類(V期)→HB Ic類・TB II類(VI期)の変遷が追えることが型式分類および他地域との比較検討により判明した。ここで、時期決定の行えなかったIV期について考えてみたい。IV期は、前述の変遷から考えると、16世紀後半から18世紀前半の間に比定できる。また、丹波焼の編年観(大槻 1977)から17世紀後半以降であることは確実である。これらのことから、IV期は17世紀後半から18世紀前半とここでは考えておく。以上から、I期は10世紀から11世紀に、II期は12世紀後半に、III期は15世紀後半から16世紀前半に、IV期は17世紀後半から18世紀前半に、V期は18世紀中頃に、VI期は18世紀末から19世紀初頭に各々比定できる。

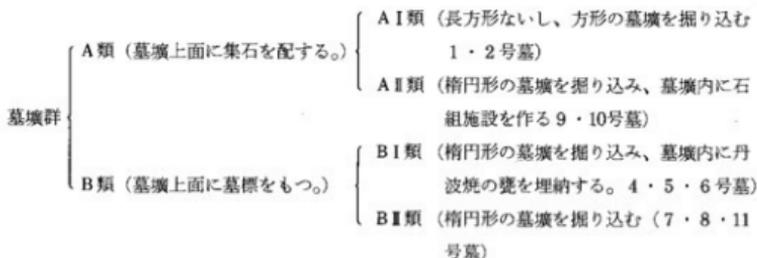
以上の出土遺物の検討から、本遺跡の出土遺物が10世紀から19世紀初頭までに比定できることがわかった。また、I期からVI期まで設定した各期の年代観から、本遺跡および周辺において、10世紀から19世紀初頭にわたってたえまなく何らかの人為的活動のあったことが推測できよう。なお、今回行った型式分類および時期設定は、本遺跡に限ってのものであり、また、試論であることを改めてことわっておく。

b. 遺構

当古墳では合計11基の墓塚群が墳丘上あるいは墳裾部に構築されている。ここでは、墓塚の形態、埋葬方法等の観点から、これらの墓塚群をある程度分類し、先に触れた遺物の年代観及び他地域での類例比較を通じて、これらの墓塚群の構築の前後関係について若干触れてみたい。

本遺跡で検出された墓塚群は、その形態から見ると、墓塚上面に集石を配するもの（A類）と、墓塚状の自然石を配するもの（B類）とに大別される。さらにA類は、墓塚の形態から、長方形ないしは方形の墓塚を掘り込むもの（AⅠ類 1・2号墓）と楕円形の墓塚を掘り込み、墳内に石組施設を構築するもの（AⅡ類 9・10号墓）とに細分される。

同様にB類は、墓塚上面に墓塚状の配石をもち、墓塚内に丹波焼の甕を埋納するもの（BⅠ類 4・5・6号墓）と墓塚のみを掘り込むもの（BⅡ類 7・8・11号墓）とに分類される。



次に遺物の検討の結果から導き出された年代をそれぞれの墓塚にあてはめてみる。先づB類についてみると、ここでBⅠ類と分類した5・6・4号墓には、それぞれ遺物から、17世紀後半～18世紀前半、18世紀中頃、18世紀末～19世紀初頭の時期が与えられ、BⅠ類には17世紀後半から19世紀初頭の範囲で時期が与えられる。

BⅡ類と分類した7・8・11号墓については、出土遺物から7・8号墓には18世紀末～19世紀初頭の時期が考えられている。11号墓からは遺物の出土は見られないが、8号墓と形態的に類似しており、形態差が時期差をある程度反映しているということ为前提として考えると、11号墓には、18世紀末から19世紀初頭の時期を与えることが出来る。

これらのことからB類に分類した墓塚群は17世紀後半～19世紀初頭の時期に属する近世墓の範疇に入れることが可能となる。このことを他地域での類例との比較からもう少し考えてみたい。

BⅠ類と分類した丹波焼の甕を埋納した墓塚には、県下では、加東郡社町上三草近世墓^{文庫12}、姫路市姫路城内武家屋敷址^{文庫5}、同市木庭墓地遺跡^{注5}、多紀郡西紀町箱塚古墳^{注5}、明石市西仲ノ町遺跡^{注6}のものに類例がみられる。この内、報告書が刊行されている上三草近世墓、姫路城内出土のものは、6号墓と同様に口縁部を下に、底部を上にした伏せた形で埋納されている。時期的

には上三草近世墓のものが江戸時代前半に、姫路城内出土のものは、18世紀後半から19世紀前半に埋納の下限が考えられている。本遺跡出土のものの場合、甕の形態から考えて、4・6号墓出土のものは姫路城内出土のものと同時期あるいはやや先行する時期が考えられ、5号墓出土のものは、上三草近世墓出土のものとは比べて時期的にやや下るものと考えられる。

BⅡ類については、現在の所、報告書の刊行されているものの中には類例を見出しえなかった。

上記の類例との比較を通じて、B類が近世墓の範疇に収まることはほぼ首肯出来よう。

次にA類について考えてみたい。AⅠ類、AⅡ類とも、墓壇上に集石を配するという点で共通点をもって、時期的には近い関係にあることが推定される。AⅠ類に分類した2号墓には、出土した遺物から12世紀後半の時期が与えられる。しかしAⅡ類と分類した9・10号墓からは遺物の出土が見られず、AⅠ類、AⅡ類の前後関係は、AⅠ→AⅡ、AⅠ=AⅡ、AⅡ→AⅠの3つの関係が考えられる。次に類例との比較から、AⅠ、AⅡ類の前後関係についても少し考えてみたい。

AⅠ類と分類した2号墓に類するものには、龍野市福田天神遺跡で検出された集石土壇墓SK01、SK02がある。SK01には土師器皿、白磁碗が、SK02には青磁碗・皿、土師器杯が副葬されており、遺物の年代観から12世紀後半から13世紀前半の時期が与えられている。

このことは、今回、遺物の年代から与えられた2号墓の時期とはほぼ一致し、AⅠ類の時期が12世紀後半の時期に収まることを裏づけている。

AⅡ類については、泉下では、上面に集石を配し、墓壇内に火葬骨を埋納するという点で考えてみると、かなりの類例が認められる。

報告書の刊行されているものが少なく、細部にわたって比較することは困難であるが、神戸市北区塩田中世墓、養父郡養父町新宮山中世墓^{文獻1}、多紀郡西紀町上坂井中世墓などに類例が見られる。新宮山中世墓では合計50基を越える中世墓が検出されている。調査者は火葬骨を収める容器によって、①壺、塀等の日常雑器に収めるもの、②漆器に収めるもの、③遺存しにくい(調査によって確認出来ない)容器に収めるもの、④直接、納骨穴に収めるものに分類している。ここでは④に分類されている29号墓が、墓壇内に石組を構築するか、直接墓壇内に火葬骨を埋納するか点で若干の相違はあるものの、BⅡ類と基本的には同一の構造をもつものと考えられる。また墓壇内に石組を構築する例としては、上板井中世墓のものがある。ここでは、7基の中世墓が検出され、内5基の墓壇に石室及び石組施設がつくられている。

時期としては、新宮山中世墓、上板井中世墓とも壇内から遺物の出土が見られないため、明確な時期は与えられていないが、他の時期の分る墓壇との関係から、墓壇群全体の時期は、中世の時期におさえられている。

以上からAⅡ類が中世墓に属し、AⅠ類とAⅡ類については、AⅠ→AⅡ、もしくはAⅠ=A

Ⅱの関係が成立する。ここで、本遺跡で出土した遺物を再検討すると、墳丘上より15世紀後半から16世紀前半に属すると考えられる土師器皿が出土している。他にこの時期に属する遺構が検出されていないことから、AⅡ類に、15世紀後半から16世紀前半の時期を与えることも、ある程度可能であろう。

以上から各墓塚の構築の順序は下記のようになる。

1号墓→2号墓→9・10号墓→5号墓→6号墓→4・7・8・11号墓

このことを、墓塚の占地の点から見てみると、1・2・9・10号墓などの中世墓は、墳丘中央部に位置し、他の近世墓は周辺の墳丘斜面上もしくは墳裾部に位置している。細かい点では若干の相違はあるものの、大まかに言えば、これらの墓塚群は古いものが最初墳頂部に築かれ、漸時、周辺の墳丘斜面上に築かれていった事がうかがわれ、占地の点からも先に記した構築の順序は妥当であると言えよう。

以上をまとめると下表のようになる。

中・近世墓の別	分類	形態上の特徴	遺構名	時期	類例
中世墓	AⅠ類	墓塚上面に集石を配し、長方形の墓塚を掘り込む。	2号墓	12C後半	福田天神遺跡集石土壌墓 S K01、02
	AⅡ類	墓塚上面に集石を配し、楕円形の土壌を掘り込み、墳内に石組施設をつくる。	9号墓 10号墓	15C後半～ 16C前半?	塩田中世墓 新富山中世墓 上板井中世墓
近世墓	BⅠ類	墓塚上面に墓標を配し、墓塚内に丹波焼の甕を埋納する。	5号墓 6号墓 4号墓	18C前半 18C中葉 18C末～ 19C初頭	上三草近世墓 姫路城内武家屋敷 址、木庭墓地遺跡、 箱塚古墳など
	BⅡ類	墓塚上面に墓標を配し、楕円形の墓塚を掘り込む。	7号墓 8号墓 11号墓	18C末～ 19C初頭	

3. 小結

先に述べた遺構、遺物の検討を通して、各墓塚の構築の順序についてはある程度明らかになった。しかし、同時に資料の分析を通じて、問題となる点も少なくない。

ここでは、それらを箇条書の形で列記してまとめにかえたい。

先づ今回明らかになった事は以下の5項にまとめられる。

- ① 1号墳丘上には合計11基の墓塚が検出され、それらは中世墓と近世墓とに大別される。
- ② 中世墓は基本的には墓塚上面に集石を配し、下面に長方形ないし楕円形の墓塚が張り込まれている。时期的には12世紀後半、15世紀後半～16世紀前半の時期が考えられる。
- ③ 近世墓は基本的には墓塚上に墓標をもち、墓塚内に甕を埋納するものとしなないものがあり、17世紀後半から19世紀前半の時期に構築されている。
- ④ 占地の点から見ると、中世墓は墳丘中央部に、近世墓はその外側の墳丘斜面上あるいは墳裾に構築されている。

同様に、問題点としては以下の事が指摘される。

- ① 須恵器、土師器については、今回出土したのものに限って分類し、それを他地域での類例との比較から時期を与えるという方法をとっている。これらの遺物は丹波地域での編年観が確立していない現状では十分な分析は不可能で、ここでの年代観は1つの試論にとどまっている。
- ② 遺構の分類に関しては、上部構造に主眼を置いており、下部構造とくに、火葬墓であるか土葬墓であるかについてはここでは考えていない。
- ③ ②に関連することであるが、形態差が果して時期差を反映しているかどうか、必ずしも厳密に考証していない。
- ④ 集石1・2については、それが人為的に作られたものであることは明確であるが、どの様な性格をもつものであるか、ここでは論じられなかった。
- ⑤ B I類とした丹波焼の甕を埋納する近世墓については、甕を正位に埋納するもの(4号墓・5号墓)と逆位に埋納するもの(6号墓)とがある。その相違についても、ここでは考えていない。逆位に埋納するものについては、それを墓塚に対する蓋文獻3と考える説もあるが、ここでは類例が限られているため、詳細に論ずることは出来なかった。
- ⑥ 中・近世墓、とりわけ近世墓については現存するものもあり、民俗学上の成果から考察することも必要であるが、今回はこの点に関しても触れていない。註4、文獻5

以上の様に、中・近世墓に関しては、論証すべき点が少なくない。今後資料の増加をまって改めて考えてみたい。

注

- 注1) 現在調査中の明石城跡において、TB I類→TB II類の変遷が層位的に捉えられる。
- 2) 吉田 昇氏の御教示による。
- 3) 現在調査中の明石城跡において、TB I類が18世紀中頃に比定できる肥前系磁器(大

橋 1983) と共にしている。

- 4) 現在調査中の明石城跡において、TBⅡ類が18世紀末から19世紀前半に比定できる備前焼(根木 1984) と共にしている。
- 5) 姫路市教育委員会、山本博利、秋枝芳氏の御教示による。
- 6) 兵庫県教育委員会によって1986年12月より調査が継続されている。
- 7) 庄境2号墳では、現在の墓塚と、出土墓塚との比較がなされている。^{文獻6}

引用・参考文献

- 文献1 池田正男 水口富夫 市橋重喜 1986 「上板井古墳群」『近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)』 兵庫県教育委員会
- 文献2 大槻 伸 1977 「丹波」『世界陶磁全集』3 小学館
- 文献3 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として」『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館
- 文献4 岡崎正雄 市橋重喜 1985 「近畿自動車道舞鶴線、箱塚古墳3、4、5」箱塚古墳現地説明会資料 兵庫県教育委員会
- 文献5 岡田章一 長谷川真 1985 『特別史跡姫路城跡—兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告』 兵庫県立歴史博物館
- 文献6 輔老拓治、吉田 昇 1983 「庄境2号墳」『近畿自動車道関係埋蔵文化財調査報告(1)』 兵庫県教育委員会
- 文献7 鈴木重治 市村高規 1982 『福田天神遺跡』 龍野市教育委員会
- 文献8 西口和彦 水口富夫 1986 「新宮山経塚・中世墓群」『昭和58年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』 兵庫県教育委員会
- 文献9 根木 修 1984 「近世備前焼の変遷と年代観」『木村コレクション古備前図鑑』 岡山県立博物館
- 文献10 松藤和人 1978 「同志社キャンパス内出土の土器・陶磁器の編年——中・近世を中心として——」『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』(同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編Ⅱ) 同志社大学校地学術調査委員会
- 文献11 丸山 潔 1983 「塩田中世墓群」『古代・中世の墳墓について』 第13回埋蔵文化財研究会資料
- 文献12 森下大輔・山田将人 1981 『社/上三草近世墓—加東郡社町所在』加東郡教育委員会
- 文献13 山本博利 秋枝 芳 1984 『本町遺跡』 姫路市教育委員会

IV. 庄境 1号墳の調査

1. 古墳の位置

庄境1号墳は、兵庫県多紀郡丹南町大沢新字小畑山27・同8-1に所在している古墳で、北西約15mに庄境2号墳があり、2基から成る古墳群である。旧国でいえば丹波国にあたり、町村合併前は味間村と称されていた。和名抄には味間の郷名を欠いている。吉田東伍氏の大日本地名辞書には余戸郷と記されている。古墳群の前面が庄（酒井庄と大沢庄）の境となり、遺跡名にもなっている。地理的にも「川の中の分水嶺」と呼ばれるように加古川（篠山川）と武庫川の水切れとなっている地域である。前面の水田に水切れとなった沼沢地を見る山麓斜面に立地している。

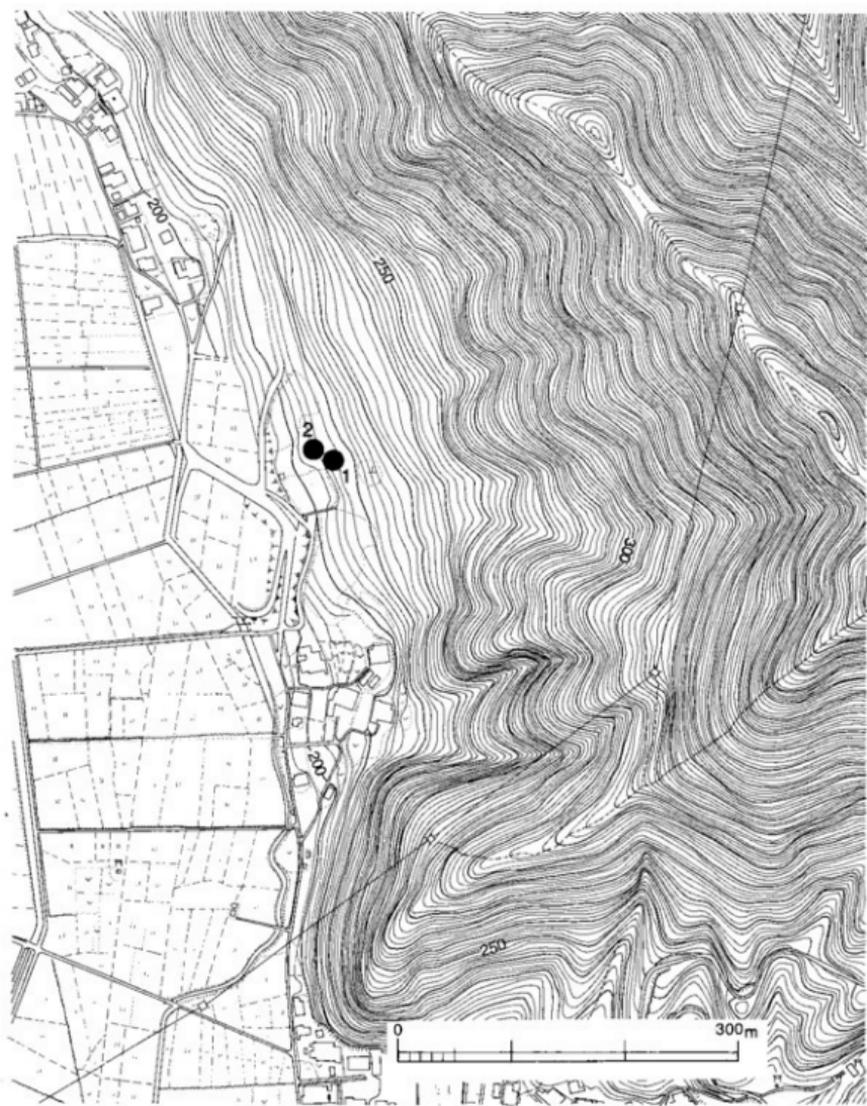
篠山盆地の南西隅を田松川沿いにやや下った東側の丘陵斜面に築かれている。当古墳の築造されている丘陵に登ると、標高408mの楨ヶ峯となり、楨ヶ峯によって盆地南西部が画されている。1本の支尾根は北端から西へ突出しており、さらに盆地を地勢的に限る役割をしている。頂上から南西隅の支尾根へと山裾の線は弧を描いている。弧の奥の斜面に庄境1号墳は立地している。北側は支尾根が張り出しているため視界は大きく遮られている。古墳との比高差は、頂上と198m、水田面とは約10mを測る。山裾で谷部のため、日照時間はやや短い、北側に尾根があるので風はやや防がれ弱くなっている。

可視範囲は、谷地形に立地しているため大きく制約を受けており、北西方向の味間谷方面と南々東の古市方向と狭く、限定されている。味間谷は、味間北の犬塚や三釈伽山古墳群などが遠くに見られる程度で、古市方面も南矢代の石椁保管地が見られるだけで南矢代口古墳などは眺望関係はなく、遠く波賀野古墳が遠望出来るのみである。眺望関係の少ない奥まった立地と言えよう。ただ、武庫川沿いの道を考えれば、盆地への出入口部に立地していることになる。立地的には、盆地南東部の小野新の補山古墳などと共通点を有する。

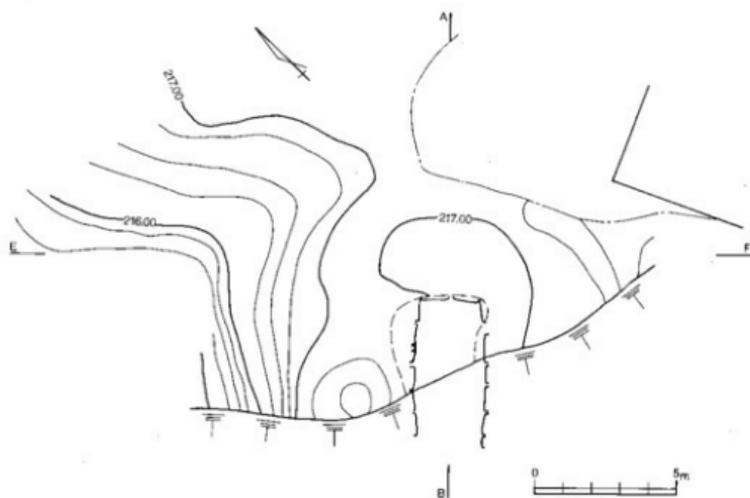
2. 外形

墳丘の3分の1以上を調査前に損壊を受けていたため全ては語れない。その上、周辺の墓地整備が進み、コンクリート基礎が東側墳裾近くまで迫っており、北・西側は近畿自動車道の本体工事のため旧地形は残っておらず、巨視的に見れば1号墳が孤立した状態で地形は残っていないと言える。墳丘の3分の2と北・西の周辺の部分が旧態を保っていたことになる。そのため、地形測量図・墳丘測量図も十分なものは作成出来なかったことが惜しまれる。

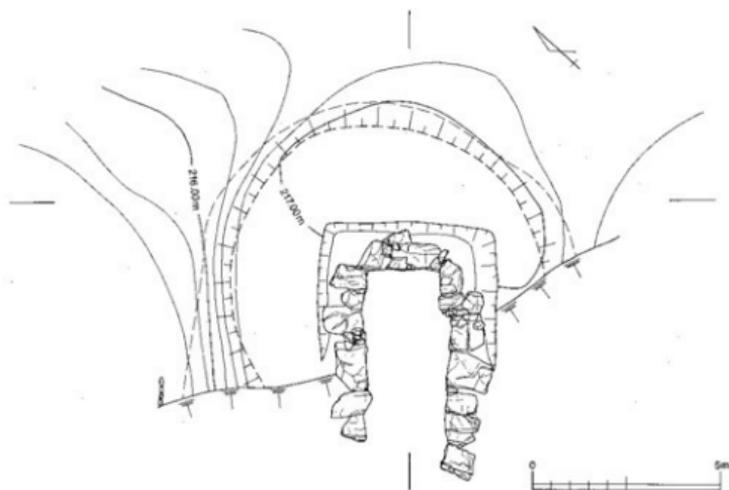
残存した部分についても、中近世墓にとどまらず近現代墓も築かれており、損壊が予想されていたが、決定的な損壊は受けておらず、比較的墳丘は旧態を保っていた。外部施設としての列石から規模も十分に把握出来た。



第38図 古墳の位置



第39図 地形測量図

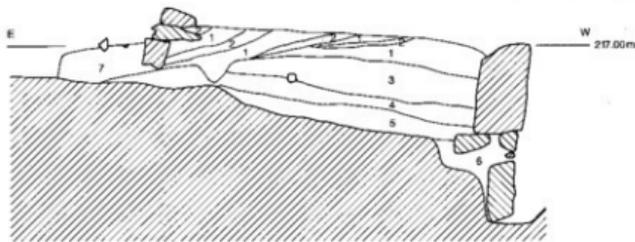


第40図 墳丘測量図

3. 墳丘築成

古墳は、緩斜面上に立地する径10mの不定円形の規模であるが、墳丘は後世の造墓活動で削平を受けている。残存している墳丘から築成状況をみてみると、まず標高の高い東側墳裾部分を掘り下げ墳裾を画している。この掘り下げは、墳裾部分の狭い部分に限らず皿状に広く削り出しており、墳丘の一部にも及んでいる。そのため奥壁後部の墳丘部分は地山のまま削り残している。東側部分は削平した上に盛土をしたことになる。埋葬主体である横穴式石室を築きつつ、墳丘プランを決定したものと思われる。開口部分が損失しているので断定は出来ないが、庄境2号墳をはじめ同じタイプの古墳から想定すると、開口部と外護列石は繋がっていることが多く、同様の形態を取る可能性が高いと思われる。東側墳裾を削り出すとともに石室掘り方を掘り、石室プランと墳丘プランを決定したものと思われる。墓壇掘り方は、当然ながら東側が深く、西側の標高の低い方は掘り下げは見られない。基底石もしくは二石目を積んだ段階で墓壇の埋め戻しとともに墳丘を築き始める。この段階は水平に近く積んでいるが、やはり地形の高低によって盛土の状況が異なっている。南北の石室に直交する畦畔の土層堆積からはその上層から地山土である礫混じりの黄色土とクロボクで形成された黒色土層を互層に盛り墳丘を築いている。奥壁側の東トレンチの状況だけ異なり、奥壁2石目途中まで水平堆積が見られる。その上面までが墳丘築成土下層と考えることが出来よう。それより上層は互層に積んでいくものと思われる。

調査時点は、墳丘の上部の盛土はほとんど残っていなかったが、東側の標高の高い部分だけは一部だが、上部の盛土が見られ、僅かに墳丘築成状況資料の追加が得られた。墳裾である外護列石まで墳丘は及ばず、手前までで止めている。その上の盛土は互層を基本とし、急傾斜を

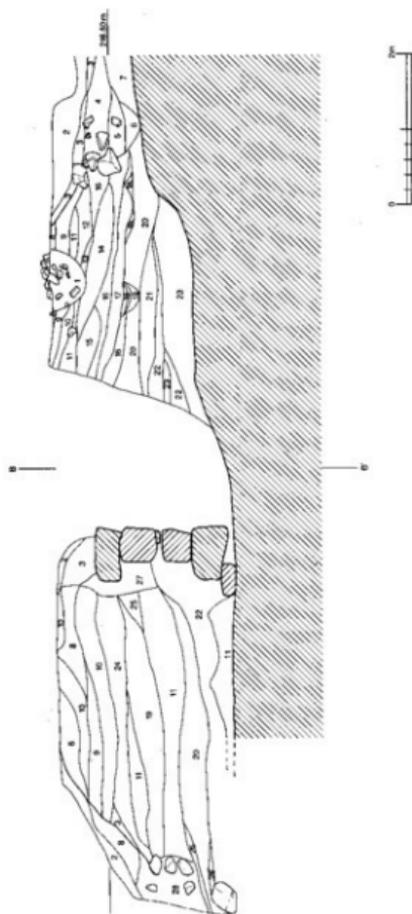


- | | | |
|---------------------|------------------|-------------------|
| 1. 黄褐色シルト及び黒褐色極細砂互層 | 2. 黒色シルト質極細砂(緻密) | 3. 黒色シルト質極細砂(レキ混) |
| 4. 黒色シルト質極細砂(レキ多) | 5. 黒褐色極細砂(レキ混) | 6. 淡褐色シルト質極細砂 |
| 7. 黄褐色砂混りシルト | | |

第41図 墳丘土層断面図(東側)

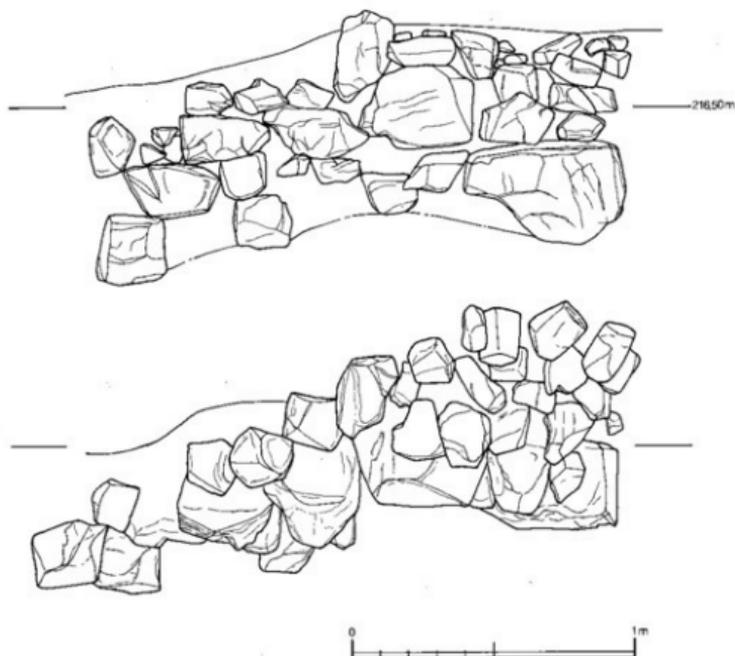


第42図 外護列石平面図



- | | | | |
|----------------|---------------|----------------|----------------|
| 1、 | 淡褐色極細砂(攪乱) | 2、5、7 | 暗褐色極細砂(レキ混) |
| 3、26 | 明褐色極細砂 | 4、6、23、27 | 黒褐色極細砂(レキ混) |
| 8、9、12、13 | 暗褐色極細砂 | 10、14、15、17、19 | 淡黄色極細砂(ボラス混) |
| 11、16、18、21、27 | 黒褐色極細砂 | 20 | 暗褐色極細砂(緻密) |
| 22 | 黄褐色シルト混暗褐色極細砂 | 24 | 淡黄色極細砂混り暗褐色シルト |
| 25 | 黒褐色シルト | | |

第43図 墳丘土層断面図(南北)

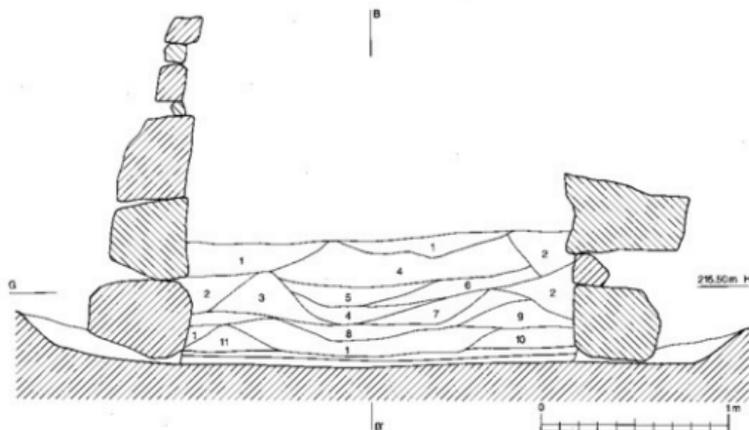


第44図 外護列石北側実測図

示している。外部施設（外護列石）がなければ、不可能な墳丘で、墳丘規模が小さい理由と
 えよう。外護列石がなければ、盛土の積む角度も緩くなり、墳丘高が低くなるか墳丘径が大き
 くなるものと思われる。

4. 横穴式石室（内部主体）

開口部を中心に両側壁とくに南壁は損壊を受けている横穴式石室である。天井石は調査時
 において残っていなかったが、調査前の損壊によって移動した石材の天井石になりそうな大形の
 石材は1石しかなく、昭和55年度の庄境2号墳調査段階での1号墳の墳頂部が陥落していたこ
 とから、古い段階に天井石は除去されていたようである。墳丘上および周辺には中近世墓や近
 現代墓も築かれていたが、石室内は利用されておらず、2号墳とは異なっている。石室埋土は、
 調査前の損壊時の落石・土砂を除外すると、約50cm堆積しているが、その間の遺物は北宋銭
 （祥符通宝）1枚だけである。開口部付近は床面近くまで手が加えられており、堆積土が少な



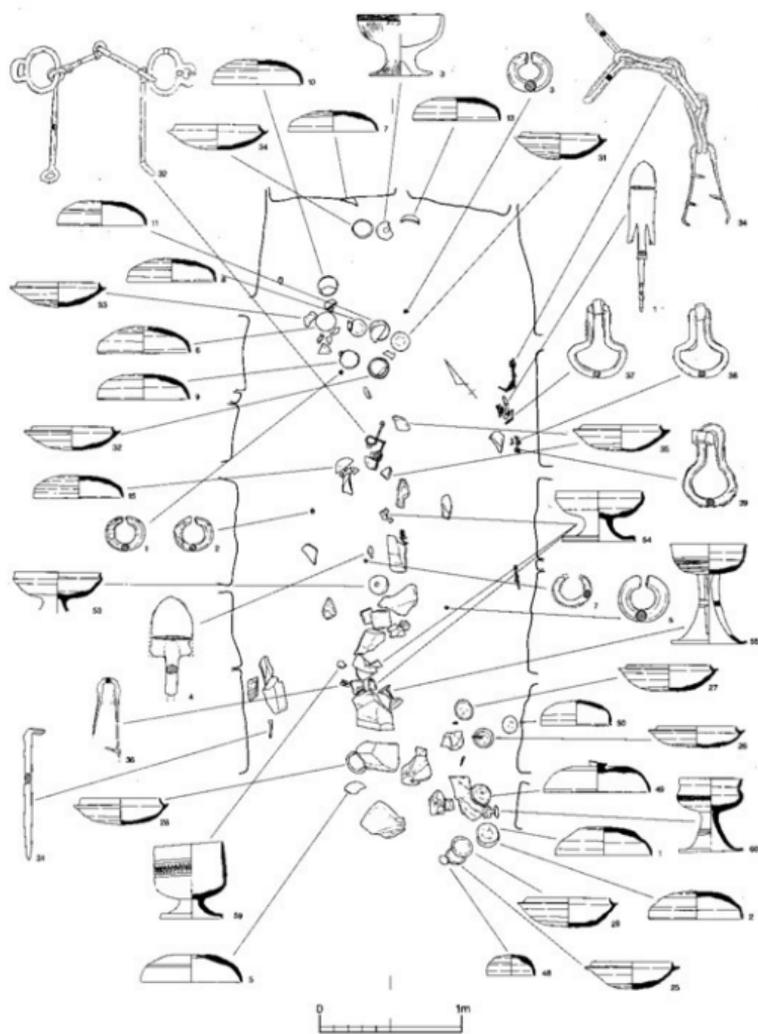
- | | | |
|-------------------|-----------------|-----------------|
| 1. 淡褐色極細砂 (礫含) | 2. 暗褐色極細砂 | 3. 暗褐色極細砂 (混小礫) |
| 4. 明褐色小礫 | 5. ややにごった明褐色小礫 | 6. 黒色極細砂 |
| 7. 淡褐色極細砂 (礫含) | 8. 黒褐色極細砂 (礫少々) | 9. 黒褐色極細砂 |
| 10. 褐色シルト混り暗褐色極細砂 | 11. 淡暗褐色極細砂 | |

第45図 石室内土層堆積状況

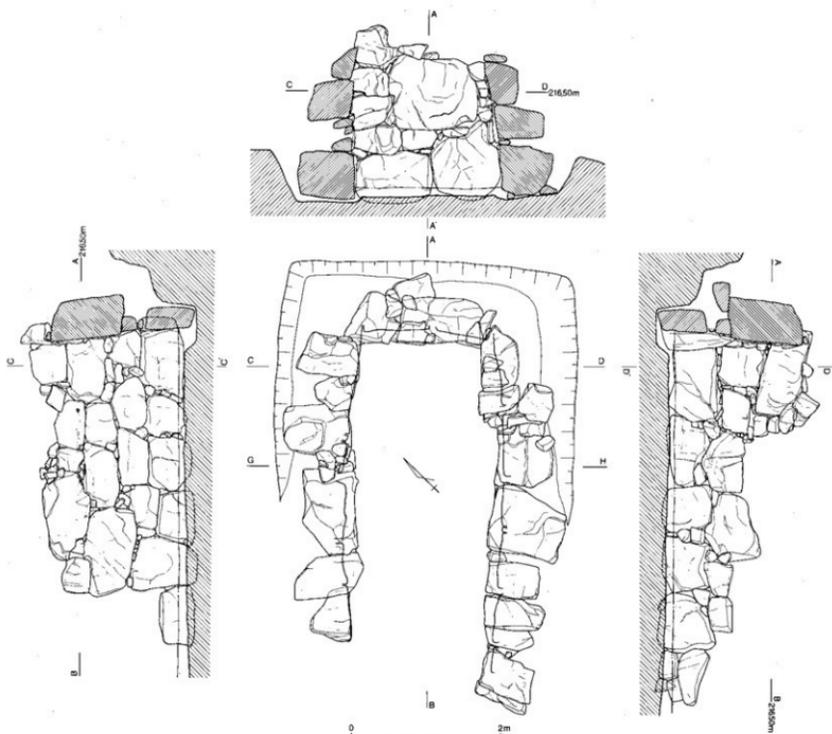
く堆積土上から寛永通宝が出土しており近世には開口していたことは明らかである。堆積土上面で牛の埋葬が見られた。奥壁手前で両側壁・奥壁の3面に接するように1頭の牛が埋葬されていた。石室幅いっぱいに置かれ、ほぼ全骨格が完存していた。石室内の唯一の埋葬例であるが、時期的には現代の可能性もある。庄境1号墳は地元ではウツツカとも呼ばれていたようで、調査前に重機によって除去された土の中からも牛をはじめ犬・山羊・豚などの獣骨が出土している。堆積土の少なさなどから、天井石がなくなったのは近世と考えるのが妥当かと思われる。篠山近辺では築城に際しての採石で古墳石材が利用された資料はないが、南方の栗植野・当野を中心に採石されており、古墳の破壊の原因を築城に求めることも可能かもしれない。

横穴式石室の規模は、奥壁での幅1.75m、最大幅2.1mと幅の広い石室である。残存長4.7mで開口部が残存していないが、墳丘規模と石室の平面プランから考えてもさほど大きくはならないものと思われる。残っているも1m前後と推定される。石室の形態は胴廻りの無袖式の石室である。最大幅を石室中央付近に持つものと思われる。調査段階では、大形の石材が南側壁残存端に接して存在したことから袖部の可能性を考えて調査を行っていたが、堆積土が続いていたことから落石と判断した。

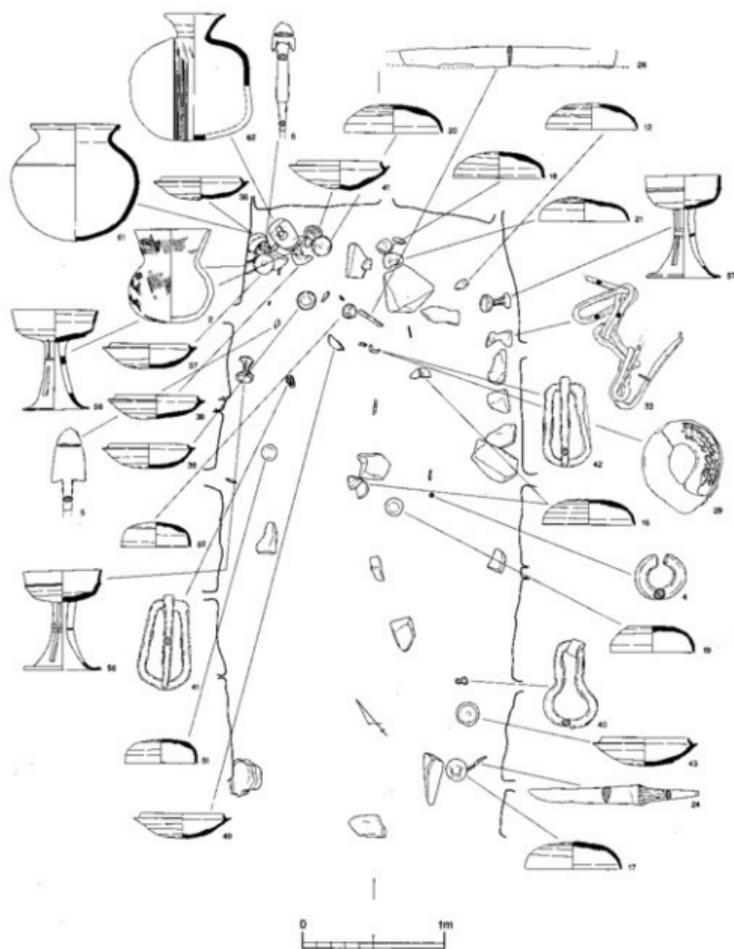
用石法は、北側壁で縦積みの石材が1石あるが、他は全て横積みを採用している。墓壇を穿っ



第46图 第1次床面遺物出土状态



第47图 横穴式石室尖洞图



第48图 第2次床面遗物出土状态

たのち基底石を置いているが、基底石が大形の石材を使っているわけではない。基底石を据え置くための掘り方は設けている。0.1~0.3mと浅いものである。また裏込の石も最小限で多数の石材を使わず、最小限の使用で構築している。石材の大きさは2石目・3石目とほとんど変わらず、最大の石材は奥壁の2石目に見られる。石の積み方は2石の間に置き、2方向に力を分散させるように原則的に企図したものであろうが、北側壁の残存部から2石目の縦積みとされた部分は目地が通っている。石材は、横ヶ峯をはじめ近隣一帯で採取される丹波石と呼ばれる流紋岩を使用している。石室の高さは、奥壁で残存高1.8mを測っており、ほぼ石室高に近い数値と思われる。壁体は全体に持ち送っているが、3石目から顕著になっている。

床面は、大きく2面検出しているが、それ以上に埋葬面はあるものと思われる。石室内に排水溝は設けておらず、明らかに棺台と考えられる石も確認していない。敷石も施されていなかったようである。第1次床面で中央部分から開口部にかけて主軸上に石列が見られたが、性格は判らず棺台であるとは首肯しがたい。

5. 遺物出土状態

上面で牛の屍体が葬られた現代墓と中世の北宋銭は出土しているが、庄境1号墳の埋葬面まで手は至っていなかったと思われる。調査段階で落石を袖石と考えていたことから、第1次床面の開口部付近の取り上げ時期が遅れた。そのため、写真撮影では別々になっている。埋葬面は2面確認している。耳環の数からみても2体ではなく6体以上の埋葬を行っていることは確実である。

上層の第2次床面では、須恵器・土師器・鉄器・耳環が出土している。奥壁前方の北側壁とのコーナーに遺物は最も集中している。石室の奥半部全域と南側壁沿いからも遺物は検出されているが、石室中央部の遺物は原位置を保っていないものと思われる。奥壁コーナー部分から南側壁沿いの遺物は完形品が多く副葬位置をほぼ保っているものと思われる。出土位置は、原位置を保っている奥壁前方部と南側壁沿いと手が増えられている石室中央部の3ヶ所に大別できるが、南側壁沿いの遺物は中央に遺物のない部分があり、性格が異なるように思われる。奥壁から約75cm離れたところから続く石列を棺台と考えた場合、石室中央の移動した可能性のある遺物と同一に扱った方が妥当かもしれない。石列を棺台と考え埋葬位置と考えることが許されるならば、第2次床面で南側壁沿いの前後に棺が置かれたものと想定される。奥壁隅は最も遺物が集中しており、須恵器9点、土師器1点(2)、鉄鏃2点が出土している。須恵器9点の内訳は、杯6点(20・36~39・41)、高杯(58)、壺(61)、横瓶(62)で杯が多数を占めている。杯はセット関係にある蓋が1点あるのみで、他は身である。積み重ねた状況になっており、出土状況のレベル差は、25cmを測る。奥壁前方から南側壁奥半の遺物は、奥壁と石との間から杯蓋2点(18・21)と高杯(57)、鉸具U字形金具の付属した兵車鎖が原位置を保って出土している。石室中央からは保存状況の悪い鉄刀1振(26~28)、鏃(29)、鉸具(42)、鉄鏃(5)、

鉄釘 (31)、耳環 (4)、杯蓋 (12・16・19)、杯身 (40)、壺用蓋 (52) が出土している。杯蓋 (16) のように 1 m 離れて接合したのもあり、少なからず移動しているが、棺を想定した周囲で出土している。南側壁開口部近くでは、杯身 (43)、杯蓋 (17)、刀子 (24)、髹 (40) が出土している。

第 1 次床面は、5～10 cm 第 2 次床面の下にある床面である。後述するが、出土状況が 2 面の床面は反対で、馬具から見ると 1 セットとして扱えられそうである。しかし、上下 2 面での接合関係はなく、最終埋葬が追葬時の作業で遺物が分離したものと思われる。第 1 次床面は、石室主軸部分と南側壁沿いの一部と開口部周辺の 3 ヶ所から遺物は出土している。石室主軸部分は、中央付近で完存状態の素環鏡板付髹 (32) と耳環が 5 個 (1～3・5・7)・鉄鎌 (4)・U 字形金具 (36) そして奥壁近くで土師器高杯 (3) が出土している以外は、杯を主とした須恵器である。須恵器は杯身 6・杯蓋 9・高杯 3・台付碗 1 の 19 点が出土している。中央から開口部にかけての須恵器は主軸部分内ではあるが接合関係がある。高杯 (54) のように 3 ヶ所から離れて出土したものもある。南側壁沿いからは、鉄鎌 (1)、髹 3 点 (36～38)、兵庫鎖 (34) の鉄器類が出土している。開口部付近からは須恵器が 10 個体検出された。杯身 4 個、杯蓋 2 個、有蓋高杯蓋 1 点、壺蓋 2 点、台付碗 1 点で原位置を保っているものと思われる。また、1 点だけ北側壁寄りに鉄釘 (31) が出土している。

第 1 次・第 2 次床面の遺物出土状況は対照的である。第 1 次床面は石室主軸上に集中し、第 2 次床面は石室側壁、奥壁沿いから出土している。出土状況を平面的な観察から見ると、同一面と思われるかもしれない。しかし、2 面の間には 5～10 cm の堆積土があり、2 面の間での接合関係は認められず、垂直的にみると 2 面と考えられる。ただ、明らかな時期差は看取できない。奥壁隅の土器群は、2 回目以降の埋葬時の片付けのためと考えられる。

6. 小結

庄境 1 号墳は、径 10 m 前後の小形の円墳で横穴式石室を内部主体としている。墳丘および石室が半壊状態になったことが惜まれるが、予想外の遺構の検出も含めて多くの成果を挙げた。

古墳の位置は、篠山盆地の南西の入口部に位置し、前方の水田は谷中分水嶺があるような平坦地である。谷中分水嶺を見下ろす東側の丘陵斜面に立地している。古墳からの眺望は広くなく、南方の谷に沿った部分だけである。それゆえ、眺望関係にある古墳も数少ない。

庄境古墳群は、北西約 15 m に同じく横穴式石室を主体部とする円墳である庄境 2 号墳が存在しており、2 基で構成される古墳群である。2 号墳は、昭和 56 年度に同じく近畿自動車道建設に伴い調査され、1 号墳調査段階では現存していなかったため、仔細な点まで観察出来なかったことは残念である。石室・墳丘規模とも 1 号墳より小形で、墳丘は 8.8 m、石室は全長 5.6 m、幅 1.5 m と一回り小さい。北西方向の標高の低い方に築かれている。平面プランなども似たタイプであるが、敷石の有無の違いがある。また、築造年代には隔たりはないが、2 号墳の方が

遅くまで追葬を行っている。最終段階のTK-217期は1号墳では見られず、1号墳は床面の検出数と同じく大きく2時期の埋葬時期が考えられる。

庄境1号墳は、槇ヶ峰から下った斜面上であるが、周辺では最も緩やかな部分に占地している。周辺の地形を巨視的に見ると緩斜面の広がり中央部分に築かれていることが判る。外形は、後世の手が大きく加えられており、墳丘の高さは求めようがないが、平面的にはほぼ数値を求めることが出来る。石室開口部付近は残存していないため不明であるが、外部の列石の基底石から復原が可能となった。開口部付近は想像の域を脱せないが、2号墳同様の列石が考えられる。開口部から墳裾を巡るタイプのものであろうと思われる。ただ、2号墳が隅隅方形に近い直線的な列石であるのに対して、1号墳の方が硬い曲線ではあるが、まだ弧状になっている。列石の径を測ると最大値は11.4mを測る。墳丘の高さは1.6m残存しているが、石室の高さを考慮すれば、さらに高いことは言うまでもない。墳丘内の列石は認められなかったが、墳丘上層築成土に伴うものが一般的であることからすれば、残存していないのが当然かもしれない。2号墳は、奥壁裏側に直線的な列石が見られ、列石の類似性からすれば、1号墳にも同様の列石があった可能性は十分にある。

主体部である横穴式石室は、無袖の胴張りのタイプの石室である。石室の規模は、奥壁での幅1.75m、最大幅2.1mで残存長は4.7mを測る。石室の平面プランから見て最大幅の部分から狭まっており、墳丘規模も考慮すると、1m余りが欠失したものと思われる。石室長は6m前後と考えるのが妥当であろう。石材は地元山塊で採取される流紋岩を使用しており、裏込石・栗石も同様である。用石法は、北側壁の1石を除いて横積みされており、特別に巨石と言われるような大形の石材も使っていない。最大の石材は奥壁2石目で1m四方の正方形に近い立面観をしている。流紋岩の節理面を利用しているためか石室内側の面は、ほとんど平滑である。北側壁の縦積みされた唯一の石は、墓壇廻り方も最も深くしており、用石法から見ても有袖式の袖石に近い性格を求められる。この部分の幅は、1.75mで奥壁幅と同じ値である。ここから奥壁までは2.75mとなる。天井石が残っていれば明らかとなるが、無袖式の石室でも玄室・羨道に近い区別がある石室も見られ、同様の形態になることも一考出来るが、推定の域を出ない。遺物の出土状況からも明らかには出来ないが、今後の問題として残しておきたい。

V. 庄境1号墳の遺物

出土した遺物のうち古墳時代に属するものは、全て石室内から出土している。石室内は残存している石材の上まで土砂や転落石で埋没しており、天井石が抜き取られた後に堆積した土砂を取り除いた下からも牛骨や寛永通宝などが出土し、本来の床面はかなり荒らされている状態が伺われた。

本来の古墳に伴う埋葬面は、土層的には確認し得なかったが、遺物の出土状況に応じて下から第1面、第2面、第3面と呼称して、遺物の取り上げを行った。但し、第1面では玄室入口付近の転落石下からほとんどの遺物が出土していることや、第1面と第2面の土器、第2面と第3面の土器が接合することから、床面としては3面あったとは考えにくい。

出土した遺物には、須恵器、土師器、鉄製品（鐵・馬具など）、耳環がある。

1. 須恵器（第49・51・53図）

石室内出土の須恵器は、杯蓋23点、杯身23点、蓋6点、高杯6点、台付碗2点、横瓶1点、甕1点があり、この他に小片のため図化できなかったが提瓶1点が出土している。

これらの須恵器の取り上げた面は、

第1面	1～5、24～29、48、50	} 第1次床面
第2面	6～11、30～35、49、53～55、59、60	
第3面	12～21、36～43、51、52、56～58、61、62	第2次床面

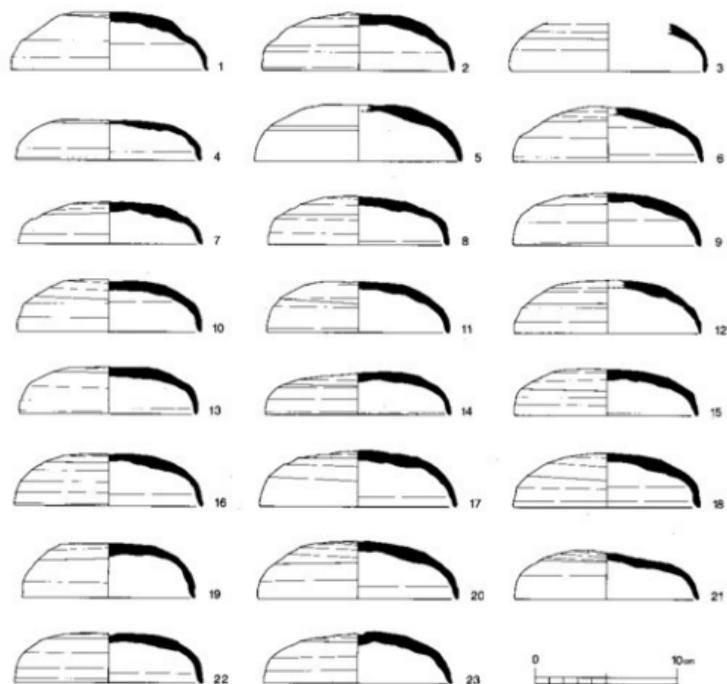
であり、22・23・44～47は最上層検出中に出土したものである。

全体として胎土中には2～5mm大の石英・長石の砂粒を含み、色調は灰色～白灰色で焼きあがりあまり良くないが中には4・26・60などの様に良好な焼成のものも含まれる。また反対に、3・45・49の様に非常に焼きのあまいものも見られる。

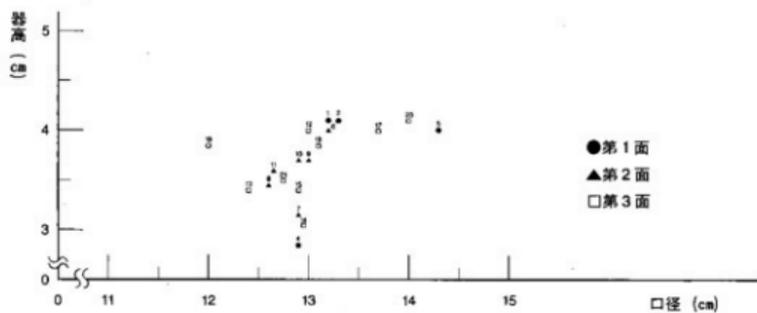
以下に各器種別に見ていく。

杯蓋（1～23） 器形は扁平であり、天井部から口縁にかけては稜をもたずに丸く続く。4は中でも特に扁平な作りをもち、焼成などを含めて他のものとは異なっている。5には天井部と口縁部との境に一条の凹線が施されている。また1・2・6～8・12・16・21では天井部と口縁部との境界に浅く広いくぼみが見られる。口縁端は殆どが丸くおさめているが、8・10・15・19ではナデによって端面をわずかに内傾させており、とがり気味におわる。また14・18では口縁内面を浅くくぼませている。天井部に見られる回転ヘラ削りは、粗雑ではあるが全てに施されており、その範囲は1を除くと $\frac{1}{2}$ 以上あたっている。天井部内面には仕上げナデが施されている。

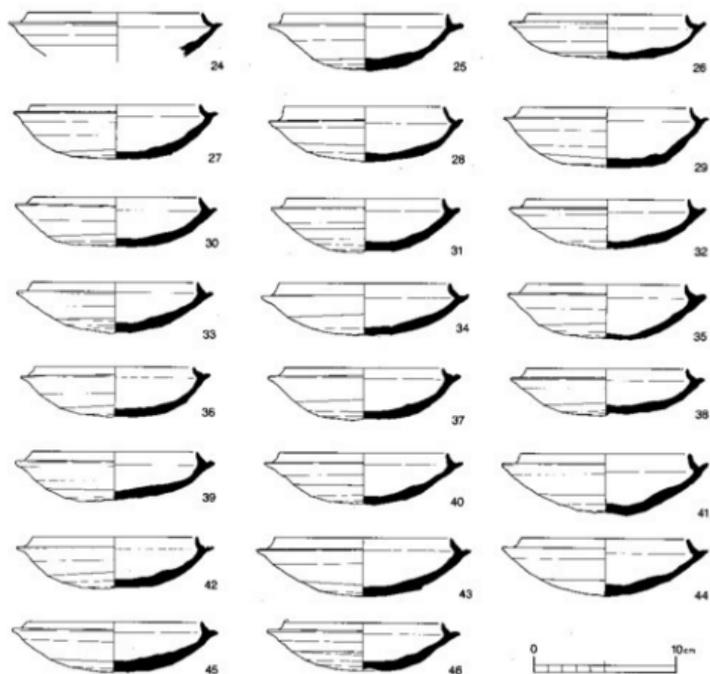
第50図は器形の $\frac{1}{2}$ 以上が残っている杯蓋の法量分布図である。第1面出土のものでは、作り



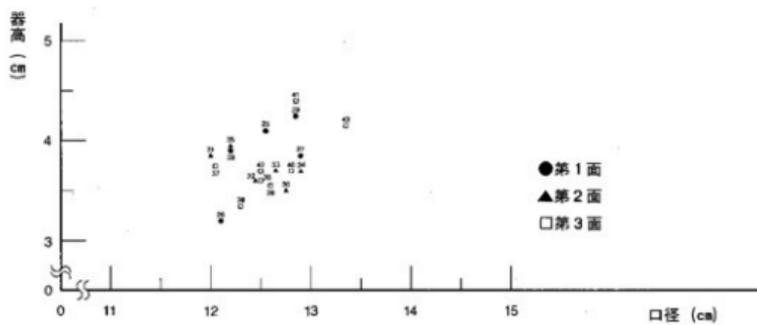
第49图 须惠器突测图(1)



第50图 杯盖法量图



第51图 須恵器実測図(2)



第52图 杯身法量图

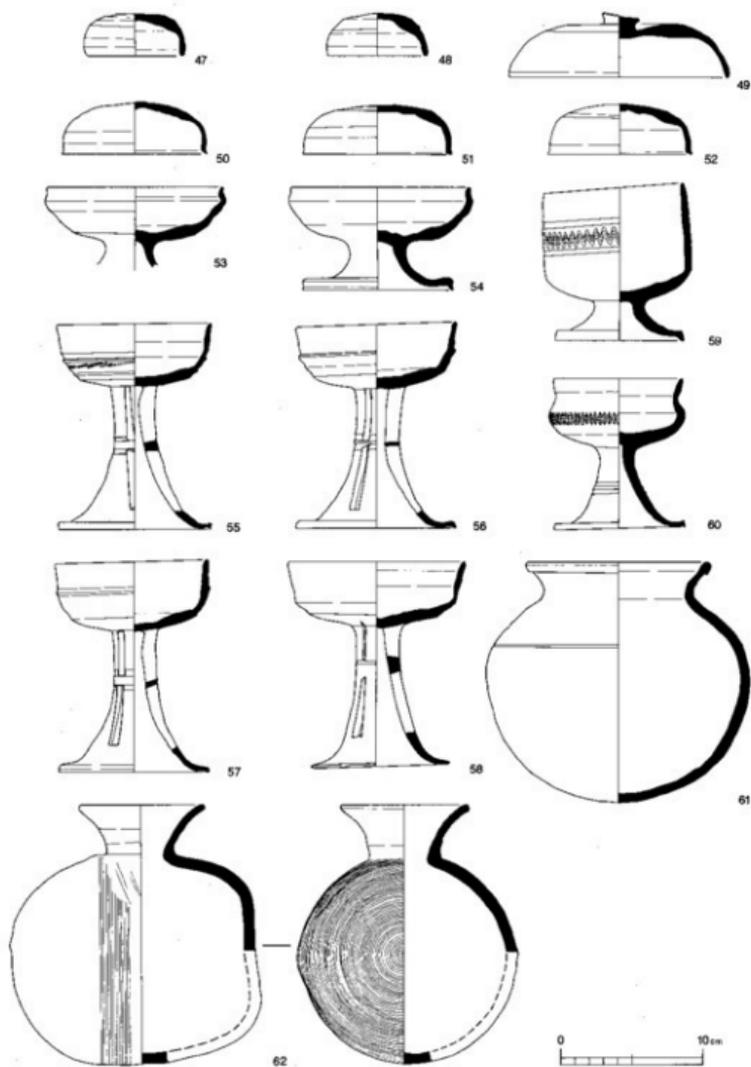
の明らかに異なる4・5を除くと平均的法量は口径13.25cm、器高4.1cmである。第2面出土のものは口径12.88cm、器高3.6cm。第3面出土のものでは、大型のもの(20・21)口径13.9cm、器高4.1cm、小型のもの(19)口径12.0cm、器高3.85cmが分布の中心からはずれて分離してあらわれる。残りの平均的法量は口径12.8cm、器高3.47cmとなり、わずかではあるが、第1面から第3面へと個体の縮小の傾向が看取される。

杯(24~26) 器形は全体的に扁平であるが、底部はヘラ削り後も丸味を残しており安定感に欠ける。32・35・40・46では底部と体部との境界に杯蓋の一部でも見られた様な浅く広いくぼみが見られる。たちあがりは短く内傾しており、端部は丸くおさめている。たちあがりと体部の境界内面は、第1面出土のものは全て折りかえした様に深くなっているが、更に上面のものでは浅くなり、30・33・39・45では体部からなだらかに続いている。受部は26の様にやや上方に向くものもあるが、ほとんどが水平に近い。第1面出土の28には受部上面に幅3mm程のヘラによる凹線が巡らされているが、更に上面出土のものでは普遍的となり、34を除く全てに見られる。但し41・43ではやや幅を増している。底部の回転ヘラ削りは粗雑ではあるが全てに見られ、その範囲は $\frac{1}{4}$ 以下のものはなく $\frac{1}{2}$ 近くまで及ぶものもある。器形の $\frac{1}{2}$ 以上残る杯の法量分布は第52図の通りであるが、焼成等の異なる26を除く第1面出土の法量平均値は口径11.63cm、器高4.04cm、第2面出土のもので口径11.49cm、器高3.72cm、第3面出土のものでは杯蓋と同様に大型のもの(41・43)が抽出され、その平均値は口径12.1cm、器高4.28cmとなる。その他の第3面出土の法量平均値は口径で11.46cm、器高3.61cmとなり、杯蓋と同様に第1面から第3面へと個体の縮小化が伺われる。

杯26は杯蓋4とセット関係になると考える。その他、杯11と杯蓋36も対応する。

蓋(47~52) 47は石室内で面から遊離した上層から出土している。口径6.6cm、器高3.0cm。48は第1面出土のもので口径6.8cm、器高3.1cm。丸味をもつ器形で天井部には回転ヘラ削りを施す。口縁端は丸く結めている。天井部内面には仕上げナデを施す。49は第2面出土、口径は15.2cmをはかる。丸味をもつ天井部から稜をもたずに口縁部に続く、口縁端は丸くおさめる。天井部中央に直径2.7cm、高さ1.0cmの扁平なつまみがつく。天井部にはカキ目が施され、内面には仕上げナデが見られる。50は第1面出土、口径10.5cm、器高3.5cm、51・52は第3面出土で各々口径10.5cm、10.0cm、器高3.5cm、3.6cmをはかる。50・51は丸味をもって天井部から口縁部に続き、口縁端は外につまみ出して内傾する端面をもつ。天井部は回転ヘラ削りを施し、同内面は仕上げナデが見られる。52も前二者と同様の形態ではあるが、口縁部がやや垂直気味に立ち、端面が浅くくぼむ。これらの蓋は各々短頸壺、有蓋高杯などに伴うものと考えられるが、それに見合うものは出土していない。

高杯(53~58) 無蓋高杯53・54は低脚をもち、両者とも第2面出土である。54の口径12.9cm、器高7.3cm、底径10.6cm。杯部は杯蓋を転用した様な形態を呈しており、扁平な器形で、



第53回 須惠器実測図(3)

底部と口縁部との境界に浅く広くぼみをもつ。底部には4/5程の範囲でヘラ削りを施した後、回転によるナデをあてている。内面には仕上げナデが見られる。口縁部は屈曲して内傾するが、屈曲部の内面は杯のたちあがり内面に極めて類似している。口縁端部はややとがらせ気味に丸くおさめる。脚は水平にひらいた後、下方につまみ出し側面をつくる。55は第2面出土、口径10.7cm、器高14.6cm、底径10.6cm、杯部は小形で深く二条の稜と稜にはさまれた櫛描き列点文で底部と口縁部を分けている。脚部は大きくひらいた後、下端を下方につまみ出して側方に面をつくる。透しは2段2方向で上段と下段の境界に2条の凹線を施す。しぼり痕はあまり顕著ではない。56・57は第3面出土のものであり、形態は55に類するが、稜線はにぶくなり、2条の稜線の間隔は55より広く文様をもたない。脚部の透しは3方向であり、端部の側面は丸く不明確なものになる。58も第3面出土の長脚高杯であるが、口径12.3cm、器高14.7cm、底径9.75cmと不安定な脚に大きく広い口縁部をもつ。杯部における底部と口縁部との境界は稜をもたずに屈曲する。脚部の透しは2段3方向で、上段のものは切り込みを入れただけにとどまっている。上段と下段の間に1条の凹線。脚端は面をもたず、丸くおさめている。

台付碗 (59・60) 第2面出土。59は口径9.8cm、器高11.2cm、底径9.1cm。碗部は深く、丸い底部からまっすぐ立つ口縁部をもつ。体部には2条の凹線とその間に櫛描き波状文を施している。短い台脚部は大きくひらいた後、下端をつまみ出して側面をつくる。60は口径8.9cm、器高10.75cm、底径9.2cm、碗部は浅く、扁平な体部から一旦くびれて、やや外方にひらく直口をもつ。体部には櫛描き列点文を施す。大きくひらく台脚部には2条の凹線が施され、端部は側方に面をもっておわる。

壺 (61) 第3面出土。口径12.5cm、器高17.1cm、腹径18.5cm。球形の胴部に短く外反する口縁部がつく。口縁端は外方に肥厚させ丸くおわる。肩部には凹線文が施され、胴部下半外面には静土ヘラ削りが施されている。胴部上半外面及び内面はナデによって仕上げている。尚、底部近くの器表面が剥落したところにモミ圧痕が観察される。

横瓶 (62) 第3面出土。口径12.5cm、器高17.1cm、カキ目を施した俵形の体部に大きくひらく口縁部がつく。口縁端は丸くおさめている。自然釉・灰かぶりや熔着が著しい。



第54図 土師器実測図

2. 土師器 (第54図)

1は石室内埋土中から遊離して出土している。器形は図上復元であるが、扁球形の胴部に直口がつく。底部は中央にわずかにくぼませた丸底で粗い刷毛が不整方向にあてられており、肩部以上は刷毛目を細かいヘラ磨きで消している。2は第3面出土の直口壺で、下ぶくれの胴部にやや外にひろく直口がつく。手拍ねで成形した後、粗い刷毛をあて、底部、くびれ部、及び内面をナデで仕上げる。3は第2面出土の低脚高杯で、丸い碗形の杯部に短くひろく脚がつく。脚下面は接地面の広い作りである。外面は粗い刷毛の後、筒部、口縁部をナデで仕上げ、脚裾部外面は刷毛のまま残している。

3. 鉄製品

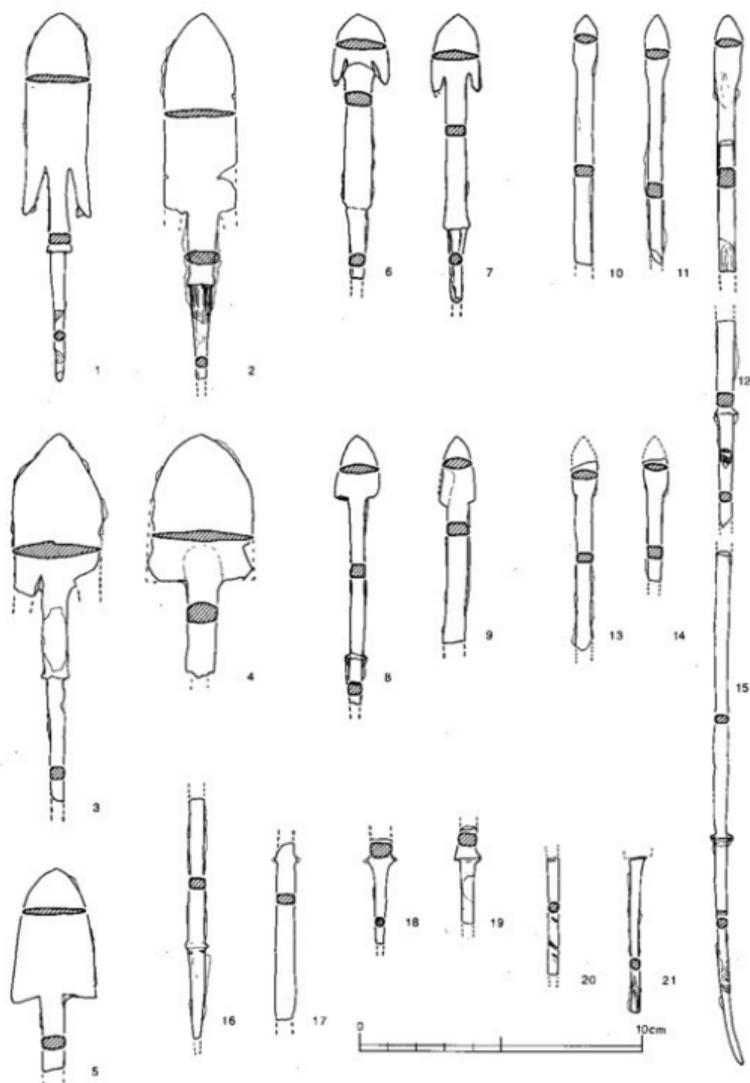
鉄鎌 (第55図)

鉄鎌は玄室内より合計22片出土しているが、完存しているものは1点しかなく多くは折損している。出土状況を見ると玄室右奥および左側壁沿いに集中はしているが、追葬あるいはさらに後世の攪乱で原位置は留めていないものとおもわれる。鎌身は錆に被われているが茎には木質や樹皮、糸巻痕が観察され、矢柄に装着された状態で副葬されたことが窺える。

1は唯一全空の残るもので、全長6.5cm、鎌身長3.7cm、筥被長1.5cm、茎長2.3cmである。鎌身には逆刺がつき、錆のため一見重拵のように見えるが、普通の腹拵であろう。鎌身の最大幅は先端に近い位置にあり、その断面は扁平である。筥被の下端はやや幅をひろげ、その中心より少し扁った位置に茎がつく。茎は徐々に身を細め、その断面は円形である。2は1と同様の形態であるが、ひとまわり大きい。3も鎌身が大きく、逆刺のつく形態であるが、先端が三角形を呈し、断面も両丸になる。全長に対して鎌身長がやや短くなり、茎長は長くなる。4は先端が丸く、鎌身下端が関になる形態である。鎌身部と筥被部を鍛接したと思われる痕跡が観察される。5も扁平で大きな鎌身部をもち、鎌身下端は逆刺を意識した関をもつ。6は長さ約5cmと短い、比較的幅のある鎌身部をもち、逆刺を有する。鎌身部断面は両丸造である。4と同じく鎌身部に鍛接されたと思われる筥被は太く長い。7は6と同じ形態であり、筥被下端の幅をひろげる。8・9は関をもつ小さな鎌身部と、それに比して長い筥被をもつものである。8は棘状突起を有する。10~14は幅0.5cm以下の柳葉形を呈した小さな鎌身部をもち、関をもたずに非常に長い筥被に続く。12には棘状突起がある。15~18は棘筥被をもつもので18を除いては棘状突起の前後で幅を変えない。19は関筥被の部分である。

これらの鉄鎌は、鎌身長・筥被長・茎長の比率で大きく3つに分類することができる。

- A 鎌身部が長く、筥被部が短いもの。
- B 鎌身部が短く、筥被部が鎌身部の2倍程度の長さをもつもの。
- C 鎌身部が短く、筥被長は鎌身長3倍強あるもの。



第55图 铁製品実測图(1)

Aには1～5が属する。全長は短い。大きいのが薄い鎌身部をもつ。逆刺や大きな関をもつ。また、関筥被である。これらはその機能を考えて、対象に刺った時に逆刺や関によって大きなダメージを与え得るが、貫通力自体が衰える。兵器としての性格がより大きいと考える。Bには6～9が属する。短いがある程度幅があり、逆刺や関をもつ。Aよりは貫通力が高まり、また棘筥被も見られ、矢柄(筥)への装着を簡便にしている。Cには8～15が属する。幅が狭く小さな鎌身部と、断面が正方形に近く長い筥被部は貫通力を追求した結果生じたものであろう。棘筥被は矢柄装着の簡便さに通じる。またこの形式は制作の簡便さにおいても他形式の比ではなからう。

刀子(第56図 22～25)

4点出土している。唯一完存し全容がわかる24は、全長147cm、刃部長9.5cm、刃部最大幅1.6cmを測る。刃部の形状は、鋒から徐々に幅を広げ、関近くで更に大きく広がる。関の形状は装着された柄と考えられる木質が残っているため、詳細がつかめないが、22の様に片関に近いもの、24の様に両関になるもの、25の様に背関側が明瞭なものがある。

大刀(第56図 26～29)

刀身は板状に割られる錆のため劣化が著しく、本来の形状・大きさを知ることができない。敢えて図化した26・27も重なってさびついていたもので本来はひとつのものであろう。28は茎の部分であり、刃部側に湾曲した形状をもつ。刃関をもつものであろう。木質が付着し、鉄製と思われる目釘が1ヶ所認められることから、柄が装着されていたと考える。刃の部分は26・27と同様にやはり板状に割られている。29は縦5.7cm、横5cmの倒卵形をした鐙で、おそらく28に装着されていたものと考え。無窓のもので裏裏と側面に銀象嵌が施されている。象嵌の遺存状況はかなり悪いが、木質が付着しているため柄側と考えられる面では3本の圓線の内側に逆「の」字状に近い勾玉形文が2列並んでいる。刃側の面では圓線が2本しか確認できなかったが、おそらく裏面と同文であったとおもわれる。側面には2本線の間勾玉形文が並んでいる。同様の象嵌をもつ鐙は群馬県伊勢崎出土のものがある。これらの26～29は本来一本の大刀を構成するものと考え。

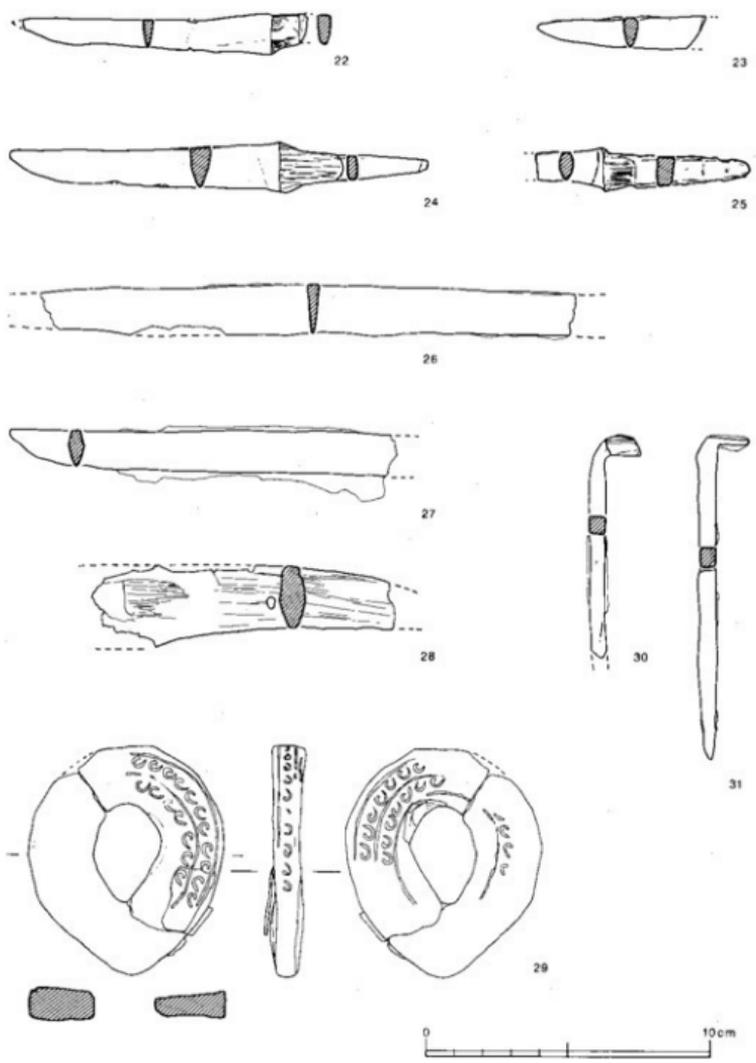
釘(第56図 30、31)

2点だけ出土しており、数量的には少ないが、30では横、31では縦の繊維方向をもつ木質が付着しており、木棺に打ち込まれていたものと考えてよからう。2点とも断面が方形の所謂角釘で大型品である。頭部を叩き伸ばした上で直角に曲げている。

馬具(第57～60図)

馬具は石室内の各面から出土しているが、ほとんどが第2面に属する。すでに腐朽した有機質材を除くと全て鉄製である。

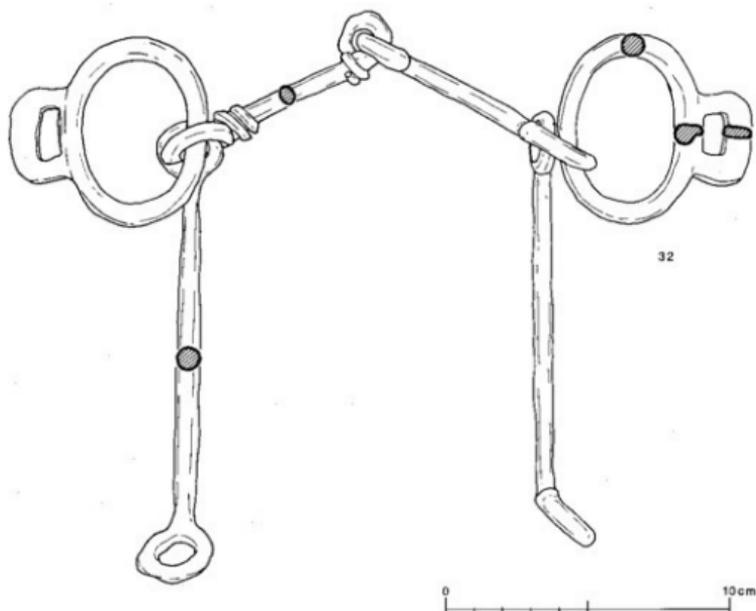
轡 32は方形立開付素環鏡板をもつ轡である。釘は両端に環の付く二連式で、一方は環が平



第56图 铁製品実測图(2)

行に付き、硝金よりも銜先側の環が大きく作られている。他方は両端の細くなった針金を環状に丸めさらに末端を環の根元に巻きつけて作られており、環は直行した位置に付く。同様に一方の環が大きい。鏡板は楕円形の環に長方形の立開が片面側に寄せて取り付けられたもので、立開の環から約3cmの位置に面繫につながる方形の孔が見られる。引手は両端に環の付く棒状のもので、引手壺側の環は折り曲げてあり若干大きめである。鏡板・引手とも銜先の環にとりつく。

銜 33・34は兵庫鎖と鉸具からなる銜鞆に銜金具が取り付けられたものである。兵庫鎖は三連つなぎで、個々の鎖は一本の針金を折り曲げて作られており、その内鉸具にとりつくものは一端を密着させずにおき、その間に刺金を入れて安定を図っている。鉸具は長円形の輪金の一端を直線に作り刺金をつけている。銜金具は「U」字状の吊手部と板状の脚部からなり「ハ」字状に開く脚部に片面2本ずつの鉄釘が打たれ、更に先端をとがらせて折り曲げ銜の固定に備えている。35・36は銜金具と考えられ、やはり鉄釘が打たれている33・34に比べてやや細く華奢な作りである。



第57図 鉄製品実測図(3)

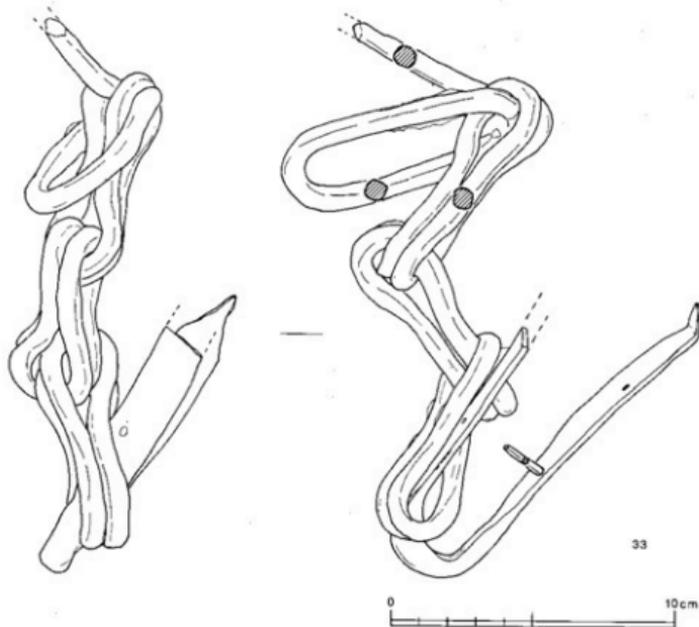
鉸具 37・38は銀杏葉形の輪金に細長い板を折り返した鉄脚が付く。鉄脚の先端は歪に屈曲している。前輪につく鞍であろう。39・40も角のとれた銀杏葉形の輪金の基部に脚がつく。また49は円盤の方形の孔を穿ったもので鞍の座金具の可能性がある。41・42は基部の幅のやや狭い丸みをもった長方形の輪金に、一端を環状に曲げて輪金にとりつく刺金をもつ。

その他 43・47は両端をつぶされた鉄でおそらく革帯をとじる際に使われていたものだろう。48は小釘状のもので木質が付着している。

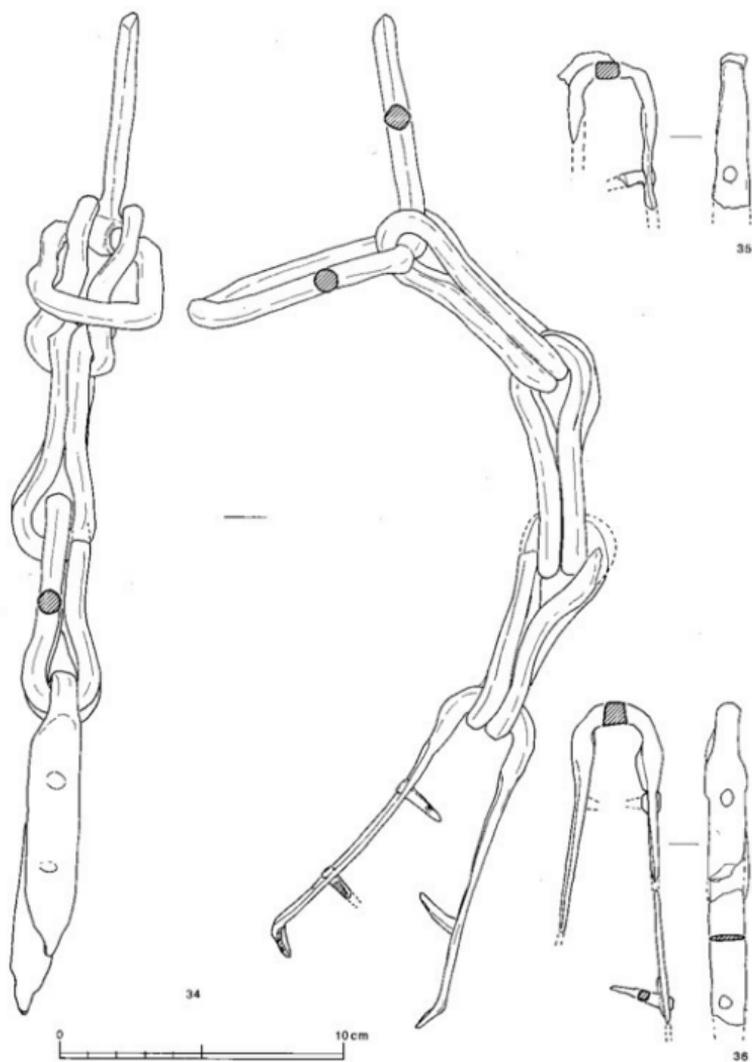
4. 耳環 (第61図)

七点出土しており、2が第1面、1・3・5・7が第2面、4・6が第3面から出土している。1・2は比較的細身のもので銀箔が施されている。3は1・2よりはやや大きく、やはり銀箔が施されているが内側の一部に金が見られる。4～6は白色を呈する大型のものでかなり重い。5では内側に細かい刻み目が観察される。7は非常に残りの悪いものであるが、1・2と同様の細身のものであろう。

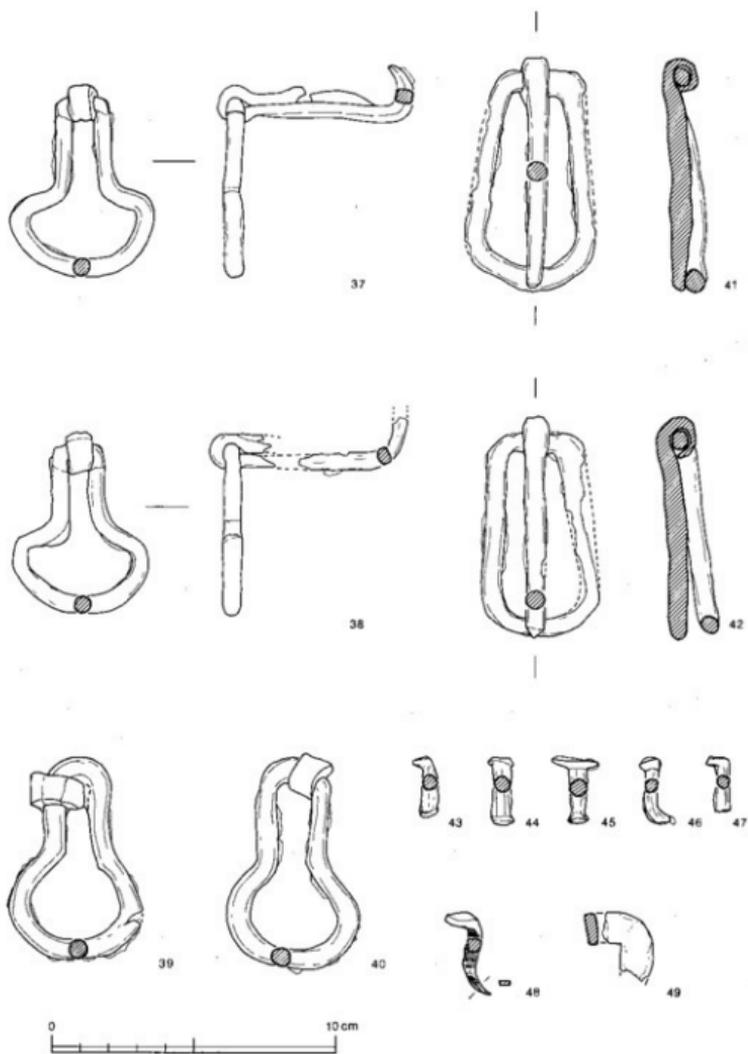
尚、3については、奈良国立文化財研究所で蛍光X線分析を実施して頂いた結果、金・銀及



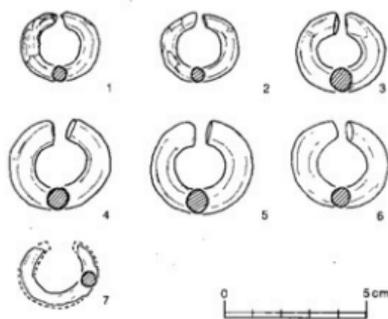
第58図 鉄製品実測図(4)



第59图 铁製品実測图(5)



第60图 铁製品実測图(6)



第61図 耳環実測図

び水銀が検出され、銀箔の上に水銀アマルガム、更に鍍金が施されていたと考えられる。また同時に、4～6についてX線回折分析をおこなったところ、白色を呈するものは炭酸鉛であることが判明した。但し、比重を測ったところ中まで全てが鉛ではないらしい。

5. 小 結

庄境1号墳から出土した遺物について、同2号墳との比較を踏まえて述べてみる。

須恵器は器種構成のうえでは大差ないが、

2号墳では4個体出土している提瓶や直口壺・長頸壺が1号墳ではほとんど見られず、1号墳では出土している台付碗や横瓶は2号墳では見られない。各器種においては、1号墳では見られない宝珠つまみと内面のかえりをもつ杯蓋が2号墳では見られる。また短脚高杯では受部の有無の差がみられる。

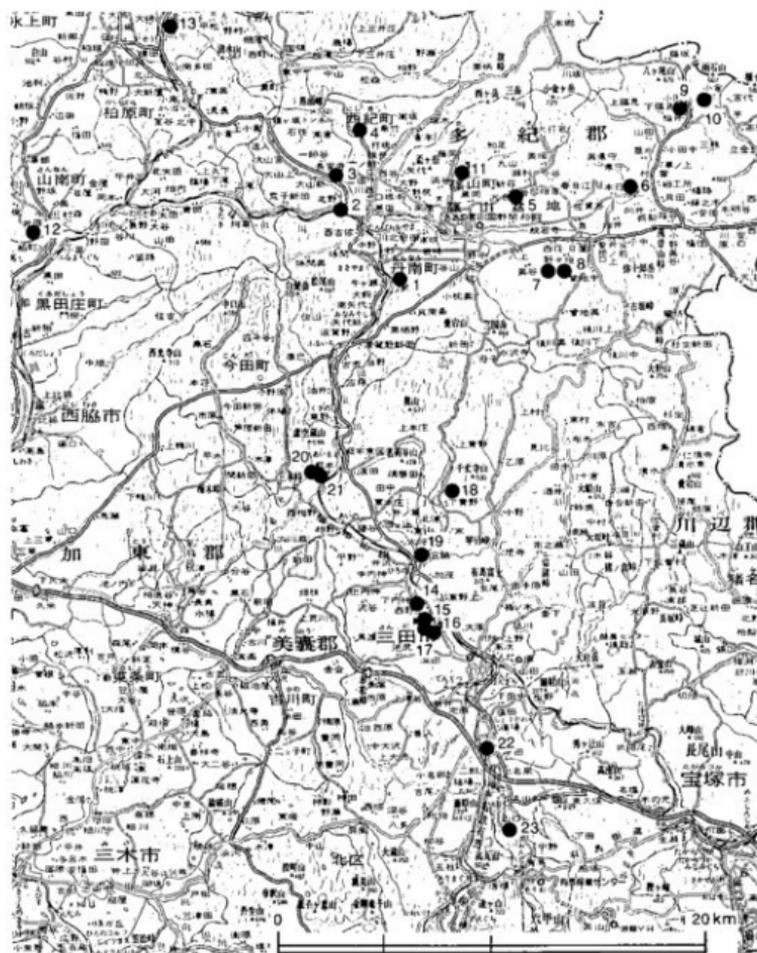
庄境1号墳はその遺物の出土状況から見ても数次の追葬がなされており、須恵器からも大きく2時期に分けることは可能である。しかしながらその時期は六世紀末から七世紀初頭の間に おさまり、比較的短期間で追葬が終了している。2号墳と比較すると若干古い様相をもつものもあるが、築造時期はほとんど同じであり、追葬については2号墳がより継続される。

鉄製品においては、1号墳がその量・質ともに2号墳を凌駕している。銀象嵌を施した鈔をもつ大刀は劣悪な鉄地金を使用したものであり、鈔自身も窓をもたない小型のものではあるが、県下でも数例しか確認されていない装飾大刀を有することから被葬者の性格が限定され得る。馬具は鍍金具を除いてはほぼ一セット分と考えられる。鉄製で装飾をもたず簡素な造りの実用品であろう。鉄は両古墳ともほぼ同数出土しており形式構成も似かよっている。大きく3形式に分類した中でA形式のものは実用品と言うより儀器的性格をもつものとして他形式と分けて副葬されたと言われている。またC形式は六世紀後半に盛行するもので実用性に富んでいる。棺に伴うと考える釘は両古墳ともほとんど出土していない。

耳環は1号墳からは7個体出土しているが対になるものを踏まえて単純に算出すると5人の人間が埋葬されたことになる。この中で3個体の鉛製の耳環があり、磨けば銀色に輝く鉛を銀の代替として使用したものであろう。

参考文献

- 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』1966 平安学園考古学クラブ
後藤守一「上古時代鐵鏡の年代研究」『日本古代文化研究』1942



第62図 丹地区馬具出土古墳分布地図

第3表 丹布地区高具出土古墳一覽表

No	古墳名	所在地	通跡概要	馬具				その他の遺物	参考文献
				物	鞍	鞍具	その他		
1	庄院1号墳	多紀郡丹南町大沢新	円墳 横穴式石室	板状立頭銅鐔 鏡板	兵組鏡 馬金具	絞	鏡・ 耳環・須恵器・土器器 鏡・刀・刺・鏃・刀子・斧・ 鏃・鏃・須恵器・土器器 刀・鏃・鉄・玉	本書 『大滝2号古墳』1981 西紀・丹南町 教委 『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地 名表』(以下分布地図)1969年奈良教委 『現代出土のあゆみ』1980磯山町教委	
2	大滝2号墳	〃 〃 大山下川向	前方後円墳 木棺直葬	〇		〇		『西紀市史』1983 分布地図	
3	神原2号墳	〃 〃 長安寺作谷	前方後円墳			〇			
4	箱塚4号墳	〃 〃 西紀町小坂	円墳 横穴式石室	〇		〇	空珠		
5	よせわ1号墳	〃 〃 磯山町菅	円墳	銅付銅板			三層輪・三角縁銅文帯 神鏡板	『古代出土のあゆみ』1980磯山町教委	
6	雲部草塚古墳	〃 〃 東本庄	前方後円墳 壺穴式石室				新内竹骨・短甲・刺・ 刀・鏃		
7	輪塚古墳	〃 〃 野々垣字志の 中坪	前方後円墳				刀・刺・土器器		
8	堂山4号墳	〃 〃 野々垣	円墳				刀・刺・須恵器		
9	オオムリ古墳	〃 〃 福井字オオム リ	円墳 横穴式石室	〇			刀・鏃・土器		
10	三の宮10号墳	〃 〃 中宇三の宮		〇			須恵器		
11	伝盛塚古墳	〃 〃 佐倉字広の坪					刀		
12	井原堂山古墳	赤上郡山南町井原	横穴式石室	〇		〇	銅杖兵庫鎖 辻金具	『井原堂山遺跡』1974山南町教委	

No	古墳名	所在地	遺跡概要	馬			具		その他の遺物	参考文献
				槽	鞍	鞍具	その他	その他		
13	王塚古墳	本上郡春日町稲塚	前方後円墳	○(金銀装)				管玉・須恵器	『兵庫県人百科事典』1983神戸新聞出版センター	
14	中西山3号墳	三田市西野上字中西山	円墳		○		金銅鍍金具	鎌・釘・鏃・金環・須恵器・土師器	『兵庫県歴史文化財調査年報昭和56年度』1981兵庫県教委	
15	西山6号墳	黄志字西山	前方後円墳 木棺直葬				銅珠	刀・刀子・鏃・金銅冠・耳環・玉・須恵器	『北照ニムエタウン内遺跡調査報告書』1983三田市教委	
16	西山7号墳	〃	円墳		○			刀子・鏃・石突・須恵器	〃	
17	奈良山7号墳	黄志字奈良山	円墳					刀子・鏃・須恵器	〃	
18	前ノ谷古墳	下野野字前ノ谷	円墳		○			鎌・釘・玉・金環・須恵器	『兵庫県歴史文化財調査年報昭和57年度』1982兵庫県教委	
19	宮脇1号墳	宮脇	円墳			○		刀・刀子・須恵器・土師器	分布地図	
20	高川1号墳	藍木字高川	円墳					金銅鍍器・鏃・耳環・玉・須恵器	昭和60年度兵庫県教委委託調査	
21	高川2号墳	〃	円墳					銅像倭人刀・玉・須恵器	〃	
22	オキタ2号墳	神戸市北区通場町日下部	未確認版					鏡金銅金具	『昭和57年度神戸市文化財年報』1982神戸市教委	
23	青石古墳	西宮市山口町下山口字青石	円墳					釘・須恵器	『青石古墳発掘調査報告』1974西宮市教委	

第4表 兵庫県下馬具出土古墳一覧表(丹有地区以外)

摂 津

No	古墳名	所在地	参考文献
24	具足塚	西宮市高座町188	『具足塚発掘調査報告』1976 西宮市教委
25	五ヶ山1号墳	〃 仁川五ヶ山町	『芦屋市史』1976
26	関西学院構内古墳	〃 上ヶ原一番町	分布地図
27	夙川学院構内古墳	〃 神園町	『兵庫県埋蔵文化財調査集報第1集』 1971 兵庫県社会文化協会
28	岩ヶ平第8号墳	芦屋市六麓荘町	『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和55年度』 1980 兵庫県教委
29	寺の内古墳	〃 三条町字寺ノ内	『芦屋市史』
30	城山15号墳	〃 山芦屋町	『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和57年度』 1982 兵庫県教委
31	園田大塚山古墳	尼崎市南清水字稲荷	『兵庫県人百科事典』
32	勝福寺古墳北墳	川西市火灯2丁目	〃
33	雲雀山西尾根B支群2号墳	宝塚市雲雀丘	『宝塚市雲雀山古墳群』1975宝塚市教委

播 磨

34	二子塚古墳	加古川市志方町字岡山	『加古川市埋蔵文化財調査集報Ⅰ』 1982 加古川市教委
35	印南野2号墳	加古川市平荘町里	『印南野 加古川工業用ダム古墳群発掘 調査報告』1965 加古川市教委
36	印南野3号墳	〃	〃
37	印南野4号墳	〃	〃
38	印南野5号墳	〃	〃
39	印南野15号墳	〃	〃
40	カンス塚古墳	〃 平荘町字池尻	『カンス塚古墳発掘調査概要』1985 加古川市教委
41	宮山古墳	姫路市四郷町坂元宮山	『宮山古墳発掘調査概要』1970 姫路市教委
42	小丸山2号墳	〃 飾東町志吹字小丸山	『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和56年度』 1981 兵庫県教委
43	飾東3号墳	〃 飾東町春日野	分布地図
44	兼田3号墳	〃 糸引町兼田横山	〃
45	奥山大塚古墳	〃 〃 奥山	『兵庫県大百科辞典』

46	手綱山北丘A墳	姫路市延未	分布地図
47	西脇 2号墳	〃 西脇	『兵庫の遺跡 第9号』1986 兵庫県教委
48	長尾タイ山1号墳	龍野市揖西町長尾字タイ山	『長尾タイ山古墳群』1982 龍野市教委
49	籠子向イ山1号墳	〃 〃 籠子字向イ山	『籠子向イ山』(概報)1984 兵庫県教委
50	西宮山古墳	〃 龍野町日山五月山	『龍野市史』第1巻1978
51	中井 1号墳	龍野市龍野町中井字向山	『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和58年度』 1983 兵庫県教委
52	中井 2号墳	〃 〃 〃	〃
53	名草 3号墳	加東郡社町上三草字宮ノ山	『名草3号・4号墳』1984 加東郡教委
54	名草 4号墳	〃 〃 〃	〃
55	四ツ辻5号墳	〃 滝野町下滝野	『第7回特別展 北播磨埋蔵文化財展』 1985 西脇市郷土資料館
56	入角 1号墳	多可郡中町牧野字入角山	『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和56年度』 1981 兵庫県教委
57	黒田庄町小苗地区古墳A	〃 黒田庄町小苗	現地説明会資料1983 多可郡教委
58	喜多天神前古墳	〃 〃 喜多	『兵庫県大百科事典』
59	長尾 2号墳	佐用郡佐用町長尾	分布地図
60	通称梅林古墳	〃 佐用町	『三日月町史1』 1964
61	高畑第1号古墳	〃 三日月町新宿字高畑	『三日月町史1』 1964
62	高畑第2号古墳	〃 〃	〃
63	宮の裏古墳	〃 佐用町本位田	〃
64	宇原1号墳	穴栗郡山崎町宇原字中垣内	分布地図
65	五十波1号墳	〃 〃 五十波字中東	〃
66	加生 3号墳	〃 〃 加生	〃
67	金谷 1号墳	〃 〃 金谷	〃
68	殿様敷古墳	〃 〃 須賀沢	〃
69	中 古墳	〃 〃 中字水無シ	〃
70	権現山31号墳	揖保郡御津町中島権現山	〃
71	小丸山古墳	〃 〃 中島	『日本の古代遺跡3 兵庫南部』1984 保育社
72	姥塚古墳	〃 新宮町馬立字北谷	『新宮町史』第2巻
73	新田山6号墳	〃 〃 新田山	『新宮町史』第2巻
74	天神山古墳	〃 〃 宮内	『新宮町史』第1・2巻

75	袋尻浅谷3号墳	揖保郡揖保川町袋尻浅谷	『袋尻浅谷』1978 揖保川町教委
76	野々池沢3号墳	三木市志染町広野	『野々池沢古墳群』1970 三木市教委・三木市文化財保護委員会
77	正法寺山1号墳	〃 正法寺	『兵庫県 大百科事典』
78	タンダ山2号墳	加西市 市村	分布地図
79	狐塚古墳	相生市陵堂木	〃 『相生市史第1巻』1984
80	樫山44号墳	小野市樫山町字西坊塚	〃
81	実菜 古墳	美囊郡吉川町実菜字片山	『吉川町実菜古墳』1972 兵庫県教委
82	古市1号墳	〃 〃 古市字上寿和	〃
83	高松26号墳	西脇市野村町蔵谷	『西脇市史』1983
84	三木山1号墳	三木市福井字高野	『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和58年度』1983 兵庫県教委
85	尼ヶ谷2号墳	神戸市垂水区舞子町細道	分布地図
86	尼ヶ谷8号墳	〃	〃
87	西石ヶ谷3号墳	〃 〃 舞子陵舞子坂	『56年度神戸市埋蔵文化財年報』1983 神戸市教委
88	舞子毘沙門1号墳	〃 〃 舞子坂	『地下に眠る神戸の歴史展Ⅳ発掘調査速報展』1986 神戸市教委
89	鬼神山古墳	〃 西区伊川谷町北別府	『兵庫県大百科事典』

但 馬

90	三保東山古墳	朝来郡山東町三保	『三保東山古墳』1981 山東町教委
91	三町田古墳	〃 朝来町納座	『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和56年度』1981 兵庫県教委
92	春日古墳	〃 和田山町	『和田山町の文化財』 和田山町教委
93	春の木田1号墳	〃 〃 久田和字春の木田	『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』1983 兵庫県教委
94	観音塚古墳	養父郡養父町上野字平野	『養父・観音塚古墳』1980 養父町教委
95	西宮 古墳	〃 八鹿町八木小字西宮	分布地図
96	箕谷2号墳	〃 〃 小山字箕谷	『箕谷古墳群発掘調査概要報告書』1984 八鹿町教委
97	吉井 22号墳	〃 関宮町吉井小字栗谷	分布地図
98	相地5号墳	〃 関宮町関宮字下向田	関宮町史資料集第2巻 1980

99	万久里 5号墳	関宮町万久里字奥山	
100	二見谷 1号墳	城崎郡城崎町上山字二見	『二見谷古墳群』1975 城崎町教委
101	小見塚古墳	〃 〃 湯島小字大見塚	分布地図
102	ケゴヤ古墳	〃 〃 上山字シノキ	現地説明会資料 1984 城崎町・豊岡市教委
103	中野古墳群	〃 日高町橋本小字中野	分布地図
104	岩谷古墳	〃 〃 山本小字岩谷	〃
105	橋縫古墳	〃 〃 鶴岡小字森垣	『橋縫古墳・岩倉古墳群調査報告書』1976 日高町教委
106	岩倉 3号墳	〃 〃 粟栖野小字塚の本	〃
107	大節山 1号墳	豊岡市引野	現地説明会資料 1985 豊岡市教委
108	大節山 2号墳	〃	〃
109	大節山 5号墳	〃	〃
110	大節山 9号墳	〃	〃
111	立石105号墳	〃 立石	分布地図
112	八幡山6号墳	美方郡村岡町福岡小字八幡	『兵庫県大百科事典』
113	文堂 古墳	〃 〃 寺河内	『原始古代の但馬』 但馬考古学研究会
114	仮称 石寺古墳	〃 美方町石寺小字原田	分布地図
115	下油良	〃 香住町下油良	香住町誌 1980

淡 路

116	愛宕山古墳	津名郡五色町鳥飼	『五色町誌』1986 五色町
117	野田山古墳	三原郡南淡町賀集野田	『日本の古代遺跡3 兵庫南部』1984 保育社
118	ハバ古墳	〃 西淡町志知南	『原始・古代の淡路-淡路縦貫道に伴う埋蔵文化財速報展』1986 兵庫県教委

VI 庄境1号墳出土遺物の保存処理と化学分析

1 はじめに

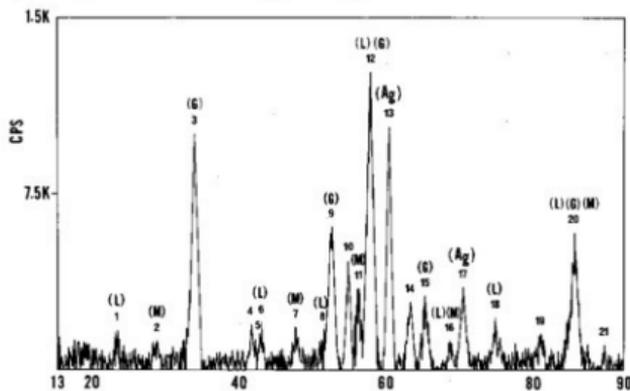
庄境1号墳出土の鉄刀は保存状態が悪く厚い錆で覆われていた。発掘調査中現地にて土落としと錆落としを行ったところ銹に象嵌とおぼしき銀線が1部認められたため、奈良国立文化財研究所にX線透過撮影と分析を依頼したところ、錆落としの段階で剥落してしまった部分もあるが、まだかなりの部分に銀象嵌が残存していることが確認された。そのため、保存処理担当の加古が、奈良国立文化財研究所遺物処理室の沢田正昭氏、肥塚隆保氏の指導と助言を得て保存処理を実施した。また、出土耳環の中に白色のものがあり、同様に分析を依頼した。

2 銀象嵌銹

No.	2THETA	INT.	FWHM	d	1/IO
1	21.200	170	***	6.223	14
2	26.580	122	0.180	4.980	10
3	31.660	1004	***	4.197	79
4	39.500	194	***	3.388	16
5	39.940	129	***	3.352	11
6	40.800	203	***	3.284	16
7	45.340	193	***	2.970	15
8	49.280	175	***	2.746	14
9	50.380	609	***	2.690	48
10	52.580	470	***	2.585	37
11	54.000	344	***	2.522	27
12	55.600	1273	***	2.455	100
13	56.160	1032	0.150	2.355	81
14	61.000	293	***	2.256	23
15	63.020	317	0.120	2.190	25
16	66.380	125	***	2.091	10
17	68.180	351	0.120	2.042	28
18	72.580	225	0.135	1.934	18
19	78.820	159	***	1.803	13
20	83.320	585	***	1.722	46
21	87.400	110	***	1.657	9

(L)-Lepidocrocite 鱗鉄銹
(M)-Magnetite 磁鉄銹
(G)-Goethite 針鉄銹

TARGET/FILTER(MONOCHR):Cr
VOLTAGE/CURRENT: 30KV 10mA
SLITS:DS .34 RS .34
SCAN SPEED: 5 DEG/MIN.
STEP/SAMPLING: .02 DEG
PRESET TIME: 0 SEC
SMOOTHING: 5
DIFFERENTIAL: 5
PEAK HEIGHT: 100
PEAK WIDTH: .1
BACK GROUND (SAMPLING): 15
BACK GROUND (REPEAT): 10



第63回 銀象嵌X線回折図

水酸化リ
チウム法に
て脱塩処理
を1ヶ月行っ
たのち、遺
物が脆弱な
ためにバラ
ロイドB72
-10%トル
エン溶液中
で減圧含浸
して仮強化
した。その
後実体顕微
鏡で小型グ
ラインダー
及びメスを
使用して慎
重に錆落とし
を行い、象
嵌を表出し
た。マイク

ロアナライザーによるX線回折結果では、象嵌は銀である。地金はかなり酸化が進んでおり、銅鉄鉱や針鉄鉱などの化合物も検出されている。破片となった部分で表出した象嵌の銀線はかなり腐食が進み、白濁して浮いた状態で剥落寸前であった。鈔側面と片面の磁鉄鉱でおおわれた部分の象嵌は良好な状態であった。象嵌抽出後、表面の剥落して亀裂が大きくはいっている部分には、ポンドールで充填し、NAD-10にて真空含浸を行った。

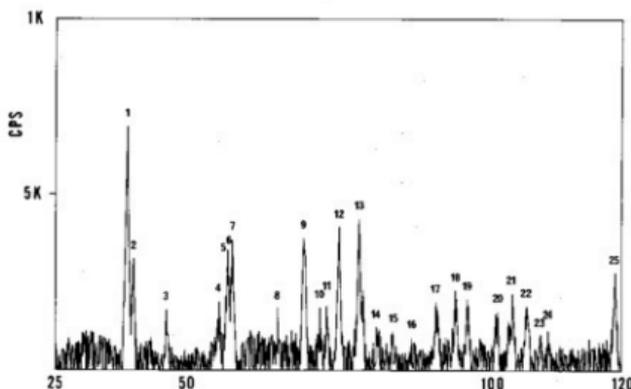
3 耳環

ベンゾトリアゾール3%メチルアルコール溶液にて脱塩処理後、慎重に表面の錆落しを行っ

No.	2THETA	INT.	FWHM	d	I/I0
1	37.240	689	***	3.585	100
2	38.300	319	***	3.490	47
3	43.820	170	***	3.068	25
4	52.700	196	**	2.579	29
5	54.040	342	**	2.520	50
6	54.680	324	**	2.493	47
7	54.840	353	0.150	2.486	49
8	62.580	91	***	2.204	14
9	66.960	372	**	2.075	54
10	69.580	177	**	2.006	26
11	70.600	183	**	1.981	27
12	72.740	402	**	1.931	59
13	76.160	430	**	1.866	63
14	76.500	118	**	1.790	18
15	81.840	110	**	1.748	16
16	84.920	95	**	1.696	14
17	89.080	196	0.150	1.632	29
18	82.220	226	0.120	1.589	33
19	94.320	201	0.120	1.551	30
20	99.260	110	0.150	1.503	16
21	101.940	219	**	1.474	32
22	104.300	180	0.105	1.450	27
23	106.620	108	**	1.428	16
24	107.900	116	**	1.416	17
25	119.160	278	**	1.328	41

TARGET/FILTER(MONOCHRO):Cr
 VOLTAGE/CURRENT:30KV 10mA
 SLITS:DS . 34 RS . 34
 SCAN SPEED:5 DEG/MIN.
 STEP/SAMPLING: 0.2 DEG
 PRESET TIME: 0 SEC
 SMOOTHING: 5
 DIFFERENTIAL: 5
 PEAK HEIGHT: 1.00
 PEAK WIDTH: 1
 BACK GROUND (SAMPLING): 1.5
 BACK GROUND (REPEAT): 1.0

たところ、
 銀環と、銀
 環の表面に
 鍍金を施し
 た金環と腐
 蝕の甚しい
 白色環の3
 種類があっ
 た。この白
 色の耳環は
 マイクロア
 ナライザー
 によるX線
 回折で炭酸
 鉛であるこ
 とが確認さ
 れた。この
 ため、鉛環
 が酸化して
 白濁色の粉
 状に変化し
 たものと推
 定できる。



第64図 耳環X線回折図

Ⅶ. 弥生時代の遺構と遺物

1. 遺構

墳丘や石室内埋土中から石炭や弥生土器が出土しているため、近辺に同時期の遺跡があることが想定された。墳丘を全て取り除き、黄褐色礫混りシルトの地山面に遺構が検出された。石室前方のやや北側に検出された竪穴住居址は緩斜面に構築されており、斜面下方は後世の攪乱などで流出している。復元直径約5.7m、周壁の高さ約0.4m。周壁溝は明確なものとは確認できなかった。柱穴は6ヶ所あり、おそらく4本柱の上屋をもつものだろう。ほぼ中央に直径約0.75m、深さ約0.45mの土壇があり周辺床面が焼土化していた。床面には一部ではあるが炭化材が残っており、焼失住居の可能性が高い。

古墳の南側数10メートルにある切り通し面からも土器が見つかったこと、2号墳の調査の際には同時代のものが出土していないことから、弥生時代の集落は尾根の南側斜面にひろがっているものと考えられる。

2. 遺物

出土遺物量は多くなく、その上小片が多い。石炭1点のほかは土器である。土器は図化したもの11点、拓本を採ったもの6点で、器種は壺・甕・鉢・高杯・甔である。土器は小片の上、磨滅を受けており成形技法などの観察には適しておらず、全体像を把握するものもない。

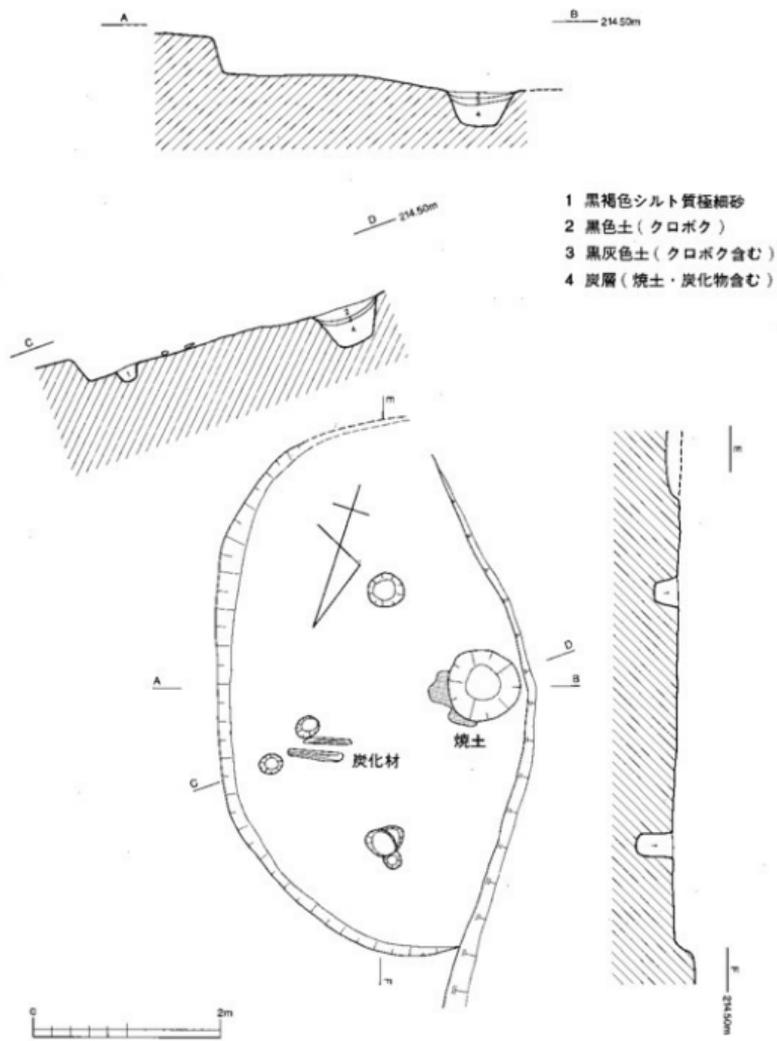
壺 (第66図1～4、11、第67図)

(1)は図化出来た唯一の住居址出土土器である。中型の壺の口頸部で整形は粗雑で、外面は粗いハケ整形(4本/cm)で内面はユビ整形のまま、口縁部のみヨコナデで仕上げている。内面に1条緩い凹線状にヨコナデによる窪みがある。窪みより上の口縁部は外面と同じハケで整形したのちヨコナデが施されている。口唇部は僅かに肥厚しており、その部分は粘土を付加している。色調は外面黄褐色、内面赤褐色でチャート・長石の砂粒を含み、焼成は良好である。口径18.0cm、残存高7.3cmを測る。

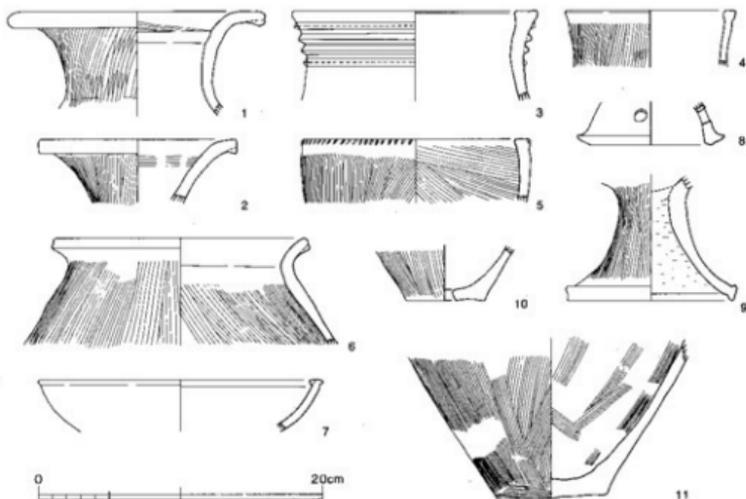
(2)は(1)と技法的に似かよっており同一工具で整形されたと思われる。復原口径14.0cm、残存高4.5cmを測り、器表は黄褐色、器内は黄白色である。

(3)は直口壺の口縁部で4条の貼付突帯を施しているが上下の2条は欠失している。突帯はヨコナデののち付加しており、断面は三角形を呈する。内面はユビ整形ののち斜め方向のナデで仕上げている。色調は淡赤褐色～黄褐色で砂粒含む。口径17.2cm、残存高6.4cm。

(4)も直口壺の口縁部と思われるが小片のため断定は出来ない。外面は粗いハケで整形しており、口唇部と内面はヨコナデで仕上げている。色調は黄灰色で復原口径12.0cm、残存高4.0cmを測る。



第65図 住居址実測図



第66図 弥生土器実測図

(1)は底部で底径7.8cm、残存高11.3cmで黄灰色を呈する。チャート・長石の小石粒を多く含み焼成は良好。内面はユビ整形しており、外面は全体にナデで仕上げている。底面もナデ仕上げ。底部はユビで成形しており、その際の成形痕が残っているため、底部円形でなく稜線が見られる。

鉢 (第66図5)

口縁が直立する鉢で、口唇端部に刻目文を施す。外面は6本/cmのやや粗い斜行のハケ整形しており、内面もハケ整形している。口唇部周辺はヨコナデで仕上げる。口径16.0cm、残存高4.5cm。色調は外面黄褐色、内面灰褐色で砂粒を含む。

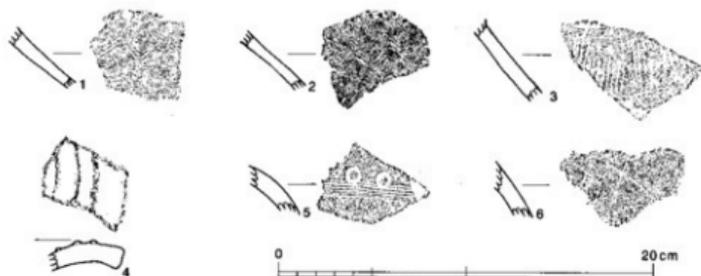
甕 (第66図6)

甕の上半部で内外面とも粗いハケ整形したのち口縁部だけヨコナデをしている。砂粒を含むが胎土は緻密で焼成良好。外面は茶褐色で内面は淡赤褐色。口径18.0cm、残存高7.5cm。

高杯 (第66図7～9)

(7)は杯部で口唇部は内側に肥厚している。表面磨減が著しいが、器表はヘラミガキで仕上げられたものと思われる。口唇部と外面はヨコナデがなされている。口径20.0cm、残存高3.6cm。色調は赤褐色でチャートなどの砂粒含む。

(8)は脚台で、胎土も緻密で焼成も良い精製土器である。外面端部は粘土が剥離しており、内



第67図 弥生土器文様拓影

面はヘラケズリ状の石の動きが見られるが小片のため明らかでないため、ユビによる成形と考えておく。ユビ成形・仕上げののち透孔を開けているが、数は不明。色調は外面黄褐色、内面淡赤褐色、器内黒灰色。

(9)も脚台で円板充填法の高杯であるが、円板部は欠失している。仕上げは粗く、外面は5本/cmのハケ整形のままで、内面はヘラケズリののちナデ整形している。裾径12.0cm、残存高8.8cm。色調は黄褐色でチャート・長石の砂粒多く含む。

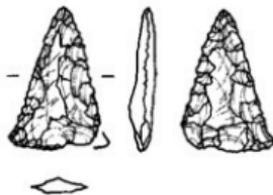
甗 (第66図10)

壺形土器の底部を焼成前に穿孔した底部である。色調は外面茶褐色、内面は黄灰色。小石粒を含み、焼成は良好である。内面はユビ整形で底面もユビ仕上げ、外面は5~6本/cmの粗いハケ整形。底径5.4cm。孔径0.8cm。残存高3.8cm。

石鏃 (第68図)

墳丘の表土中から1点出土している。凹基無茎式であり、脚部の一方を折損している。石材は、二上山産ではないと思われる結晶質の目立つツヌカイトを用いている。

調査加工は、全面に細かな剝離を施しているが、両面の中央には調整前の剝離面がやや大きく残されている。基部には、数回の小さな剝離により、わずかに扶りを作り出している。全長2.5cm、残存1.7cm、厚さ0.4cm、残存重1.1g。



第68図 石鏃実測図

(石鏃の項を大下明が、他を渡辺が執筆した。)

VIII. おわりに

庄境1号墳は、実働29日間の調査で後期古墳1基、弥生中期堅穴住居跡1棟、中近世墓11基を調査し、前述したとおり個々に成果を挙げている。各時代について概述してみると中近世墓は11基調査し、4つのタイプに分けることが可能である。主に上部構造から分けられ、出土量は少ないが、遺物の検討から12世紀後半と15世紀前半～16世紀前半の2時期の中世墓と17世紀後半から19世紀前半にかけての近世墓に分けられる。さらに墳丘上には現代に至るまで連続と墓が営まれており、石室石材を利用した墓もあり、外護列石付近にあり、一部は墳丘外でも検出している。中世墓が墳丘上にあり、近世墓は墳丘外や墳丘内でも裾部に位置する傾向にある。2号墳も中世墓が1号墳同様築かれていたが、石室内にも及んでいる。石室内は墓地として使用していない。50cm前後の堆積土があり、北宋銭1枚しか出土していない。天井石も取り除かれていた状況なので、石室そのものの保存状態は2号墳の方が良好な状況であったと思われる。墳裾外に敷石状の集石が広がっており、数点の出土遺物から平安時代後期の遺構と考えられるが、性格は不明である。今後の問題点として残しておく。古代末以来、ほぼ現代に至るまで庄境1号墳墳丘は主に墓地として使用されていたことになる。

庄境1号墳は、2基で構成された後期の古墳で楕円形から延びる丘陵上に立地している。10m前後の円墳で無袖式胴張りの横穴式石室を埋積土体としている。墳丘は地山の削り出しからも規模を決定出来るが、外護列石が巡らされていることから明瞭である。外護列石は残存状態が悪く保存度が良好なところでも5石目までしか残っていない。急角度の垂直に近い列石で、角度が急傾斜なため、墳丘規模は小さくなっている。石室規模にくらべて墳丘径が10mと小さいのは、列石を有するからであろうと思われる。完存している2号墳が開口部につながる隅円方形の列石をもっており、1号墳もタイプは同様と考えられるが、平面プランでは円形に近いものである。この差は、構造の個体差か時期差を示すものかは判然としない。

石室は在地の流紋岩を使用し構築されており、平面プランは特徴的である。開口部付近は残存していなかったが、全長6m前後の無袖式石室と想定される。奥壁部での幅1.75m、最大幅2.1mの胴張りの平面プランをとっている。平面プランで類似するのは、篠山盆地北東部にある地藏山古墳(篠山町垂水)である。全長5.4m、奥壁での幅1.55m、最大幅1.9m、開口部の幅1.65mと胴張りの石室で共通点が認められる。しかし、用石法は異なっており、大形の石材を使用した巨石墳で視覚的に石室は全く異なった印象を受ける。しかし、計測してみると胴張りの近いタイプの石室であることが分かる。1枚石を基本とした用石法を新しい様相と見るならば、庄境1号墳より後出する古墳と考えられる。奥壁や側壁の状況からは、袖を有する石室となるのが本来の姿と考えられるが、何らかの意図によって墳丘規模とともに縮小した古墳

となつてもと思われ、石室プランと外護列石は緊密な関係にある。古墳規模の縮小はある意味で規制が加えられたと解する方が自然と思われる。具体例を欠くが、今後の問題点としておきたい。

弥生中期の住居跡の検出も大きな成果である。周辺からは石剣をはじめ同時期の土器類も採集されているが、遺構の検出は初めてである。水田部分の確認調査では遺跡は確認されておらず、住居跡を丘陵斜面に求められるのであろうか。今までの採集結果と確認調査結果から考えるとそのように考えざるを得ない。しかし、水田部分において路線部分については遺跡は確認されなかったが、周辺の微高地などに存在する可能性は十分に考えられる。庄境1号墳下層の集落は、立地からみて大規模な集落は考えられない。丘陵斜面の立地の良いところを居住地として選んだ小集落なのであろうか。調査した住居跡は炭化材を確認しており、焼失住居の1例を加えたことになる。

昭和59年度は兵庫県教育委員会の発掘調査の歴史のなかで最も多忙を極めた年であり、調査に追われた年であった。そのため、庄境1号墳の調査も急遽、山陽自動車道の調査を中断して実施した。1月中旬からの厳寒期の調査で、調査員は各々調査報告書作成にも追われ、精神的に過度の調査であった。3人で担当したが、三田市城、吉川町域の確認調査と平行し、報告書作成作業も合わせて行ったため、逆に印象深い遺跡となった。その段階では精力を注ぎ込み、最大限の調査を実施したつもりであるが、やはり積み残した問題点もあるように思われる。今後の研鑽の糧とするとともに御教示戴きますようお願いいたします。調査にあたり、日本道路公団大阪建設局三田工事事務所、今井工務課長、西山庶務課長をはじめ担当の方々に多大な協力を得た。工事関係者の方々からも重機の使用など協力を得た。調査に参加戴いた多くの方々の協力があって何とか庄境1号墳の調査事業を終了出来たことを喜びとし、今後社会教育資料として活用されることを期待して結びとしたい。



古墳群周辺空中写真



庄境古墳群遠景 (北西から)



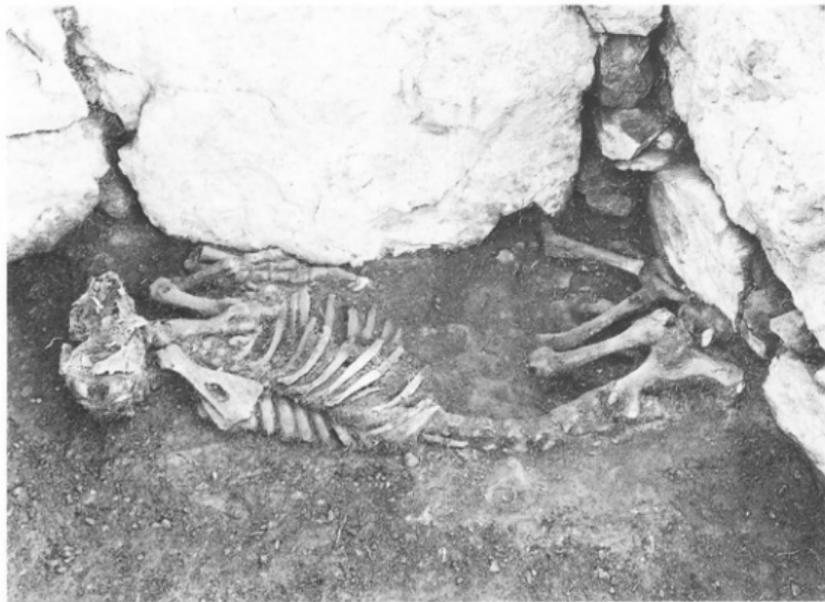
庄境古墳群遠景 (南から)



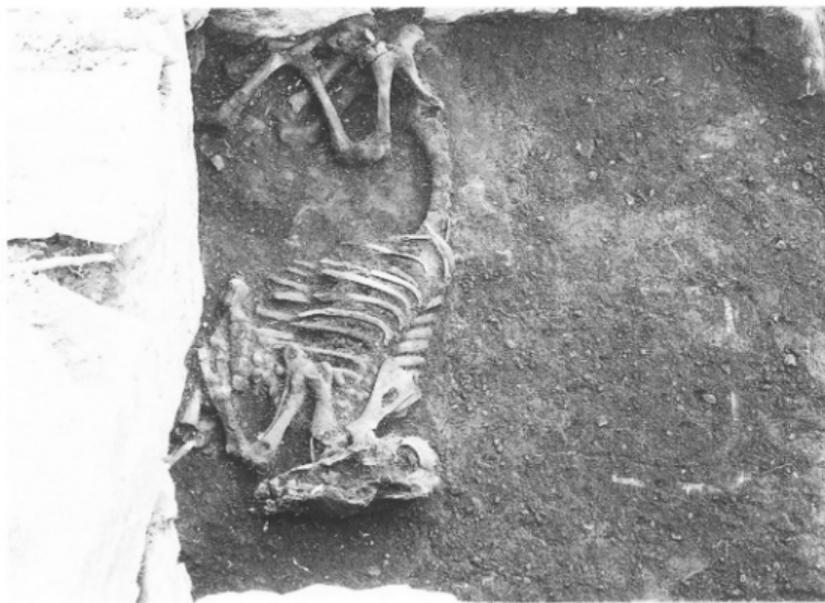
古墳群全景 (調査前・1982年撮影)



古墳群全景 (2号墳調査後・1982年撮影)



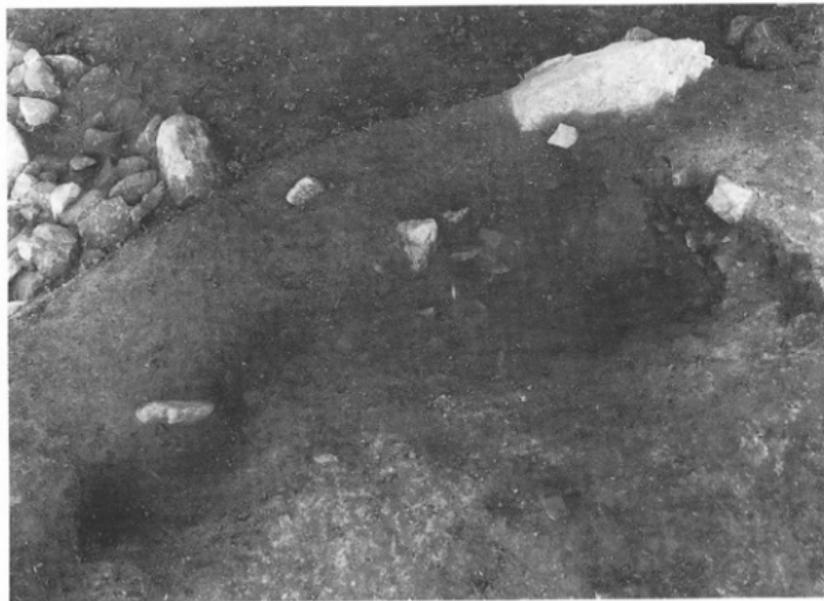
石室內牛骨檢出狀況



石室內牛骨檢出狀況



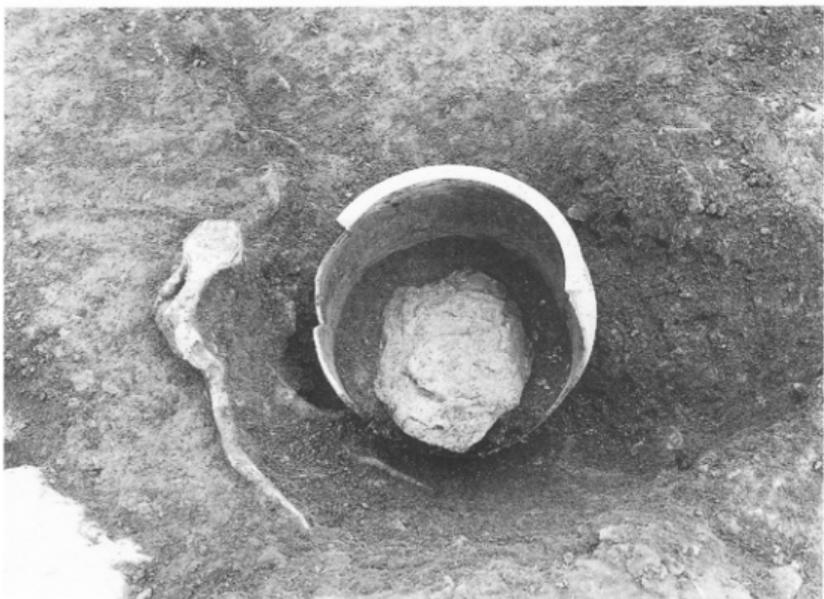
1·2号墓検出状況



1·2号墓完掘状況



4号墓検出状況



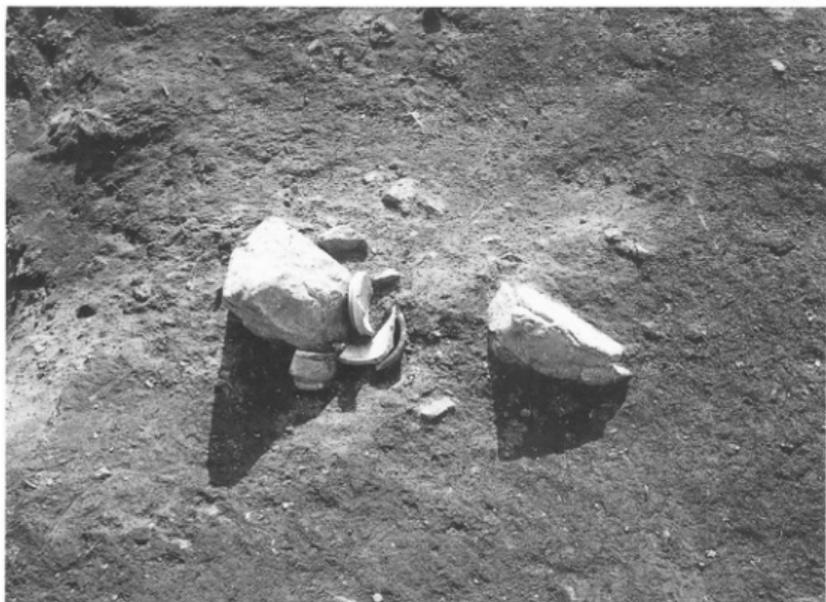
4号墓完掘状況



5号墓検出状況



6号墓検出状況



7号墓検出状況



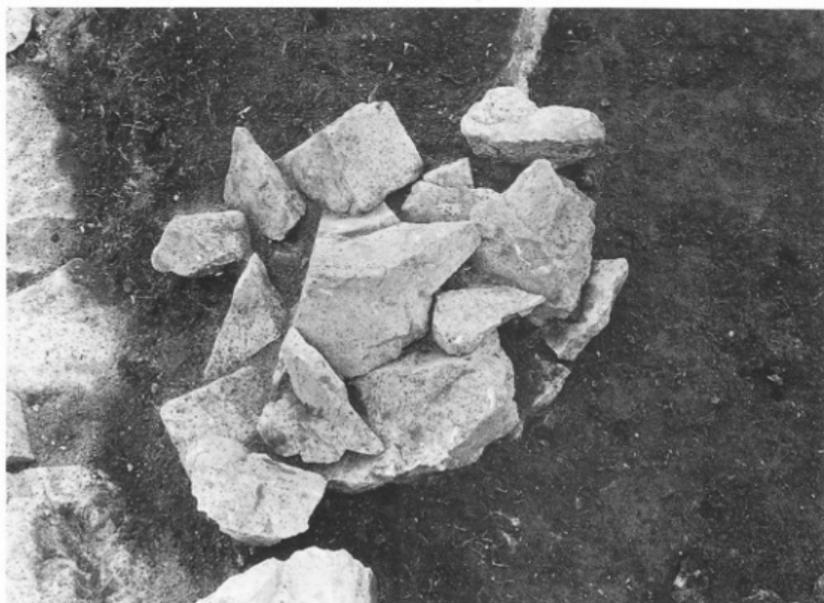
7号墓完掘状況



8号墓袂出状况



8号墓断面



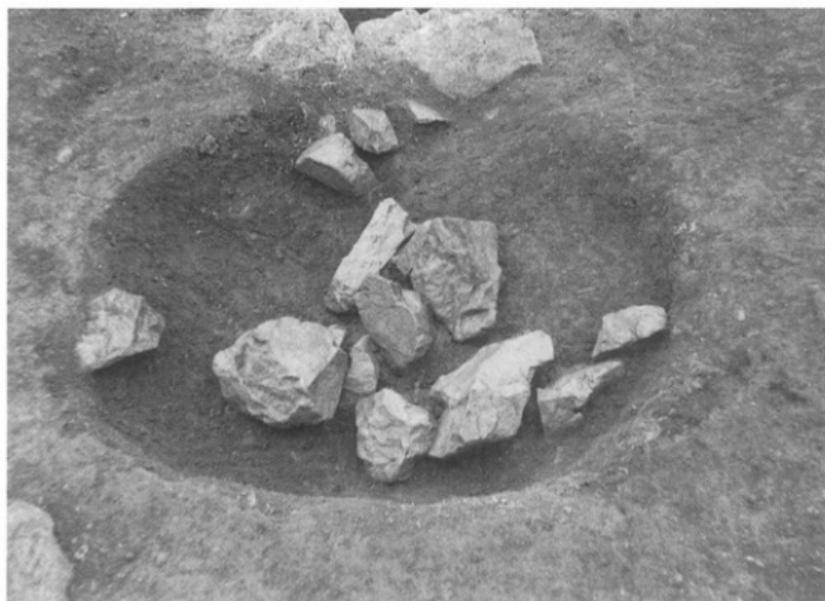
9号墓檢出狀況



9号墓完掘狀況



10号墓檢出狀況



10号墓完掘狀況



墳丘断面 (東側)



外護列石



石室堆積状況



古墳全景 (南から)



古墳全景（西から）



古墳全景（東から）



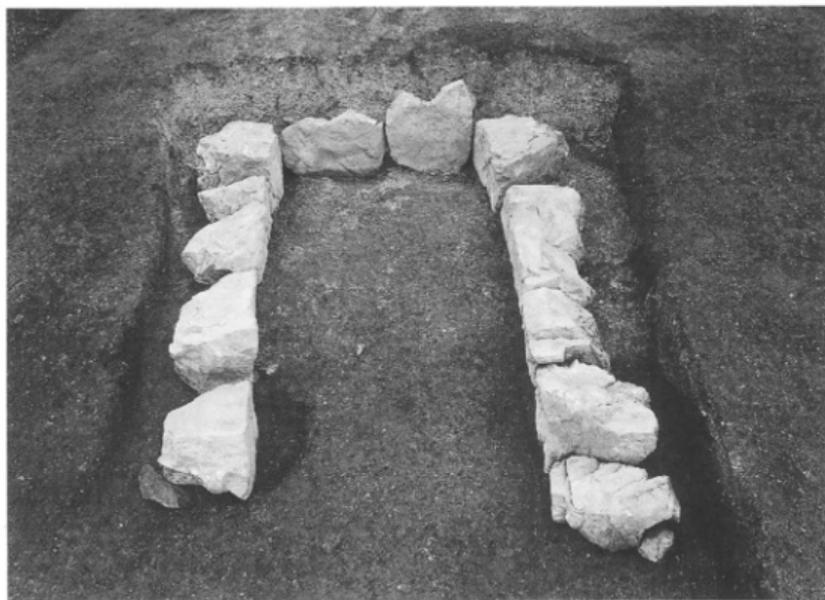
奥壁



北側壁



石室全景



石室基底石

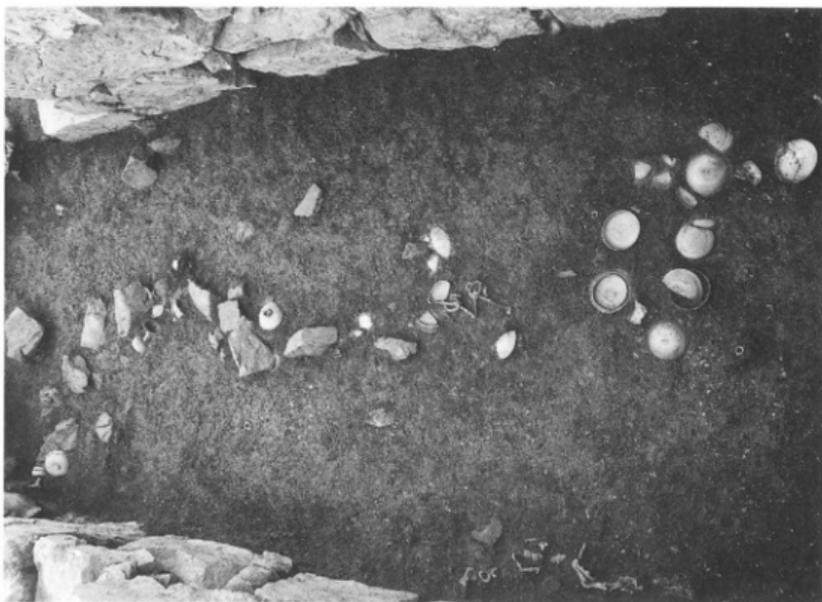


墓壇の裏込状況



第2次床面遺物出土状態







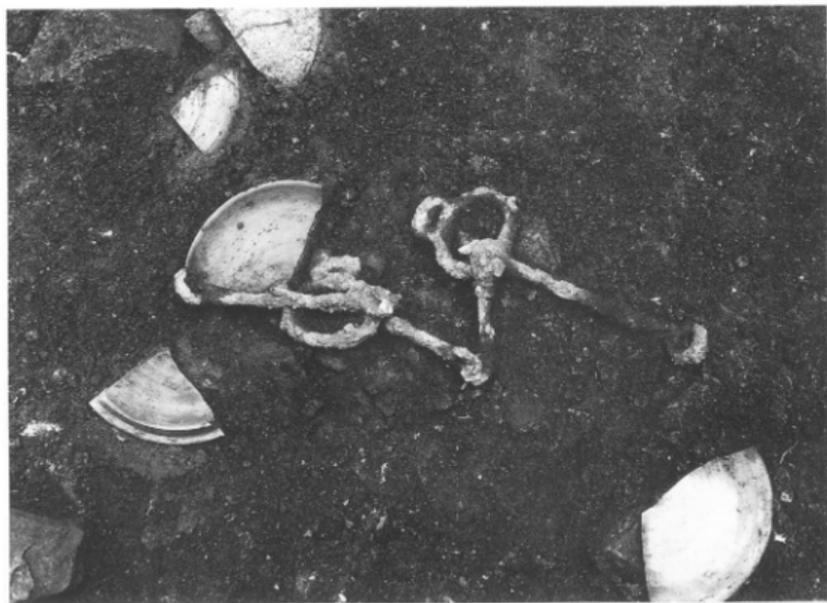
第1次床面遺物出土狀態



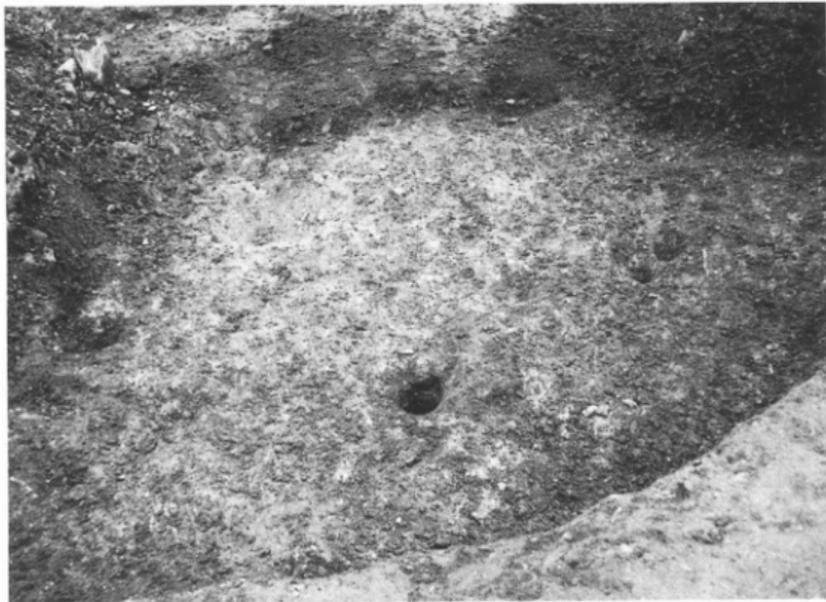
第1次床面遺物出土狀態



第1次床面遺物出土狀態



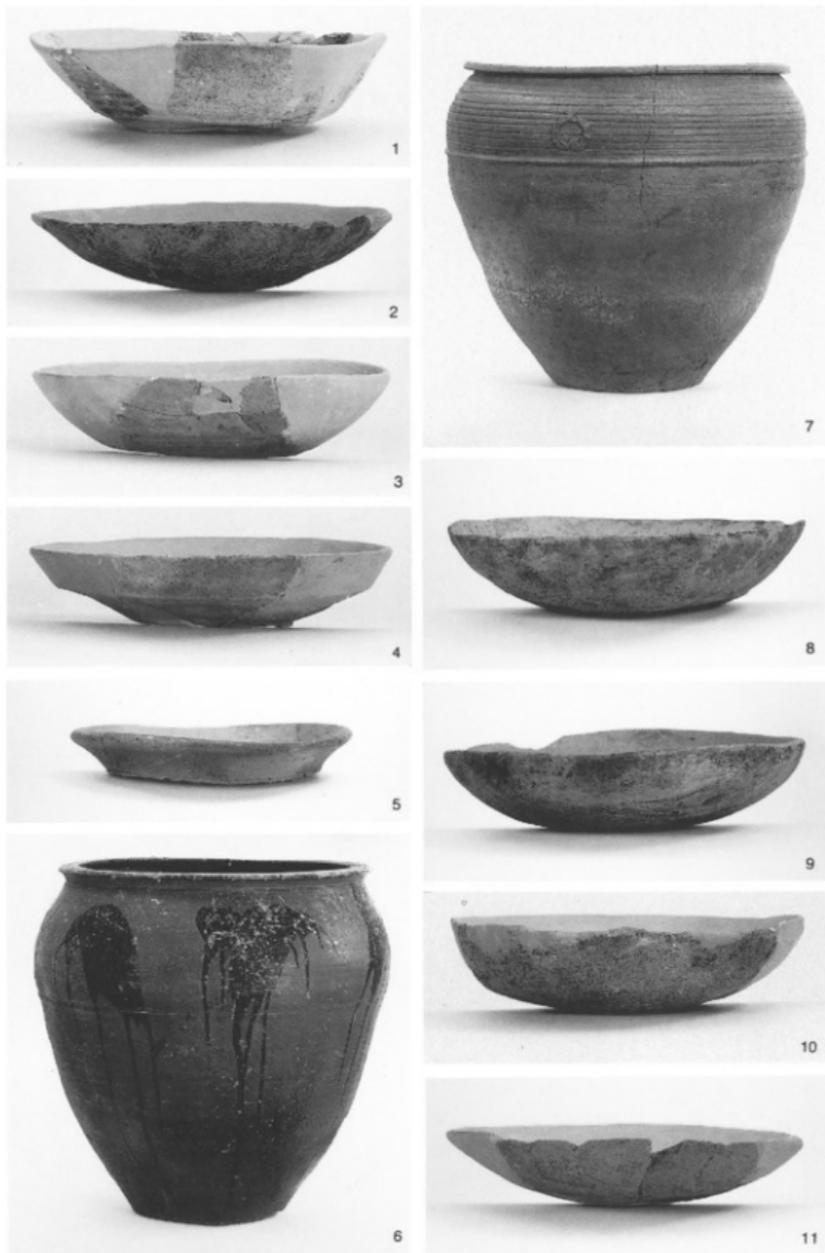
第1次床面遺物出土狀態



弥生時代 住居跡



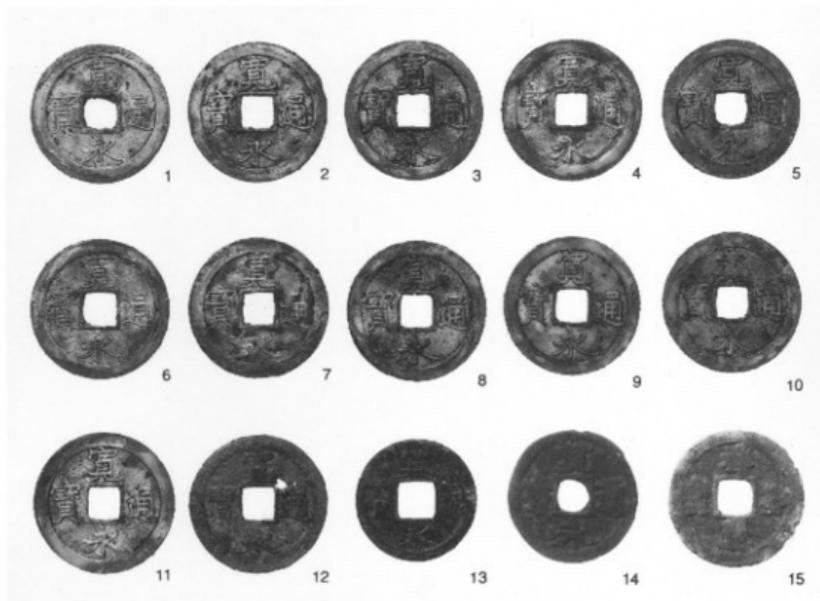
住居跡床面 土器出土状態



2号墓 (1) 3号墓 (2・3) 集石2 (4) 集石1 (5)
 4号墓 (6) 5号墓 (7・8・9) 8号墓 (10) 遊離遺物 (11)



7号墓 (1・2・3)



7号墓 (1~12) 南側填据 (13) 石室埋土 (14) 石室内 (15)



1



2



3



4



5



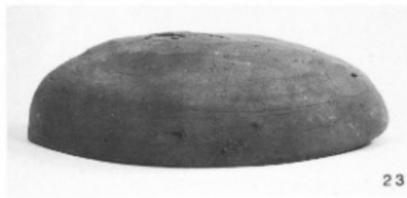
6



7

6号墓 (1·4) 遊離遺物 (2·3·5) 採集遺物 (6·7)







27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



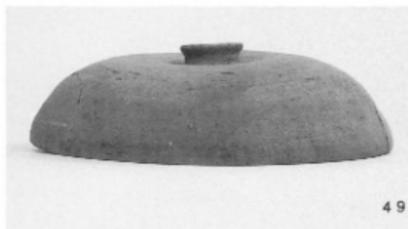
38



39



40







59



60



61

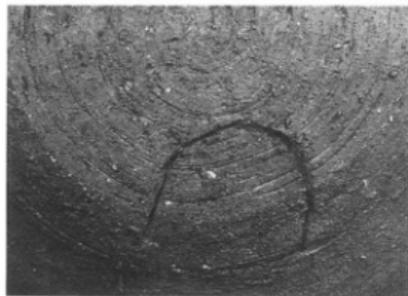


61の土器に残された靨痕



62

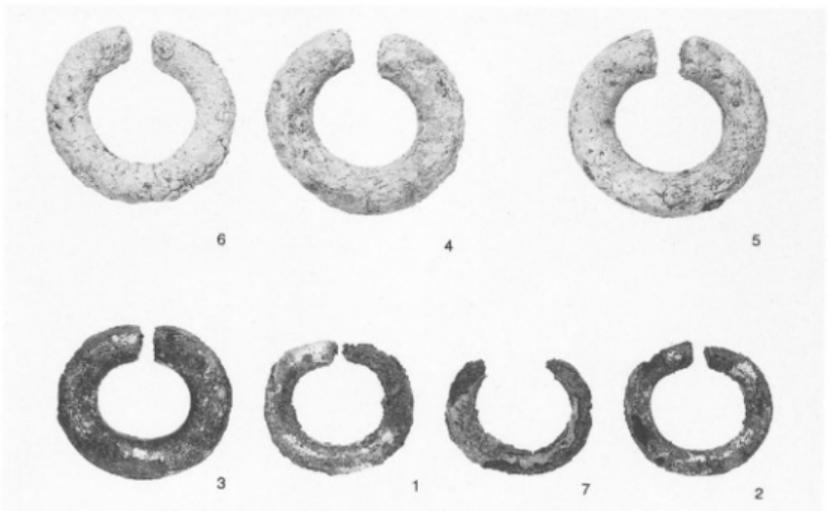
古墳出土土器 (須恵器)



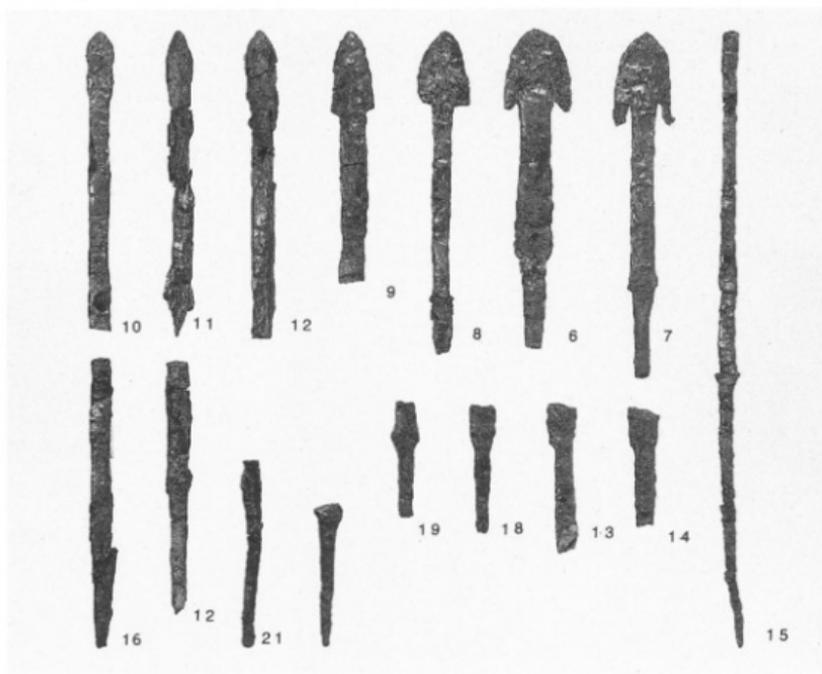
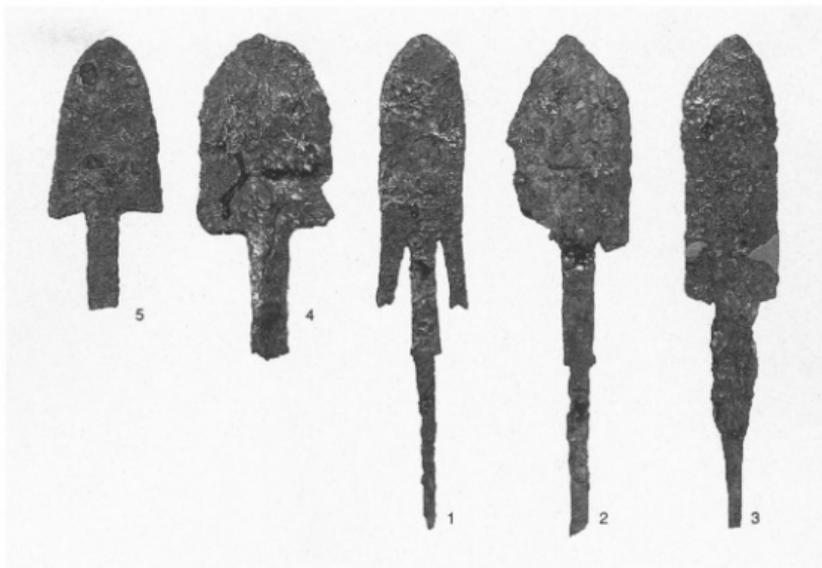
古墳出土土器 (ヘラ記号・製作技法)



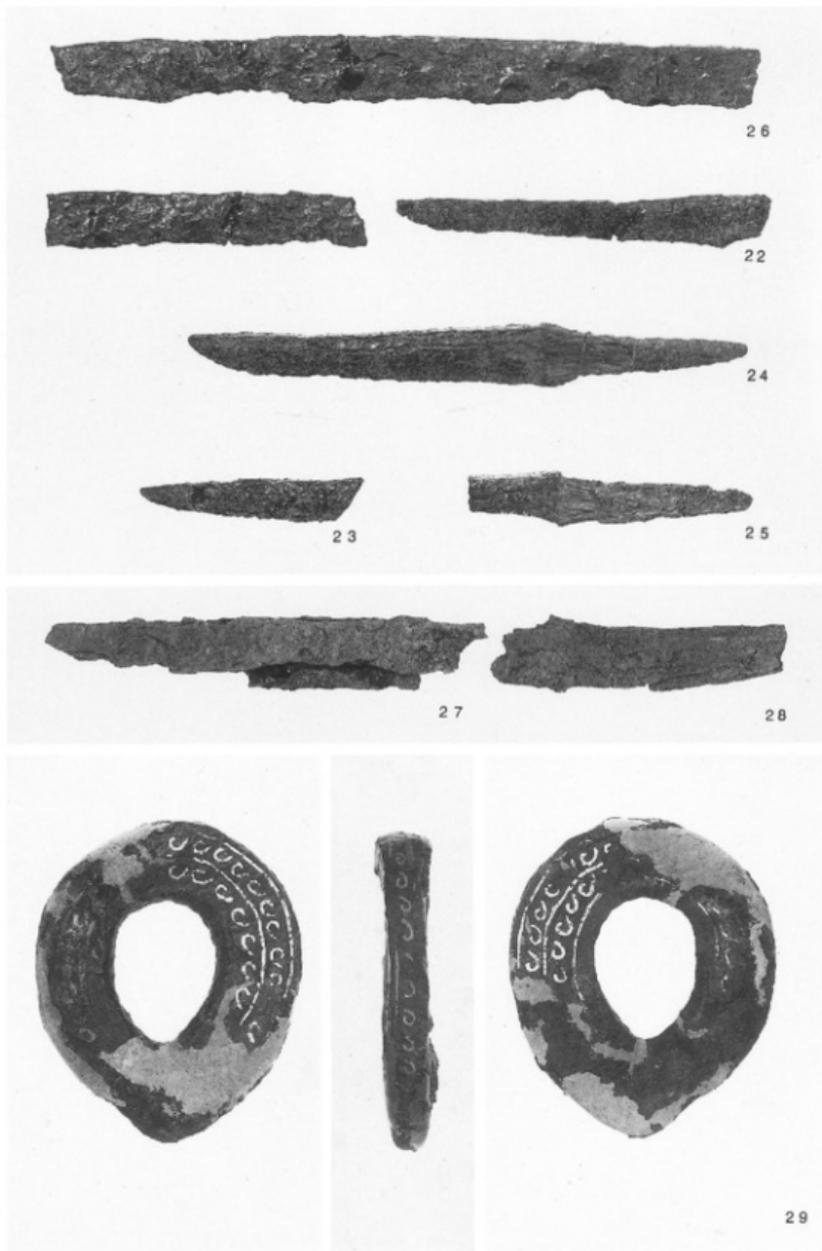
古墳出土土器 (土師器)



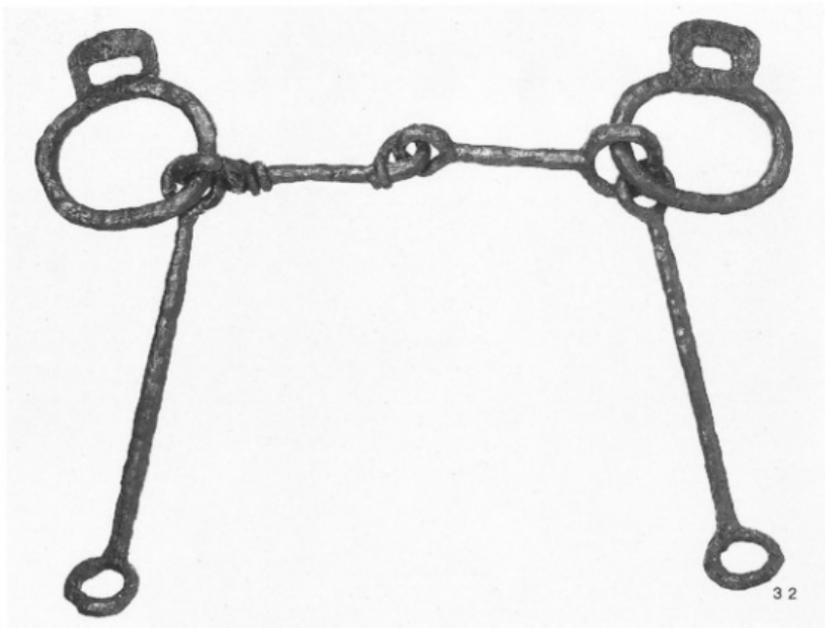
古墳出土耳環 (保存処理前)

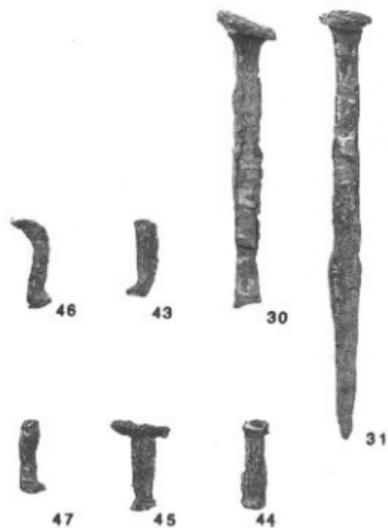
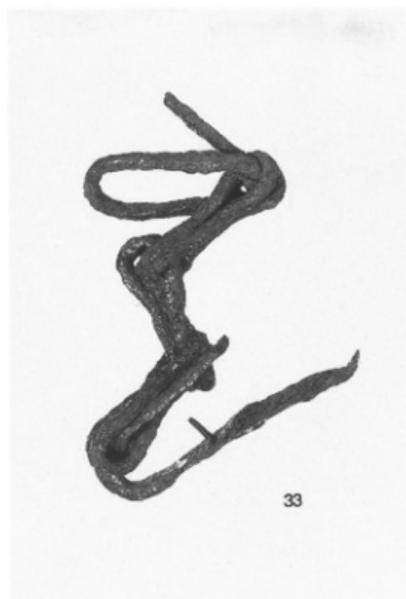
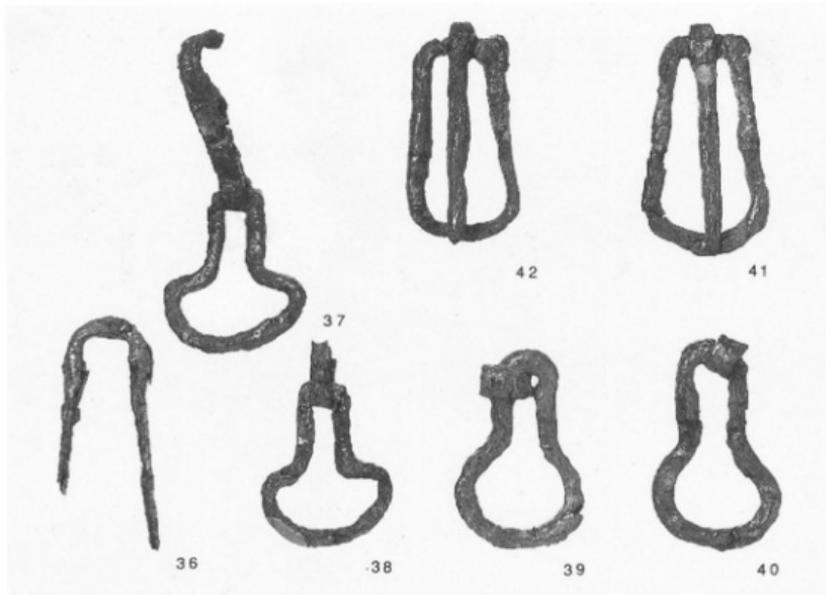


古墳出土鉄器 (鉄箭)

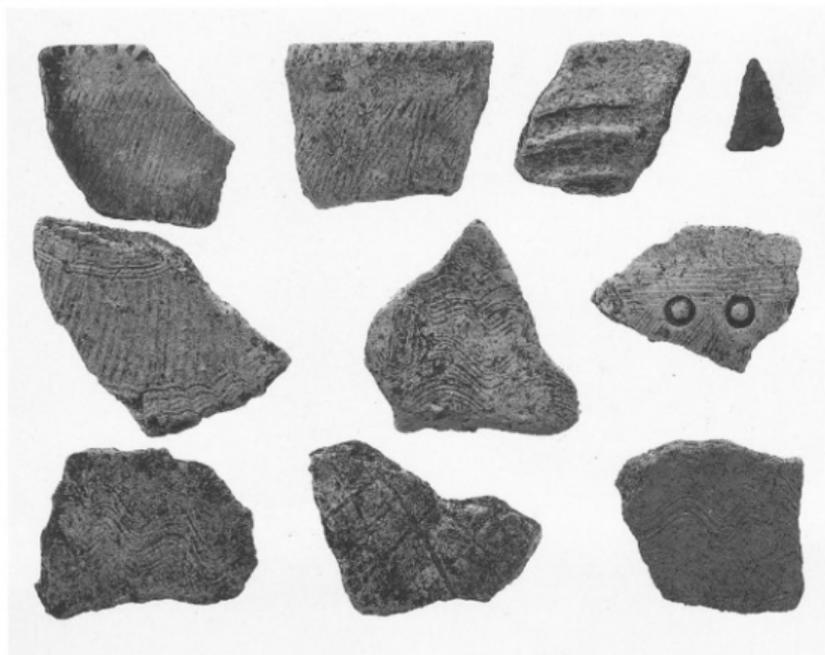


古墳出土鉄器 (刀・刀子)





古墳出土鉄器 (馬具・釘)



兵庫県文化財調査報告書 第41冊

1987年2月28日 発行

庄境1号墳

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒650 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL (078) 341-7711

印刷 大神印刷株式会社

〒650 神戸市中央区港島中町2丁目2番1-5

TEL (078) 302-2700
